913.54
H135n
H
07285296

複写

エト2M-38

博文館編輯局校訂

校訂 人情本傑作集 上卷

東京 博文館藏版

913.54 H135n H

帝國文庫第二十九編

解題

本編を人情本傑作集といふこと、只通俗の稱呼に從ひたるなり、今の所謂人情本を古くは洒落本と稱へたりしが。文化の頃よりや人情本の名を負ひたりけむ、爲永春水は自ら江戸人情本作者の元祖とは稱へたり、多く綠情紅思の談を寫すをもて斯くは名つけしものならんも、極めて妥當なる名稱とも聞えず、但し因襲の久しき今更に新稱をも下し難ければ姑く世間の通用に從ひたるのみ、

同しく人情本と稱ふるものゝ中、徒に冶情淫を誨へて或は風紀名教に害あるものも少からず、是等の書は本編の斷じて採らざる所なりとす

假名文章娘節用　曲山人の著にして三編以下は三文舍自樂と署せり、

913.54
H135n
H

国立国会図書館

国立国会図書館
28.1.-6
図書館

285296

されど娘太平記操早引（次編に收む）の序に松亭金水の云、「吾友なる曲山人別名を三文舍自樂といふ、性來筆道に巧にして文をよくし畵を能くす、且世間の人情に渉りて常に流行の書を著し、其名おさ〳〵聞えたりしに、惜哉沒故して」云々といへれば其同人たること知るべく、且此序を草したるは天保八年の正月なれば、其死の天保六七年の交にあることも亦推知すべし、此書は小三金五郎の名を以て久しく江湖に愛玩せられしもの、蓋し人情本中の一巨擘たり、されど作者曲山人の傳記は已れ未だ考へ得ず

清談和歌翠　亦右と同一の作者の手に成る、其實は爲永春水なりともいへり、前書の續編ともいひつべきものなり

女今川　こは南仙笑枡人の作とあり、されど初代の南仙笑は早く已に

物故したるなれば、二代目南仙笑の著なりと知るべし、二代目南仙笑は爲永春水が若き折の號なり、春水の傳は曩にそが傑作集（帝國文庫第拾編）の初にも記したれど、今青々園主人が物したる評論の一節を玆に錄して補足となすべし、曰く

洒落本の一風、明和より起りて、俗談を以て俗事を綴り出たせしは主實小說の權輿とすべけれども、未た主人公なく脚色なし、其後金魚が虎の卷、谷峨が二筋道に至り、始めて稍小說の躰をなし、爲永が人情本に至りて漸く大成せり、春水梅の春の中に已が作意を述べて曰く

（上畧）亦作者の筆くせにて當時の人情に當らぬ所は例も夢を芝居の旨趣に綴りて本文の助とせり、（中畧）稍ともする時は八文字屋の古きが種にほしくなり、淨瑠璃本の趣向を借りたくなり、歌舞伎の正本

を用ゐたくなれど、人情一家の風調を改めず、只今の世の中にありさうなる縡を綴り出さんとすれば、(中略)止むことを得ず卷毎に夢てふものを頼とせり

所謂今の世の中にありさうなる事を綴り出ださんために彼が苦心せしこと見るべし云々

春秋二季草　一二編は三亭春馬の作、三編四編は松園梅彦、五編は竹庵梅彦作と記しつれど、自序によりて考ふるに都て同一の人なるべし、春馬は初め新吉原京町一丁目の娼家大文字屋の養子となりて大文字屋市兵衛と稱し、狂名を加保茶浦成といひしが後に元成と改め、天明の頃有明なりし加保茶の市兵衛の後を襲ぎしが、又出てゝ淺草山谷町に住めり、狂歌は淺草庵春村に學び、戯作は十返舍一九の門人にして九

返舍一八と號せしが、後にまた十返舍一九となのる、蓋し第三世の一九なるべし、八文字屋自笑と號せしこともありしとなり

孝女二葉錦　梅暮里谷峩の作を爲永春水增補したる由に書けれど、其實は春水の作にして、谷峩の名を冒したるものといへり、谷峩の二筋道に續けたるものなり

所縁の藤浪　二代目十返舍一九の作なり、二代目一九は下野の人にして、通稱を糸井鳳助といひ、十返舍の門に入て十字亭三九と號したるが、後に十返舍の號を襲ぎたるなり、初は二世柚人即ち春水の門人なりしといふ、

由佳里の梅　例言にも言へる如く虎の卷、二筋道などに倣ひたるものにして、卷中に作者の名を記さゞれども、恐らくは亦春水の作なるべ

じ

春色戀白浪　爲永春水の作なり

博文館編輯局に於て

明治二十七年九月

蜃氣樓主人識

人情本傑作集上卷

總目次

假名文章娘節用……（曲山人）……一
清談若緑……（曲山人）……一三九
婦女今川……（南仙笑楚滿人）……二八五
春秋二季種……（三亭春馬）……四一三
孝女二葉の錦……（梅暮里谷峩）……六〇三
所緣の藤浪……（十返舍一九）……七一一
由佳里の梅……（爲永春水）……八〇五
春色戀志良那美……（爲永春水）……九三一

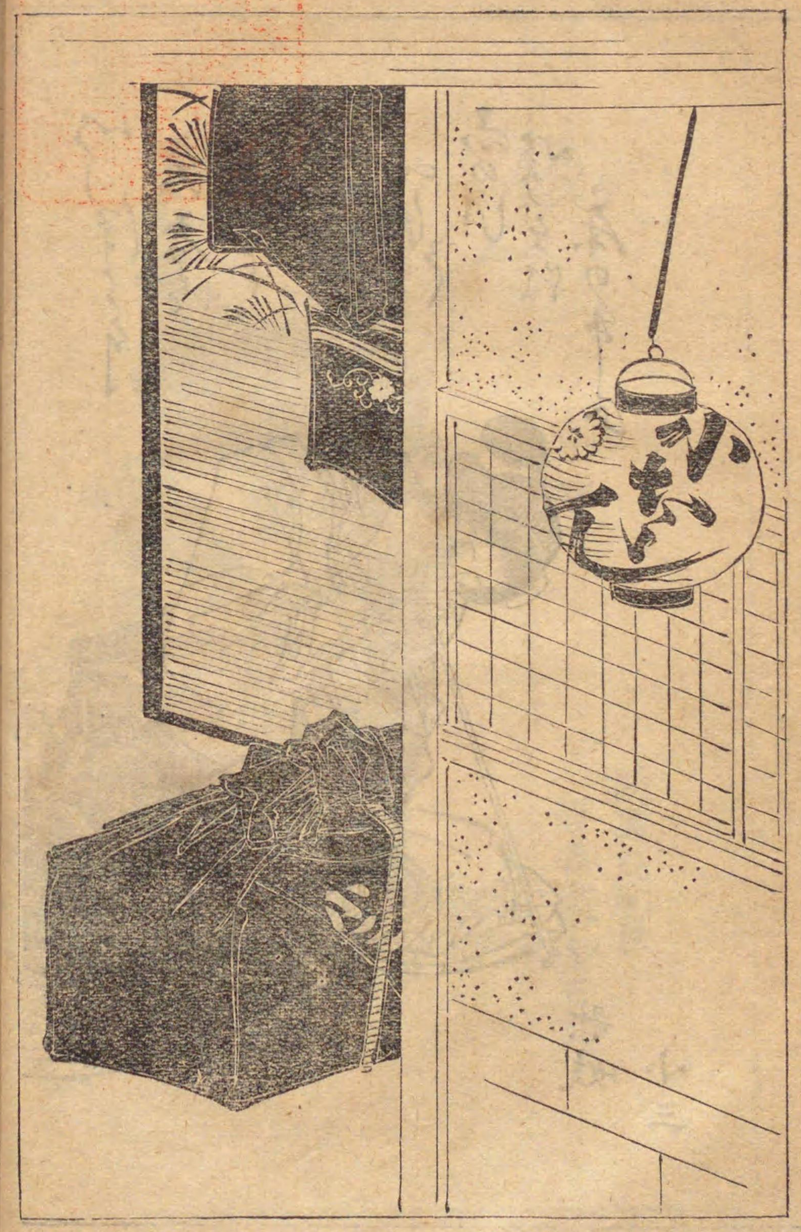
そも〳〵男女のなからひは。八百萬の神達の。出雲の御社に群つどひて。結ぶえにしのさま〴〵なる。竈の前の三介が。相模出生のおさん殿と。物置の出合の國訛。片言まじりの口說事。寡婦と養子の芋田樂。喰はぬは損者のびんづる隱居が。むしろやぶりの女ぐるひ。あるは帶屋の長右衛門か。老實をして筥入の。お半の壺へくらひ込。浮名を桂川に流せしも。皆こと〴〵く緣なるべし。こゝにあらはす一部の册子は。いかなる人の筆に稿けむ。小三金五郎が一期の奇譚を。いと長〳〵しく綴りたるを。書肆のもて來て。補ひてよと。需めにまたがひ。をこがましくも。いさゝかこれに筆を加へて。櫻木に壽くとはなりぬ

文政拾四年辛卯孟陽

江戸　文盲短齋しるす

斯波の家臣
假名家金五郎

歌妓
小三



小三金五郎

假名文章娘節用前編上卷

はつたん

江戸　曲山人補綴

太刀は大山石尊の。さゝげ物に納れば長刀はひやめしの。草履にその名を止めたり。弓は矢場のあねさんが。活業の助となれる靜けき御代のとなん。斯波家の藩中に。假名屋文字之進といへる者あり。二人の男子ありけるが兄は文之丞といひ。弟は文次郎と喚なして。兩人ともに文武の道を。常にはげみて勤めしが。兄文之丞はいつしかに。奥づとめの御側玉章といへる容貌よき女と人まれず。契りをこめてかたらひしが。日にまし互ひに思ひつのりて。忍のび〳〵の密話に。玉章はいつか只ならぬ懷妊の身となりけるにぞ。此事今にもあらはれなば。とても添事なりがたしとおもへば二人ひそかにかたらひ。ある夜錦を忍び出。すこしの志るべを使にして。難波をさしてのぼりつゝ。彼地此方とさまよひて。おもはしからぬ日を送れば。この地にをりても要なきとて。夫より皇都へおもむきて。三すぢ町のほとりにさゝやかなる家を借て。學問劍法の指南をこつ。月日をこゝにおくりしがもとよりその技に勝れたれば。わづかのうち

に弟子の。あまた付て繁昌さければ。おのづから金銀の。融通もよければ。些づゝの金を人に貸などして。その利を取て不足なく。暮すほどに月満て妻はやす〳〵と玉のごとき。男子を産出しければ。名を金五郎とよびなして。蝶よ花よとそだつるうち。滿れば缺る世のならひ。妻は産後肥立ぬうへに。あしき風を引そへて。醫療手をつくすといへどもその驗更になく。つひに無常の風にさそはれ。冥途の旅におもむきぬ文之丞はたよりに思ふ。妻に別れて今さらに。かなしみやるかたなしといへども。いかんともすべきやうなければ。泣〳〵野邊の送りをなして。跡ねんごろにとむらひけり。かゝりしほどに幼兒を。乳なくてはそだてがたしと。乳母をかゝへ養育させ只金五郎を手の中の。玉のごとくにいとをしみて。光陰の過をかぞへけり。こゝにまた珠數屋町に。古鐵買の六兵衛とて。夫婦かすかにくらすものあり。年ごろ子の無りしかば。つねに是をふかくなげき。神佛にいのりしゆゑ。その信心の通じたりけん。妻は今年四十歳にあまりて。はじめて女子を儲けしかば。夫婦のよろこび大かたならず。名さへいはふてお鶴と號。いつくしみそだつるうち妻はふたゝび妊身になりて。次の年また女子を産ぬ。あかるに今度は養生の。悪かりしにや四十のうへの。年子のゆゑ故おのづから血心をとろへ循環せざるにや悪血さへもをりかねて。あと腹のあきりにかぶり。そのなやみの堪がたきと。心のつかれに養生かなはず。つひに空しくなりにけり。こゝにおいて六兵衛は子なきを神や佛にいのり。二人

まで子をまうけしに。今はた思ひがけもなく。妻は子を捨亡靈の。數に入たる身の當惑に。なげくより外なかりしを。近所の者にいさめられ。まづ亡骸は取納めても。をさまりかねし胸のうちに。とやかくおもひつゞくれば貧しきくらしに男の手一ッいかゞして二人の子をば。そだてんやうもなかりしゆゑ。心を鬼とも蛇ともなし。藪へなど子を捨んかと思ふまでにくるしみて。一日〳〵とくらしけり。さるを假名屋文之丞はつたへ聞くおのが身に。引くらべては捨置がたく。今ふ自由なくくらす故。當才の子を親ゑらずに。もらひうけて育てなば。その親の手もすこしはかろく。なりもやせんと人づてに。この事をいひ入て。妹娘をもらひうけ。名をお龜となづけまた。幾許の金を六兵衛におくり。姉なる娘をはぐくみ給へと。情ある深節に。六兵衛はいたくよろこび。むすめが行すゑふかく憑みこれより後めぐまれし。金を少〳〵お鶴に添て。さる家へ里につかはし。あぢきなき世をおくりけり。さればまた吾妻なる。假名屋が家には文之丞が。不義なして家出せしかば。文字之進は怒りつくやみつ。にくからぬ忰といへども。世間のおもわく上への聞え。親の名を出す不孝の罪。うち捨てもおかれねば。これ等の趣き主君へ達し。文之丞を勘當なし。弟文次郎に家督をゆづり。嫁を迎へて是に娶合せ。その身は隱居し名を白翁と。あらためてくらすうち。文次郎夫婦の中に。一人の女兒を儲けけり。是につけても文之進は文之丞のとをりふしは。何かにつけてうち案じ。おもひ出しつゝほのかに

きくに。今は花洛に住なれて。男子持て不足なく。くらすと人の風便ゆへ。案じの胸もやすまりて。ゆく〳〵は文之丞が子を。文二郎が娘に娶合せ家をゆづらば血すぢも絶ずと心に思ひゐたりけり

第一回

されば月日に關守なくて文之丞が一子金五郎は今年十七才お龜は十五の春となりしが二人とも天性の美男美女にして華洛廣しといへどもたぐひまれなる容顔は梅と櫻の婀娜くらべおとらずまさぬ風情なり文之丞はこのとしごろ古郷をはなれ遠き都に世をおくるそのうちも二人迄子をまうけ何ふ足なき身のうへにも十年あまり過しころ鎌くらの家をぬけ出て父のところへ便さへ。ならねばいとどなつかしく。子を持てゐる親の恩。報じがたきをくちをしくおもふものから考へ見れば。主家の掟をやぶりつゝ。妻と不義して出奔せしかど。今にも佗のかなひなば。ふたゝび主家へ立歸る。ともあらんとゆくすゑを。彼是おもひわわすにぞ。はやくより金五郎には。文學武術を敎へしに。もとよりさがおきうまれゆゑ。一を聞て萬を志る。文武の才に長たれば。幾程もなく上達して。今いはや金五郎は。武士の道くらからず。殊に和歌連俳茶の湯挿花のたぐひまで人なみ〳〵より勝れたる。よき壯士とはなりにけり。お龜もまた世にめづら

しき發明のうまれにて。文よみ歌よみ手ならふ道はさらなり物たち縫針の技藝にすぐれ。琴三味せんの調へさへ。いとうつくしく何にまれ。女子の道にくらからすその生立もたのもしく。人もうらやむばかりなれば。文之丞は何とぞして古郷の父に勘當わびて。子どもの顔を見せまほしと人を憑みてつく〳〵と父白翁にわびたりける。鎌倉には白翁も物領の文之丞か身のいたづらから家出して。今は花洛に相應に文學武藝の師範ゐつ。不自由なくくらすうへに孫まで出來しと聞つるが。いかなるさまに生立や尋ねまほしトおもふをりから。人づてにて文之丞よりわび言をいひ入ければ。白翁はうれしさひとかたならねど。いつたん主君へ勘當と披露せし身をたやすくは。ゆるす事もならざればそのうち首尾を見つくろひ。君へねがひて出入をさせん。文通のみは苦志からず。又孫の金五郎は罪なき身ゆゑさいわひに。文次郎に男子なければ。迎ひをつかわしこなたへ引取。いく〳〵は假名屋の家名を相續さするほどに。支度をとゝのへ待べし。と返事に委細を聞よりも。文之丞は大ひによろこび。わが身の出入はかなわずとも。悴を本家へつかわすい。このうへもなき事なりと。金五郎を近くまねき。鎌くらの事くわしくたり。日あらず迎ひの來るをまちて。鎌くら表へくだるべしと聞て金五郎は今さらに。思ひがけなく本家を繼は。身の本まうトいひながら。一人の親をのこしおき。そのうへ子どもの時よりして。行すへたがひに夫婦ぞと。胸におもひしお龜にも。わかれんとのこゝろ憂苦。いまだ

枕にかわさねど。何かにこゝろおくそこもなくうちとけてにくからぬ。中なるものをうち捨て。行とにやとさすがまだ。おぼこそだちの心には。當惑するも理りなり。お龜もこの事聞しより心細さの案じごと。とやせんかくやとおもふうち。鎌くらより金五郎を。迎への人の着しかば。今にわかれとなりけるかと。人目の關のきのび泣。ふさぐは女子の常ながら。いとゞに胸もむすぼれ。部屋に屏風を立まわし。衣引かつぎうち臥て。なみだのひまもなくばかり。をりから障子引あけて。立まわきたる屏風のはしを。折かへしてはいる金五郎「おかめけふはどふだ。やつぱり氣色がわるいのかトいふこゑにおかめは目をみひらき「ハイいろ〳〵のことを案じますと。こゝろぼそくて氣がふさいでいつそ頭痛がいたします　トほろりとおとす一ぢつくにつこりわらひまくらをあげ　金五郎は見てさりておいらが別れてゆくものだから。それでふさぐといふのだらうマア〳〵何はともかくも。けふは南であつたかいに。こんなに立こめたり引かぶつてはなほのぼせてわるいからちつと庭でもながめなトべうぶをかたよせ夜着さりめけまるまどのきやうトをあけおかめはやう〳〵おき直りあたまをおさへてさしうつむく　金「コウおかめ。つよく頭痛がするなら。なんぞ藥でもやらうかおかめ「ハイありがたふござります。あんまり氣がふさいで。頭がおもくてなりませんから。今きがた實母散をのみましたヨ　金「そうか。あんまりつまらぬことをくよ〳〵思つて。ほんとうの病氣が出るとわりいから。今日はちやうど天氣はよし。芝居でも行て見ればいゝおかめ「いゝへわたくしは芝居も見たくはございません　金「ハテこまつたものだ行

て見ればいゝがのふ。團藏だの璃寛だの。國五郎なんぞが大ひやうばんで。それに東からのぼつて來てゐる路考の門弟の路之助が又新作のはやりうたを。舞臺でうたつて三絃の手があるか。いつ見てもまゝに妙だヨ　おかめ「さやうでございますと子。アノいつぞやあなたと御一所に浪花へまゐりましたとき。濱芝居で見ました評判のよい。紀伊國屋はどういたしました子　金「源之助か。今は東路へ歸つての。ます〳〵評ばんがよくつて。去年の春向町の芝居で。苅萱の狂言を出たが。近年にねへ大あたりでそれからなんでも當りつゞけで。町もやしきも紀の〳〵と。べたいちんめに女子供が。ひいきすると上がたまで。もつぱらの評判よおかめ「そのひいきの多い紀の國屋にも。まさつたお方がまた東へおくだりあそばしたら。マアどんなでございませう金「紀の國やよりいゝ男とはそりやアどこの人だおかめ「どこのお人か御存じてありながら目もとから口元まで。音羽やに紀の國屋を。一ツに出たよりよい御容貌と學問のけいこにお出なさる。みなさんが常ふ斷。さういつておほめなさいますよ金「なんのこつたさつぱり解せねへおかめ「わかりませんかへ。あなたのことさトにつこりわらひかほをかくす　金「なにをいふかとおもつたら。おいらが顏の棚おろしか。いゝかげんにおひやるものだおかめ「アレほんとうでございますよ。それだから私は。いちばいくらうに成まして。いろ〳〵な事を案じますと。胸がいつぱいになりますよ　金「なんのこつたなおかしくもねへ。戯談は出やうだんだがほんにあんまり案じなさんな。迎ひと一處

にあしたの朝鎌くらへ立て行ても。落ついたら早速におめへをむかひによこすからちつとのうちだ。待てゐなさかし末さいうは。親父がおめへとおいらをば。夫婦にするとかねての量見。なれど今までついしかに。親の目をさのんだり。なまめいたとも志ねへからそこがおめへの量見一ッでもしおいらに遠ざかつて。呼によこすが待どほなら。縁づく共どうなりと。それはマア勝手次第。おほかたモウ東へ行から。いやになつた時ぶんだらう。のふおかめいやかかめ「いゝへなんのいやでござりませう。心にもないとばつかり。たとへどのやうなところでもあなたが呼でくださいますなら。私はうれさうございますが。あなたは東へお出あそばしたら。あづまの女中は上人品でまことに意氣だと申しますに。私のやうなものは。とてもモウお捨なさるはされてをりますもの。末〳〵の事を考へますと。寐ても夜の目もあひませず。そのうへ實の父、さんは。お顔さへ見ぬ其うちに。三年跡にお果なされ。跡に殘るは姉さんひとり里に行てお出なされば。いつぞや逢て名告あひ。便になつたりなられたり。いたしませうと存じましたに。そのかひもなく里親に。だまされて身を河竹に。おさづめなさりしといふとゆゑ。今は杖にもはしらにも。力に思ふはおとつさんばかり。末を憑みしあなたにまでおもひがけないこん度のおわかれ。心ぼそい身になりました　トいひつゝなみだをそでにのごへば金五郎もそのこゝろをおもひやりつゝむれなでおろし「なんのこつたな。そんなに末のすゑまでを。案じるから氣がふさぐ。なるほど兩しんにはやくわかれ姉さんにも生

わかれては。こゝろぼそいものつともたが。人間は老少不定。さだめないのが世のならひ。命ばかりは神佛の。力づくにもゆかぬのは。みな定まれる身の宿世。それをくよ〳〵氣にしても約にもたゝぬとじやアねへか。又たとへわかれ〳〵に。遠くへだつて行ばとて。おめへにこの家をゆづりでもすると。ぜひ聟をとらねばならぬが。さういふ時はマアどうする心だおかめ「そりやアモウあなたがおつさやらずとも海より山より御恩の深いおとつさんのおつしやるとを。そむくこゝろはござりませんが。この事ばかりはそむきます。たとへ妹脊のおゆるしみをうけずとも。あなたをのけて餘の人に。添ますこゝろはござりません。あなたが東へおくだりあそばして。問音信もござりませんと。わたくしはそのときはとても生てはをりません。死ぬる心でござります　金「馬鹿なとをいひな。それはほんの短氣といふもの死くれへなら何も苦勞をするにもあたらず。添たいとおもへばこそ。いろ〳〵に氣をもむ玄やアねへか。ほんにわりいとはいはねへから。すこしのうち辛抱して。便りをするのを待てゐな。コレサおかめ。なぜそんなに泣なさる。子供かなんぞのやうに。わかれて一生あはぬといふと玄やアなし。ちつと氣をさつかりもちなトいはるゝほどなほおかめはう「あなたがそんなにとをわけて。やさしくおつしやつてくださるほど。猶かなしくなりまする考へて見れば見ますほど。志きりに心ぼそくなりまして。あなたがお宿にお出あそばすうち。いつそ死で志まいたく成ました　ト金五郎の膝にとりつきなげくこゝろをくみとりて　金「エ

丶おめ〳〵もマア心のよわい。なんぞといふと死〳〵と。譯もないその繰言マアよくものをつもつて見なこんなことをいふと年寄めくが今世の中が靜だからよけれ昔の亂世の時で見ななんぼおいらのやうなちよろつかな者でも。武士の種だから軍のところへ。是非出なけりやアならねい。よしか出れば敵の首を取るやら。こつちの首をとらるゝやら。二ツに一ツ命がけ親を捨子を捨て。戰場へ出るは武士のならひよむかしと今とくらべて見な。まとに樂なこの世の中そんな危い狂言もなく武士の身に取ては本意じやなけれど實に今は極樂世界。こゝの道理を考へると。三年や五年遠ざかつても。苦にするほどのともねへがそこがやつはり自己勝手で。十分でも不足におもふは。人情のあたりめへさのそれだからかならずとも。きな〳〵おもはず時節を待なよ短氣を出したそのあとでは後悔してもはじまらねへから心を大きく持がいゝよトとしわかなれど金五郎さがしきとばにとゝわけてさとすをりから下女きたり「わか旦那さまへ。旦那さまがちよつと入らつきやいましと。トいふに金五郎はヲイ〳〵トおかめの部屋を出てゆく。父文之丞は一間のうちに。煙草くゆらし文よみ居る。金五郎はきとやかに。父の側へにかしてまる　文ヲヲ、金五郎か。扨モウ鎌くらへ下るのも。明日なれば旅の調度を。落なく用意するがよいぞや。それにつけてくど〳〵と。いひきかすまでもなけれど。獅子はわが子を谷へ投。其生立を見て安堵して手ばなすと。燒野の雉子夜の鶴。子ゆゑにまよふは親の常。鳥獸でさへそのやうなるを。況て人間は猶さらに。子を見ると親に

きかず。譬高貴縉紳をはじめ稻苅漁どる下ざま迄。子を思ふのは仝じと。もはやそちも十八なれば。案じるほどのことはないが。かういふては異なものなれど。人なみ〳〵より文武の道も。すぐれたといふではないがマアどのやうな人中へ出してもまんざら恥かしくもなし。といふておのが智にほこり。藝に慢じて多くの人を。眼下に見くだしてはならぬぞや。又一ツには祖父さまを大事にかけ。われにかはりて孝行してくれ。二ツには弟文次郎は。養父といへども其方が爲には。いはずときれた血すぢの叔父ゆゑ。ずいぶんともに心にそむかず。これまた孝行せにやならぬぞ。また鎌くらは繁華の土地ゆゑ人氣が都と違ふからよく風俗をのみこめよ。仲間の付あひそのほかも。時宜によつてはのつひきならぬど。物事萬うちばにして花にさそはれ月にうかれて女郎買なども三度に一度い。はづされなけりやア行がよいいさ。さりながら傾城傾國の譬もあれば。かならずふかくはまらぬやう。心にこゝろをみたしちやならぬぞ。忠孝に心を勵まば。その身の末もあしからねどとかくに酒色は染りやすく。むかしより名將勇士も。色に迷ひ酒に溺れて。大切の身をほろぼすためきも。まゝあるとゆゑこの道はふかくはまらずつゝきめよ。こゝが常言の恥をいはねば理がきれぬといふ通り。はやい例はこのおれが。若氣のいたりといひながら。無分別な心から親を捨故郷をはなれ。家出なしてきばしがうちは住居もさだめずさまようたが。親の身では不孝な子でも。にくし罰あたれとは思いぬにやこゝに住ひ

を定めてから。仕合と不自由なく暑さ寒さの難義もせず。人なみ〳〵に世をおくる。今このくらしも涙〳〵の。日かげ者の望みはなけれど。不孝の罪なりやどのやうに。今さら悔でもあとへはかへらず。サこゝの道理をよく辨へて。女色その外あしきことには。遠ざかるやうにするがよい。今度そちがわが本家へもらはれゆきて御主君へ。つかゆるといいとめでたく。我身のよろこびこのうへなし。又お龜はちいさい時より。そちにこの家を讓りなば娶合して夫婦にさやうと。おもふては居たれども。本家へゆかば何として。わが手でそだてし娘でも氏素性といひ弟の手まへ。いやしい娘は妻にはなるまい。殊にかためのさかづきを。させたといふ中ではなし。そちを彼地へ下したうへ。おかめには婿取てこの家をゆづらばわれはまた。ほかにたのしみのぞみもなければ。かならずとともに今の教訓わすれてはならぬぞやトわが身のことさ世の事をまじへてさとす言の葉の。はじめをいりを金五郎つぶさに聞て胸にたゝみ。ありがた涙とわかれのなみだ目にうかめつゝのみこみ　金「だん〳〵と事をわけて。お心ふかき御教訓。きつと骨身にこたへまして。ありがたふござります。もとよりおろかなわたくしなれど。こゝろのおよびますたけゝ忠孝二ッをはげみます。あなたもずいぶんお身のうへを。御大切に御養生なされ。おすこやかにおくらしなされてくださりましトふさやかなる　文「イヤそれゝかくべつ。おかめもそちとおなじやうに。ちひさいときから共にそだちて。兄弟同様にくらしたから。今わかるゝもかなしかろが。これも

定まる約束事無分別の出ぬやうに。よくまでいとひしたがよいト粋もあまいもかみわけた。とばをきほに金五郎は。父の前を退きておのが部屋へ入り。翌日出立のとなれば。何くれ彼くれそれ〳〵に旅の准備を落もなく。とゝのへて夕餉をきまひ。やうじをつかひながらおかめの部屋へそつと來り　金「どうだお龜ちつとは氣色が直つたかおかめ「ハイなんだかどうもふさぎつゝけで。やつぱり頭痛がいたします。アノあなたはどうでもあしたの朝。お立あそばすのでござりますかへ　金「さうさモウ迎が來て居るから。どうものばされもきねへのさそれだからおめへの顔を見るのも今夜かぎりゆゑ。わすれぬため見をさめに。能見て置ふとおもつて來たよトわらひながら顔を見れば。おかめはづかしげにかほをあかめおかめ「またそんな虛ばつかり。それいほんの氣やすめて御ござりませう　金「さうさいづれおいらのいふとは虛さのふ。どうでモウ明日から。居ねへのだから。ほんとうにやァきねへはづだ。さつきおとつさんがいひなすつたことを。おめへも大かた聞たらうが。おいらが行たその跡ではおかめに才子をとつて。やつてこの家をゆづるとおつきやつたヨ。のふ。もしその聟が色男なら。首つたけはまりこんで。おいらのやうなものはうしろむきでつばきだらうおかめ「なんのマァもつたいない夢にもそんなこころは持ません。たとへ業平さんが生れかわつてまゐりましてもわたくしはあなたに見かへるこゝろは爪の垢ほどもござりませんヨ　金「いゝかげんな事をいふ。見かへるこゝろは富士の山

ほどあるだらうおかめ「モウ〳〵あなたいなぜそのやうにわたくしが申すとを。おうたがひあそばしますへ　金「うたぐりやァきぬへけれど。虚らしいいひやうだから。それが信實まことならかならず短氣を出さねへで。便りをするのを待てゐなよト脊をさすればお龜はうれしくおかめ「わたくしとどのやうにも待てをる氣でござりますから。どふぞきつとお便りを早くなすつてくださりまし。トたがひにつきぬ名殘のなみだ。いとしかいいもまだきらぬ。明のからすのなくくもおかめは金五郎が支度する。かたへに持ものなど取そろへるうち。用意と〳〵くとゝのひしかば。いざ出立とさゞめくを。金五郎はさすがにも跡に心の殘れども。詮かたなければ氣をとりなほし。父とおかめにわかれをつげて。迎ひの者ともろ共に心づよくも旅立を。今が名殘と文之丞。おかめも共に門邊まで。おくり出つゝ金五郎の。蔭見ゆるまで見おくれば。あなたも見かへる別れの泪。たがひに胸の憂也鼠にかくれて姿い見えずなりぬ

小さん金五郎假名文章娘節用前編上卷終

小さん金五郎假名文章娘節用前編中卷

江戸　曲山人補綴

第二回

在然程に。お龜は金五郎が鎌倉へくだりし後は。いと〻心もむすぼれて。とかく浮立事もなく。今日や便のありもやせん。あすや音信あらんかと。あだに過日を指をりかぞへ。一日〳〵とくらすうち。はやくも半年あまりも過て彌生の末に成にけり。されどいかなる事にやありけん。金五郎の方より音信の文さへ來ねばひとしほに。おかめはおもひいやまして。ほのかに聞ば鎌倉にはお雪といへる娘ありて。ゆく〳〵は金五郎に娶合する約束なるよし。きいて猶さら胸つぶれ。さうとはきらずうか〳〵と。たよりの文をたのきみに待し心のおろかさよ。殊に妹伏のかたらひも。せぬ中なればなか〳〵に。いつの世にかは添事ならず。といふて今さらよそほかの。男持衆はさら〳〵なく。今は日ごろのたのきみの。甲斐さへ泣てくらすのかと。おもへは千〻に胸くるしくあるにもあられぬせつなさを。父文之丞にもかたられずひとり心をいためし が只その事のみおもふものから。うつら〳〵と床病の朝な夕なの食事さへ。ろく〳〵すゝまず

うち臥ぬれど元より妬む心なければ。あぢきなき世とうちかこち。一日二日とおくれども。夜の目もあはさで案じ事。行すへこしかたおもふてみれば。よく〳〵幸なきうまれにて。親にはおくれ姉にはわかれ。たよりさへなき身の因果。こゝろの願ひもかなはねば。生ながらへても樂からず。いつそ淵川へ身を志づめて。果なんとこそましならめと。戀にこゝろもみだれ髪。なであぐる氣もなか〳〵に。なき志づみたる閨の戸を。ふけゆく夜半の風ならで。ほと〳〵とうちたゝき。おかめ〳〵とよぶこゑに。おどろかされて立あがり。そつと戸をあけうかゞへど。人もあらねばさてはわが。心のまよひに風の音をもしや戀しきその人の。來給ひしとやおもひしゆゑ。あな淺猿志き心かなと。わが身のほどをかへりみて。またうち臥すにふたゝび三たび。おかめ〳〵といふこゑの。耳に入こそいぶかしく。もしやとまどひて出てみれば。影さへもなしうち臥せば。またよぶ聲のするゆゑに。おかめは夢歟うつゝかとそのまどひさへ解けがたく。心みだれて立たり居たり。こはながらへても。添ねば。思ひあきらめ死ねかしと。父母の呼給ふならん。ヲヽそれ〳〵と娘氣のよしなきまよひにひかされて。死する覺悟にすそはしをり。幸ひ誰も見志らぬやうす。ト裏口よりぬけ出て。いづくとも無いそぎ行ぬ。その明のあさおかめの居ざるを。見つけて文之丞家内の男女も驚きて。其處此處とさがせども。その行方志れざりければ。文之丞はつく〳〵思ふに。日ごろより金五郎を。夫の如くおもひおもはれ。たがひ

よにくからぬ中なりしを。いつぞやわかれしその日よりたゝうつら〳〵と志て。東の空のみうち詠め。娘心に添れぬ事と。思ひあまりの胸に絶ずや。夜るもをり〳〵うなされては。淵川へなど身を沈めんと。うつゝのごとくにいひけるが。さては入水やなしたりけんと。獵人を出し水邊を落なく尋ねさがしけれど。その死骸さへ志れざれば今は文之丞も定業ならんと。やうやくあきらめ家出せし日を忌日と志て七日〳〵の。訪ひとむらひもねんごろに。泪ながらにいとなみつ。文之丞はこの事をくはしく狀に志たゝめて。鎌くらの金五郎かたへ人を下して知らせけり。されば又金五郎は本家の叔父文次郎の家に。養子にもらはれ來りけるが。おもひきやお雪といふて。容貌のうるはしき。娘のあるに驚きしが今さらに詮方なく。父の敎へに志たがひて。養父母に孝をつくし。くらすうちも都にのこせし。おかめの事のみ氣にかゝり末は女夫と約束して。わかれてこの地に落着しなら便りをなして呼むかへんと。思ひしともくひちがひ。お雪のあればこなたの父に。おかめのことをうちあけて。迎へたしともいひがたく。殊に實父文之丞がおかめは素生もいやしければ。本家の娶にはなりがたしと。いひたる言のかれこれを。思ひ合せばゆく〳〵は。とてもおかめと添ふとならず。一旦約束志たれどもかゝる譯ゆゑおもひきれと。言送らんもさすがにて。又遠ざかりゐるとなれば。なま中たよりをずるならば。おもひのたねをいやます道理。音信せぬこそたがひのため。いつかわするゝともあらんと。あき

ちめては見るものゝ。愛敬つきてにくからぬ。おかめを今さら餘の人の。手活の花になすともいとくちをしきとなりと。日ゝに胸のみくるしめけり。かゝるところに實父のかたより。おかの事によりおかめが家出し行方おれずと。いひこしければ金五郎は駭くと大かたならず。掌中の玉を。うしなひし。心地にあきれ胸つぶれきぬけするまでまどひしが。さすが男のとなればやうやくに心取直し。つく〳〵おもへば緣なきむかしと。あきらめては見るものゝ。もしやおかめの心かはり我のみふかく思ひゐるもおらずに男をこしらへて家出せしにはあらざるか又はせまき心から。そはれぬとをくに病て。入水などせしにやトさま〳〵に思ひとりて心に回向おたりけり。是より後は金五郎もおかめが死せしと思ふものから。家の娘お雪の姿も十人並にはすぐれたれど。見かへるこゝろもなきゆゑに。世にたのおきともなく。おもしろからぬ日を過すうち。夏去り秋も文月の。中旬にいたれど暑さはさらず。ある日金五郎は。醉狂といふ友達にさそはれて。大磯の燈籠を見物せんと。うち連てたそがれより廓へ至りなじみの茶や守田屋へゆきて酒宴をまうけ歌妓幇頭なんと相手にしてざゞめきわたつて大さはぎ　たいこもち　へぼ吉「コウ〳〵おたこさん〳〵コレサおたこぼうちよつとこつちを向給へ　げいしやのそでを　むおやうに引はる　おたこ「アレいやだヨよしておくれ。そんなに引ぱると着物がきれるはずすかねへのふへぼ介「ヲヤきがつかねへかんにんしておくれよふッ。ヨウおたさんいゝ子だからちよつとうしろをひいておくれ。無類

飛切大極上せり賣　卸　仕らずといふ聲色をつかふからおたこ「ヲヤ〳〵おつな藥のいひ立だねへ　うた「菊はとうりのもとよりもけいとふうの袖やおほるらん　へぼ「まねまするはエヘン〳〵エヘン。エヘヽンノ。エヘン〳〵。エヘエヘエヘンノエヽン〳〵〳〵〳〵　たいこ　目八「なんだ〳〵。コレどふおたのだそこへ小間物見せを出しちやア眞平だせへ　へぼ「なぜ〳〵。とりやア聲色だ目八「エヘンノ〳〵。エヘンノヘンツ。なんのこつた　へぼ「ハテやぼなことを聞給ふな。よく考て御らうおろ。すなはち咳が三十ろうサの醉狂「おきやアがれアハヽヽヽヽ目八「モシ旦那妙なことがでぜへます。まことにどうもどふもまことに。實に妙〳〵妙ででぜへす　醉「なんだやかましい何をいふのだ目八「イエサあなたがまことにどうも　醉「おれがどふした。女が惚るでうらやましいか目八「いかなこつても御挨拶ヲホヽヽヽヽッ。エモシおめへさんはお目が二ツあつてよく見えますヲ。實にうらめおいたアこのこつた　醉「ハヽヽヽヽ何をいふかとおもつたら足下は目が一ツだつけの。をしい男だがあつたら玉に疵だのふへぼ吉「さやうさねへ。モシ旦那。よくごらうじまし。顏の丸みあんばい肉合なんどは。てもなく珊瑚珠の緒〆の再來。モシ鼻筋が横のはうへぐつと通りて。眉毛がにようくりとなめくじのやうで。鼻は獅〻でもねへが赤くむくれて口は錢湯のざくろ口だが。流し男の給金が安いかして。齒は一向にみがきあげず。匂ひのあしきといはんかたなし。譬ていはゞてん〳〵むき〳〵の。寄合世帶といふ顏がまへサ。ア。な

げかはしいが弾者のねへ。ナニ方面なさそふな面相だぞ目八「こう〳〵貴さまは何の遺恨があつて。おれが顔の棚おろしをするのだ。隣りの寶をかぞへるやうに。人の痴氣を頭痛に病むとはよつぽどおめへも苦勞性だぜ。アヽとかく男のいゝものは。そねまれるのでうるせへぞ。ヲホ〳〵〳〵ぼ「ヘンおつうとまりたがるやつだの。コウ戯談はおどけだが足下幇間をさらけやめねへ。いゝ金まうけの筋があるぜ。九月になると目八「なぜ〳〵〳〵ぼ「よく考へて見さつし容貌といひ口めへと言目八「ハテナ富でもとるといふとかノへぼ「ヘン押の強へ神明の祭りだからよ目八「ナニ〳〵神明のまつりフウめつかち生姜か。ヤいま〳〵しいとをぬかもやアがる。コレそんなに難非を付てわるくいつても。是でも女にやア憎がられねへ男だよへぼ「そのかはりかはいがられたともあるめへ。その顔ぢやア目八「そねめ〳〵顔にやまよはぬ姿にやほれぬとへぼ「フウたつたひとつの目に惚るフハヽヽヽヽおたこ「ヲヤ〳〵〳〵目八さん今日はまとに閉口だねへ目八「ナニサナニサ。こんな理も非も辨へねへ。田夫野人と論は無益だへぼ「ナニおれが田夫野人なら。足下は牛房にんぞんたみな〳〵「ハヽヽヽヽ目八「時にモシ金さんとおつもやいましたテちよいと一ッけんじ天皇秋の田のといたしませう金五郎「こりやア一ッお押へだ目八「ナアル。そこもあれば蓋もあるかモシ旦那實に妙といふとがでぜへますトいふ來歴は。モシ千年屋のかゝへの子で。このごろまで引込でをりましたのが。けふ突出しの眞名鶴といつて。ぶつゝけ〻〻のお職さテ。そ

の容貌といつぱ。天人は羽衣をかぶり。辨天さまは冠を落し。抽者がお宿の山の神も。尻をまくつてにげ出すばかりへぼ「ヘンがうぎに山の神をあがめたの目八「大きにス。エヽとまづこの天盃はそちらの旦那へさゝげて置のト。そこでモシ旦那。今にモウこゝへ眞名鶴さんがめへりますからよくお拜みなせへ。實にびつくりおいたちこ。ねずみこつこは千話のはじまり。とけつこつことは鷄よ。けとつぱつぱにや豆をやれすてつぽうには油斷をするな。ふてへやつならぶちのめせ。ぞたいわれらは都のうまれ。色にそやされとんな幇間になられたァ。ハアどんどこどん。どんどこどん。ツアヽせつねへいきがはづむアッハッハヽヽヽヽヽハ醉狂「エヽやかましいよく志やべるぞ。そんなにどなると天井の煤が神事舞をして。疊の芽がをどり出すだらう目八「違へでぜせん。酒呑猪口がきやりをいつて。銚子の引物を引出すと。吸物膳の箸がつゝ立て。硯ぶたのくわいをおつちらかしやせう。どんだ化物屋しきのやうだ。アハヽヽヽヽ旦那おどけはのけて。モシ噂をすれば影ぢやヤねへ。正眞正銘本家元祖まじりなし。外八文字でぞよなり志よなり。アレ〳〵あの挑灯がそで御ぜへます　醉「ほんにのふ金さんおめへもよく目利をして。もし無疵で氣に入たら今夜の花に志なさるがいゝ金五郎「ちげへねへなんならおまへともやいに志やうトおどけないふうち千年やのつき出し女郎まな鶴は新造かむろを引つれてゆう〳〵おかめの姿に生うつし。どんとあゆみくるを金五郎はふとみをさだめてみればふしぎやゆくゑのたれぬもしやそれかとつく〴〵見れば劣りはせねどどこやらが。違ふやうには思はれても。目もと口

もと愛敬ある。品かたちのよく似たれば。胸といろきて心まどひわが身の迷ひか醉たるゆゑかと。まばし見とれて詞なきを。見てとる幇間醉狂も金五郎のかたなたゝいて笑ひながら　醉「コウ金さん。おまへはこのごろひどく物案じなやうすだから。いろ〳〵といひなすつたが。なんと今の花魁はどうだエ　金「さうだいつ子がすねるやうに。いやだ〳〵とさそふ水あらばだヲ　醉「よつほどさそふ水あらばだヲ　金「ナニさういふりくつでもねへけれど　醉「けれどがおかしい。あながち氣がないでもあるめへ　金「ハヽヽヽヽマアなんでもいゝから。わたまやァこの子にきめやう　醉「それがいゝそれがいゝ。そんならおれも行てたれぞ見立やうト二人ともちさせやへをどりこみ醉狂も合かたをさだめ　お定りの盃事も程よくきりあげ床へまはれば藝者たいこは御機げんよふトみな〳〵どやどや下へゆく　金五郎は初會の事ゆへ羽折は枕元にぬぎ捨て。横になつて寐てゐるところへ合方の眞名づるは。藍御納戸の唐縮緬裾に光りんのつるの染出し緋縮緬の裏襟つきし。ひとへものについたけのまゆばん。黑の紋天にひのごろふくりんの腹あはせの帶をだらしなくむすび鼻がみを持そへてつまをとりいそ〳〵しながら金五郎のそばへき眞名鶴「もしへモウおやすみなんしたかへ。なぜ起てゐておくんなんせぬへサァ目をおさましなんし　トゆすりおこせば金五郎はわざと目のさめたるふりにて　金「ヲヤおいらんいつの間にマァ來なすつたくるなら來ると前びろにちよつと人でもよこしなさればいゝ出しぬけに起されちやァ虫が動ぎるから　まなづる「ヲヤ〳〵いやでおすよ　金「さうだらうヲいづ

れわたしのやうなへうたんは。可愛がられぬへのはわたりめへさ　まなづる「アレさうぎやァおざりいせん。お氣にさはつたらおゆるしなんし　トたばこをすひつけて出す金五郎はひとひきひいて「これは御馳走　トまなづるにわたし顔をあげ〳〵見て「ヲヤなんざんすへ。ぬまやァなぜそんなに顔ばかり見なんすへ。ぬしにそんなに見られへすと。恥しくなりいすヨ　トにつこりわらふ　金「ヲヤまとにふ思議どふも生うつしこんなにもよく似るものかトわれをわすれてほつさいきまなづる「ヲヤなんでおすへ似いまたとはそりやァたれさんに似いしたへトにつこりわらふ顔　金「ソレその笑ふかほつきから物こし恰好似たとはおろか瓜を二ツにわらずとそのまなづる「ヲホヽヽヽばかりまうおすヨ似たにたとおつせへすが。誰に似申たのか。はなしたくなしなんしてお聞せなんしな　金「はなしませう〳〵。その似たといふ子細はマァ聞ておくれかういふ譯さ。わたしが幼い時分から行すゑかけていひかはし女房にせうと思つた女にヲ。ほんに野暮な野郎だとわらつてくんなさんなまなづる「なんのマァ笑いんせう。そんならモウぬしは御新造さんがおざりいすヲ　金「ナニサその女はモウとつくに死でまつたのサつる「うそ〳〵。そんなにお隱しなんせずとよいぢやァおつせんかへ　金「うそぢやァなしサ。實にしんでまつたよつる「ほんざんすかへ。ソリヤァマァさぞお力がお落なんまたらうヲ譬また虛いつわりにも主に思はれてお出なんした。そのお方に似たと思つておくんなんすりや。わたくしが身に取いまちやァ。まんじつうれまうおざりいすヨ　金「なんのうれまいとはありやすめへ。そりやァほんのつとめの

手くだ實は七りけつぱいだらうつゝ「ヲヤ勿躰ないなんでいつわりを申しいせう。初會からこんなとを申しいしたら。おさげすみなんせうがぬしのためなら都合しても。呼まうしたふおざりいすが。ぬしやァ大かた通り一遍で。もふお出なんすこつちやァおざりいすめへ　金「そりやァみんなこつちていふと一河の流れ一樹の蔭。他生の縁があればこそ。かうしてわざ〳〵來るといふもの。おめへがさういふこゝろならわたしも根かぎり通ふ氣だが。いゝ時分に突出しちやァ恨みだよつゝ「どうしてマァ。ぬしを突出しいたら。それこそ罰があたりィせう　金「それはそふと。たとへにも。他人の空似といふけれど。どふも他人とはおもはれねへが。おめへはマァいつたいどこの生れか。なじみがひに咄してきかせなつゝ「そりやァぬしのとざんすから。おはなし申しもいたしいせうが。身のうへをあかしいたら。ぬしに愛相をつかされいせう　金「そうおもふも尤だが。いづれこの廓へ身を沈るには仕合がよくつて來たものはねへから。なに耻といふではなし咄してきかせてもいゝぢやァねへかつゝ「ほんにそれもそうでおすヲ。そんならおはなし申しいせう。アノわたくしはまとに〳〵遠くの國でおざりいすよ　金「ハテヲそれぢやァ蝦夷松前か。紅毛の果からでも來たのかへつゝ「ヲホ、、、、ばからいうおすヨアノ上方でおざりいすからさ　金「フウアノ上方ハテナほんとうにかつゝ「アイそれだから遠くだと申しいすのさ　金「なんの上方の生れなら遠くなとがあるものか。ハラ緣といふものはおつなものだヲ。わ

たしもやつぱり上方ぜへろくさつゝ「ヲヤ虛をおつきなんし。なんのマァぬしなんぞか上方たとおつせへしても。上方にやァぬしのやうな。いきなおかたはおざりいせんよ　金「さうさわたしの樣な不意氣な野郎はどこの國にあるものか。そしておめへは上方のもし珠數屋町の邊ぢやァねへかつゝ「ヱほんにさうでおざりいすヨよくぬしは知つてお出なんすヲその珠數屋町の六兵衛と申しいすまづしい者のむすめ　金「ヤ、そんならアノ珠數屋町の古鐵買の六兵衛どのゝむすめであつたかアノおめへかトあきれてものもいはれねばわが身のうへはをさなき時より。母にわかれ家まづしきゆゑ。去るかたへ里にゆきて。やうやく成人なしたるところ。里親にだまされて過し年この大磯の苦界にきづみ。父六兵衛は夫より先に。亡靈の數に入りたつた一人の妹は。藁の上から情ある。おかたにもらはれ育つと聞けど。つひに一度逢ひもせず。便りなき身はつねづねから。妹ばかりがゆく〳〵の。力とおもへどかひなきつとめ。まめで居るやらどふきたやらと。案じるのみと身の素生をかたるをきいて。金五郎は驚くとひとかたならず。我こそなたが妹の親の。文之丞が男子なるが。をさなき時より妹おかめは。吾身と共に人となりていまだ枕はかはさねども。行末女夫の約束して。中よくくらすそのうちに。われは此地の叔父の家へ。もらはれ來りしその後にて。おかめは家出し果たるにや。行方のきれぬその處に。今また思ひがけなくも。姉のおん身にめぐり〳〵て。今宵名のりあふといふも。やつぱりつながら血すち

の糸。あやしきえにしなりけりと。いちぶ志ゝうを物語れば。ます〳〵駭く眞名鶴は便にせんと藥しみ待し。只一人の妹まで。世になき人と聞からにかなしさいとゝいやまさり。志ばし涙にくれにけり。かゝるえにしの淺からぬ。中なればなほさま〳〵に。身のうへの事かたりあかしぬ。されどもたがひに一ッに寐ず。一旦金五郎も妹お龜に。女夫の約束せしとなれば。今さらその血すぢの姉が流れの身とても枕かはすは。さすがにうしろめたくおもへば眞名鶴もまたその心ゆゑ。すいた男とにくからねど。帶紐脱ては死したる妹の供養にならずと心につゝしみ。いやらしきとさへ言ず。さりながら金五郎もこのまゝにもふり捨られねば。是より常の客のごとく。をり〳〵眞名鶴の處へ通へど。決して枕をかはすとなく。酒などのみては憂をかたりぬ。かくてその月もくれ八月のはじめになりけるに。例のごとく思ひ〳〵の。俄狂言をどりなどさま〳〵あるその中に。額俵やといふ茶屋の今度かゝへの藝者の小三。品かたちといひとりなりまで。五町にまれなる容貌ゆゑ。淺間のをどりにこの小三を傾城奥州に仕立。衣裝着つけも美をつくし。淨瑠璃は登見本阿輪太夫にて。人の耳目をおどろかすをどりゆゑ。廓中での大評判。をりふし金五郎は。待宵の月をながめつゝ。俄を見物なすべしと例のごとく守田屋の二階にて。眞名鶴と共にさけくみかはし。今や來ると待ゐるところへ。程なく來る淺間の踊り。節おもしろき太夫の上るり「あさい心とゝいら糸の染てくやしきなれ衣ありしな

がらの一ッまへ小づま揃へてしどけなく風に柳のふくまゝに
まかせるはづのつとめぢやとてもいやな客にも比翼とざ思ふ
男の山鳥の　トかたる文句につれて踊る小さんを。金五郎は何心なく。見ればふしぎやすざし頃家出して死したるおかめに。寸分違はぬ顔かたち。これは不思議とまたゝきもせず。見れば見るほど違はねは是もわが身の迷ひかと。思ひ直して見るものゝ。外の女と思はれねば。もしや浮氣なこゝろを出し男をこしらへこの廓へ。にげて來てゐるとにやと。まはり氣すれば腹立志く。さりとて人に問も異なもの。とつくりやうすを見きはめんと。そ志らぬふりにて見てゐれば。幇間のへぼ吉見とれつゝへぼ「イヨ〳〵濱の本店。小さん大明神さま〳〵〳〵。外にはは決してでぜへせん三千世界にたつた一人り目八「イヤ有がたし妙でござへす。濱むらや丸むき額俵屋の大黑柱。ありかたいの天上め。咲屋姫の再來か。三國一の無類〳〵　金「たいそふほめるのふ。賄賂でもらやァ志ねへか目八「モシ旦那賄賂どころか。けふもきのふも昨日も今日も文玉章の數〳〵は。ヤモシあんなうつゝい美婦人がつけ文をするのでのぼせやすのさ女げいしゃおさわ「ヲヤ目八さんきついこつたヲ。十九文やの見せさきのやうに。うぬほれかゞみが澤山だヨヲホ、、、、目八「ヘンやつかましい妬な〳〵。おとわぼうは氣めへはいゝが。とかく妬のでおそれるのッおさわ「ヲヤよしておくれおまへのおかみさんとはちがふによモシ旦那へアノ小三

さんはヲ。上がたからこのごろまゐりましたさふでございますが。よく早くのみ込まましたちやァでございませんか　金「さふかとんだ遠くから賣れて來たの。大かた男と欠落でも出て。其男にうられたのだらう目八「旦那きついもの。おめへの判談の通り。男とはる〳〵にげて來たがその男にたぶらかされて。泥水へ沈んだのでござへますッサ　まなづる「ヲヤ〳〵アノ子がかへ。どふもさういふやうすには見えいせんねへ。もしへさうぢやァおつせんかへ　金「おいらんはさういふけれど。そこが譬の小袋と小娘油斷のならねへ世の中さのへ」「ナニ〳〵旦那。さういふ譯ぢやァござへませんッサわたくしがこのあいだ額重へめへつた時。よく氣をつけて見ましたが。それは〳〵起居ふるまひの物ごなしやかさ音聲はさはやかにして鶯のさへづるごとく多辨でなくはすはでなく意氣でおやんとして程がよく。鴨川の水を產湯にあびて。京おしろいをぬかぶくろに入て。みがきあげた眞の美女さヲ　トはなす處へあるト「モシ旦那額重の小さんをごらうじましたか　金「フウなんだかろく〳〵見なんだが。よつぽど美婦人ださうだの庄「さやうでございます。先このごろでの藝者だと申ますいゝ金筥をかゝへましたトさり〳〵ひやうばんのそのうちも金五郎はむねに手をおきアノ小さんとそ面ざしといひ。上がたから來たといへば。おかめによも相違はあるまじ。眞名鶴にもうち明て。やうすを聞んと思ひしが。なま中あからさまに語りても。健で彼してゐるからは。心がはりで男のために。身をまづめしぞはかりがたし。とさま〳〵に思案して。今宵は去りがたき用

ありとて。そこ〳〵に座しきもきりあげ。眞名鶴に別れて大門を出しが。忽ち又取てかゝし。ひそやかに額俵屋重兵衛の處へゆき彼小さんに口をかけて。二かいへあがり酒のみながら今や來ると待ところに程なく小さんは俄をきまひ。うかぬ顏にて何氣なく。二階のはしごをそんと。上り來りて金五郎の。そばへ立寄顏見合せハッとばかりに驚きあはて立んとするを金五郎は　すそなとらへ目をつりあげ「コウ小さんとやらなぜ逃る。氣障な客だからきに入らねへか。きざならきざでいゝけれど。ものもいはずにそきらぬふりは。見わすれたのか見くびつたかよもやわすれはきめへがの。未練が殘つて來たのじやァねへ。聞とかあるから下にゐろトいはれて小さんはむねにくくめんぼくなげにひれふして只さめ〳〵となきゐたり金五郎はなほこゑあらそげ「コレあいさつきねへは面目ねへのか。エゝそのざまはマア誰ゆゑだ。定めしかはいゝ男のために。心がらのこのつとめ歟。よく物をつもつて見ろよ。犬猫でもそれ相應に。恩といふとはきつてゐるぞ。それになんだ己の顏を踏つけにするはおろかな事。わらの上から育られた。產の親より恩の深い。養親の情をわすれ恩を仇の犬畜生。ぎりある親の名をけがし。耻をはぢとも思はぬ狸め。よくマア面もかぶらずに。のけ〳〵と出てうせたナ。いかに遠路をへだつるとも。多くの人のいりこむ廓。この鎌くらにもおれが親父の文武の弟子はいくらもあれば。この街へもみないりこむはそれに面を合しても耻ぢやァあるめへ耻でもなからう。さういふ事とはつゆきらず。親父は直なこゝろから。神かくしにでもなつたのか。又

は身をなげて死んだかと心を盡して尋ねさせ。うらなひ八卦御闔にも生死の程もわからぬから。家出した日を忌日として。佛事供養も懇にすると。くはしい書狀がきたゆゑに。こどもの時より一ッに育ちし。馴染がひに朝な夕な。念佛申てやらふとおもへど。今は養子の身の上なれば。兩親の前へも遠慮がちで心にはまかせねど。合間を見ては回向して抹香くさい佛いぢりも。萬一たつしやでゐるならば。身の祈禱にもならふかと。心づくしに引かへて。生根のくさつた愚ぢらす。大切な親をふり捨て。この土地へ來て泥水活業。ヲヽ貞女だ節義ものだ。髪のかざりの櫛笄。はでな衣裝にうは氣なとりなり。長唄豐後はやり唄や。一中ぶしをうなつたり是見よかしに踊ををどつて。客のきげんをとるとゆゑ人も迷はふ惚もきやう。惡性ものゝ天上め。モウ〳〵あいそのつかしをさめだ顏を見るのもいま〳〵きい。ものをいふのも是ぎりだから。勝手次第に浮氣をきをれトいひすてゝ立んとする小さんはきどういひわけなさ小三「サヽヽヽみな御尤でござりますが。マア〳〵待てくださいまし。くはしい樣子を御ぞんじないからお腹をお立あそばすも。すこしも御無理はござりませんが是にはいろ〳〵ふかい譯が　金「ヲヽ譯もあらふし義理もあらう。けれともそりやア聞耳やもたぬへ。ヱヽいけふざけたはなさぬへか小三「いゝへはなしはいたしません。言がひのない心から思ひもよらぬおうたがひ。死のふと覺悟極めしは。今日の今まで日にいくたびやつぱり死なれぬ因果どふなりとして今一度あなたのおかほを見たう

へにと。あまたの人の入りこむこの花街。そればつかりをたのきみにつらひ苦界に身をしづめて。はぢや人めに氣もつかず　金「ヱヽやかましいよしにきろどゝ一の文句めいた。そんなせりふはをかしくねへ。流行言に道理をつけたり間に合の口ぽこでも。モウその手ぢやアばかされねへは小三「さやうではござりませうがどふぞ情とおぼしめしてたつた一言申すとをお聞なすつてくださいまし。そのうへにてはともかくも殺してなりとお腹いせ。御勝手きだいになされまシト身をなげかけてすがりとめ。なみだながらにわびるにぞ。金五郎もさすがまた心づよくはいふものゝ。にくからぬ小三のとゆゑ。すげなく立ても歸られねば。袖ふりはらひ身をそむけ。銚子の酒を手酌にして。茶わんにうけてぐいと呑み。手まくらをして寐ころびゐる

小さん金五郎

假名文章娘節用前編中卷終

小さん金五郎

假名文章娘節用前編下卷

江戸　曲山人補綴

第三回

當下小三は胸なでおろし。泪を袖にぬぐひつゝ。金五郎の側へさしより小三「今さら實を申ましても。一旦お疑ひを受ましたれば。誠とは思し召まいがあなたにお別れ申てより。一日片時わすれませず。泣てはあかし哭てはくらし。いつそかなしい日をおくるも。やがて東へ落ついたら。呼によこすとおつゝやつた。そのおとばを力にして。今日か明日かと指をりてまてば一日も十日のおもひ。明ても暮てもお便なく。一ト月たち二タ月過三月四月と日は立てども。風のたよりのお文さへ。ないてくらしてをるうちに。この春の彌生のころ。日さへわすれはいたしません。上の八日の夜もふけて。みな家内は寐ぢまつても。わたくしばかり目も合ず。こしかた行すゑどうかうと。思ひまはせばいとゞ悲く。たよりなき身にあなたにまで捨られては世にたのみなく。いつそ死なふか果やうかと案じすごしてをります折から闇の戸とん〳〵うちたゝき。小さん〳〵とあなたのおこゑ。さてはと嬉しく戸をあけて見ればなんにも眞の闇これも

心のまよひかと。また寐まするとまた又とん〳〵小さん〳〵とよぶこゑの。三度四たびときこゆるゆゑまた出て見れば物もなしわれとわが身で合點もゆかず。途方にくるれば寺〳〵にひゞく夜中の鐘の音の。あはれ無常を告るかと。ながらへがたく胸せまり。物うき月日を送りますのも。心ぐるしく苦患になり。いつそ死んだかましであらふとおもへば悲きりにぞく〳〵と首すぢもとから身の毛たち死ねよ〳〵と死神の。ついて死ぬのをすゝめますのか立てもゐても落つかずわれをわすれてぶら〳〵と家をぬけ出はしりましたが。その後の事はさつぱり悲らすどうして身を投しやら。加茂河へながれ着たを近所のものに引上られ。息ふき返して見ましたところが。顔も見忘らぬこはい男が。ぜげんとやら人かひとやらいふ。男とふたりでいろ〳〵なあだいやらしいことをいふて。抱れて寐るかいふと聞かと。いはれてことはさおそろしさ。いろ〳〵にわびて言してもことはい目ばかりいたしまして。聞入れのない無理非道。といふて身をけがすくらゐなら。舌を喰てなと果ませうと存じましたが身を投てさへ助るものを。まだ命の盡ぬとなら。どうぞして東へくだり。あなたのお顔をもう一度。見ましたうへで死たいものと。おもふた心の通じましたか。その悪棍がいふときかずは遠い大磯へ賣こかし。金にするとやら申ますゆゑ。とても運わるく死おくれ。悪者の手にとらへられては。おとつさんのところへ直すなほには返すともありますまいし。どうで憂目をみる位なら。大磯の廓は朝暮に。人の入りこむところと

いへば。そこへ身を沈めたなら。あなたにめぐり逢はれふかとはかないことを便りにおて。御恩のふかいおとつさんを。お見棄申す心はなけれど。心一ッに詮かたなく。とう〳〵この額俵やへ。歌妓にうられてまゐりましたが。おもひもよらずたつた今。あなたにお目にかゝりましてあまりのとのうれしさに。ものさへいはずに立ましたは私が前後の考へなく。不調法でござりますから。おゆるしなされてくださりまし。殊にあなたに逢たいばかりに。覺期いたしてこの苦界へ身を沈めは沈めましたが。今さらお目にかゝりますとまとに身のほどがはづかしく。消てなくなりたふでござりますどふで大切のおとつさんを捨。道ならぬとに身を墮し御苦勞かけてあなたには。御憎まみをうけたこの身いつまでながらへをられませう。どふぞこの世の思ひ出には。今までのおうたがひをおはらしなされてくださりまし　トおぐうなみだのうるみでふにひさのきこゐをはゞかりてわびるとばのせつなるをきけばさすがに金五郎もいつたんはらはたちけれど　かくまでわか身をふかく思ふてこの泥水に身をおづめても。蓮に似たる心の潔白。苦勞さするもわれゆへか。不便のものやと心にはおもへど男の事なれば。そのまゝ心もをれかねて。返事もせずに空睡小さんはなほもすりよりて「もしあなた是ほどまで申ますのにおなほさしのぞきく〳〵うたがひがはれませぬか。ヱ。ヱ金五郎さんへ。どふぞ御堪忍あそばして。お心を直してくださりまし。もしおうたがひがはれましたら。たつた一言いつものやうに堪忍するとやさしいお詞。お聞せなすつてくださりましよよトぢがれあらはすむすめ氣の金五郎にとりつきて泪をはらひこゝろづきて泪をはらひ

あたり見まはし金五郎の側へに置たる指添を音せぬやうにそろりと扳を。見るより金五郎はとねおきてその手をおつかゝ金「コレ何をするあぶねへは人おどしの刄物三味かトいふかほつくづく見て泪ほろり小さん「ヱゝお情ないそのおとば女子だてらに人おどしのこはい刄物が持れませうか。そりやあんまりでござりますなんぼあなたが男でもお情ないお胴欲でござりませふ。是ほど事をわけまして。お侘言を申ますにたつた一言のおへんじもなく。おばらくお目にかゝらぬとて。そんなにもヤアわたくしがにくゝておいやになりましたか。夫りやあなたでもござりませぬ。たとへ女夫のかためはせずとも一旦あなたのお口から。戯談におつおやつたかは存じませぬが。行すゑかけて女房にするの。二年や三年遠ざかつても。かはる心はないとの。短氣を出さずに便りをまてのと。人ばつかりを嬉しがらせて。わづか半年あまりのあいだに。左樣お心の變りますはあんまりきこゑぬあなたのお心。どうでそのやうにおきらひなされば。なにを樂しみに今日が日からむだに命をながらへませう。わたくしがなき後でせめて一遍の御回向をと。申た處がおいやの私。とてもそれもかなひますまいこれもみんな約束ごと。いたしかたもござりませぬ　トゆだんな見すまし　またぬきかけるを金五郎はさしそへもぎとり　金「はやまつたとして後悔するな。それほどにふかく思つてゐるなら生ながらへて後の世まで。人の物わらひにならぬやうに。にごりし名をもすゝぎあげ生わかれた眞身の姉に。めぐりあふて名告あひ。古鄕に殘したわが親父に。孝行せうとは思はぬか。殊にそな

たの身のうへは。此家へ賣れて來たとゆゑ。我ものならぬ主人の骸。なりや今こゝで死で見ると。主人も難義。このおれものがれぬ中で難義をするは。死は一旦にしてなし易く生はかたしといふところへ心づかぬかコレ小さん小三「ヱヽそんならあなたおうたがひがはれましたと申しますのか。そりやほんとうで御座りますかへ　金「ウンヨなに虚をつくものか小三「ヱヽうれしうございます。それでちつと氣が落付ました　トたがひに心はとけながら金五郎も男のいぢ　なんさやわらぐとばもなければ又酒肴を　いひつけて唄妓幇間をよびにやると。ほどなくみな〳〵どや〳〵と見參つかまつりませぬ　金「ほんに目八公。さつき逢たまんまだつけの目八「ホイさうであります　したつけかもく藏「大きく宏り目八公それぢやア先刻已來といひてへのふ　げいしや　おとわ「ヲヤ旦那お歸んなすつたとぞんじましたら。またこゝの穴へお這入なさいましたヲ。ヲホヽヽヽヽヲヤ小三さん是はおはやう。さぞおくたびれなすつたらうトあいさつするに小さんはけ　ごられ下さなみだをかくし　小三「アイやう〳〵今志まひましたヨ。まとに〳〵暑くつて。びつちより汗になりましたよトいひまぎらせざさかくにむねのごてふさぎもく藏「ときにおいらんはまだ御入内がごぜへませんね。モシ旦那やつがれがちよつと勅　うきのなさまらねばさしうつむい　使に立ませうかトいふに金五郎は「ナアニ足下の足を勞すまでもなしさ。ちつと見かけた山がある　わらひながら　からおいらんの處へ勅使もたてず御内意もきねへのよおとわ「ヲヤ〳〵旦那はおいらんに。かたい約束をなすつたぢやアありませんかへそれにマアそんなとを　金「ナニサ今に容子がわかりせ

へすりやア。眞名鶴も呼にやるのすまアそんなとは偖置として諸事酒だ唄へ〳〵　トぎよいにきたがふ　げいきやの長うた

のきやくしもは捨小船

ばは。はやとくせりのはやり唄。上がたうたでさはぎ立れど。とかく小三はうき〳〵せず目八は小三のかた　なたき　目八「コレ女房どもなぜマアそのよにふさいでをる。ちと浮〳〵きやいのふィヨ成田屋ア　小三「アレモウいやだヨおふざけでない目八「コレサなぜそんなにぴんきやんするのだ。人目が多くてはづかしいかさうか〳〵ハテさて初心な子ではあるぞ。おまへとわたしのその中はきらねへものはチエもし旦那　金「大きにサの。右左この子は男が嫌へだそうで。なんぼ馴染のねへおれても。ちつとかそつとは何とか彼とかのふおとわさわ「さやうさねへ。今日はどふかおきださうでまとにふさいでお出なさるが。こりやア何か譯がありませうトけごつたやうすの口うらに　金「さうヨ大かた色男が。待てゐるのをこつちへ呼だでそれできつくふさぐだらう。どふでおれがやうなのつぺらぼんは女にやア緣遠いからな。兄弟分になるつもりだ。ちいせへもんぢやア面倒だからサア〳〵是へついでくんなト大きなゆのみへ酒をつがせのみに「モシあなた。それではあんまり過ますぞへ　金五郎「なぜ酒がすぎちやアわりいのか小さん「わるいと申すぢやどざりませんが。あんまりあがるとお身の毒わたしがすけてあげませう。是もやつぱり勤の一ツみなさんわらつてお

くんなさんなよトぐつとのみほもく藏「イヨ濱〳〵ありがたし玉藻前の再來め。これらがほんのよしこの〳〵旦八「モシ旦那わたくしが目のわりいせへか。小三さんはどふもおいらんに似てゐなさるぢやァでせへませんかトいはれてふたりはむねにぎつくり　金「ナニ小三がカどれ〳〵トわらひながら小三の顔をさしのぞけば小三はうれしさ恥かしさにはながみでか　金五郎はわざとそらとぼけ　金「ほんにのふ足下の目のせへでもねへ。おれにもさう見えるやつヨ。他人のそら似とやらだのふ小三トいはるゝたびに小三「どふでございますかわたくしなんぞか　金「アヽなんだかひどく醉がまはつたケエイ引コウ小三水を一ぱいもつて來てくんなトそのまゝそこへうちふすにもく「旦那もし。モウたぬきでお逃なさるヲそりやァちかごろあなたでも御せへません。モウ一ッ献じませう。モシ旦那およつちやァいけません。モシ旦那これはまたりモウおよつたそふな目八「そんなら。モウそろ〳〵軍勢はこの陣を退かふのふおとわさんおとわ「さうさねへトいふところへ小三ばちや小三「ヲヤ旦那はおよつたかへ目八「さやうさ。あんまりあがりつゞけだからちつとおよるがようでせへやせう。そんなら小三さんおゆるりともく藏「まかし旦那と小三さんとさしむかひぢやァ。猫に鰹節泣子に乳で。ちつとあぶねへものだテヲ小三「ヲヤいやよ。わたしも今に下へ行がヲアノおとわさんはゞかりながら。枕どかいまきをちよつと下へさういつておくんなさいなおとわ「アイ〳〵合點でございますヨトみな〳〵は引下へゆくちがへて下女かいまきと枕を持來り下女「モシ枕をおさせ申ませうかへトいふとき金五郎は小三の膝をそつ

とつく。小三はこゝろを呑こんで小三「ナニわたしが今お起し申て上るからそこへ置ていつておくれ下女「ハイ〳〵かしこまりましたトまくらをおいて金五郎は目を明てあたり見まはし枕を取て又ねころび　金「七段目の由良といふ計略だサァもつとこつちへよんなト小さんの手をさ小三「また誰かまゐりますよ　金「なんのとつたな。そんな野暮なものがあるものか。但しはいやかうれしくねへか小三「あなたのおこゝろがとけまして嬉しいとはうれしいと。思ふにつけて又一ッ。心がゝりが出來ました　金「そりやァマァ何が。やつぱり誰にか義理だてか小三「人の事よりあなたのとさ。聞けば千年屋の眞名鶴さんと。深い中とおつまやるとト。眞名鶴さんは情を賣か。勤めのならひに引かへて。わたくしは又座敷ばかりの。はかない歌妓の身のうへゆゑ。たとへどのやうな譯あつても。彈妓は抱へへの女郎衆には。勝れぬが廓のならはし。それゆゑなま中お目にかゝつても今日より末はどのやうな。つらひ憂目を見ませうか。まらねばまらぬで心はすめど。あなたと眞名鶴さんとの譯もあれば。やつはりほむらをもやすたね。悋氣は女子の嗜なれど。出るやうすが女の淺はかに。よい貌ばかりはしてあられず。どのようなとであなたのお名まで。なとでもありませうかと。今からそれがさきだつ苦勞。思へばかなまうでございます　金「なんのこつたなこりやァおかしい。そんな苦勞を今からすると。天井で鼠が笑ふによ。この廓の立だといつても。思ひこんだが男の意氣地。廓の掟をやぶつて見せうと。いふはまとの意氣張づく。

だが眞名鶴とおれが中も。ふかい馴染であらふかと。一寸聞ても腹が立はづ。牽頭歌妓もくはしいとは。たがひに顔に出さぬから。惚て通ふとおもつてゐれど。これにやァ深い樣子がありのヨ。と言譯は外でもねへが。おめへが家出をきたとをきらせの狀にがつかり志て。この世に望みも絶たから。ながらへてゐやうともおもはなんだが。又よく〳〵考へて見ると。實に死だか壯健でゐるか。又は外にいひかはした男があつて逃たのか。取とめたともわからぬのに。己ばかり心中立るもあんまり愚痴な穿鑿で。末代人のものわらひ。殊に上方の親父をはじめ。此地の養父や養母に。苦勞をかけるは大不孝と。心でこゝろを取直しても。おめへのとが忘られねへから。他の女にや心もうつらず。一日〳〵とくらすうち。友達にさそはれて。いや〳〵籠を見物に。來た日が丁度眞名鶴の。突出しの日でとり〴〵に。美くしいと評判するゆゑ。もしや少しも似てゐるかと。見れば迷ひかそなたにそのまゝハテ似た者もあるものと。客になつてよそながら聞ばやつぱり都といふから。心ゆかしくなつかしく。初會の晩からうちとけてがひに身の上あかした處似たのも道理お鶴といつて。里にやられた六兵衛どのゝ。物頒娘と聞てびつくり。妹のおかめは斯〻と。咄せばお鶴も共に驚き。泣つかこちつあはれなはなしで一ツに寐るは偖おいて。妹のそなたに心中立。帶紐とかぬさすがの氣性。おれとても又おめへの生死が。知れぬからとて姉の。眞名鶴を抱ても寐られず。といふて見捨るも本意でねへから。

妹のよしみに客になつて。末ながく力にならふと。約束をして通ふゆゑ。深い樣子のあるとを。誰一人知る者もなく。今日まで義理であそびに來たのヨ。ところが今度額重で。かゝへの藝者の小三といふが淺間の踊りをおどるといふが。廓中での隨一と。とり〴〵に評判するを。守田屋の二階で眞名鶴と共に。見ればそなたに違はねば。どういふとでこの廓へ。遠路を隔て來てゐるかと不審に思へば幇間ともが。男のために身を賣たの男と逃たのなんの彼のといふを聞てはこの胸が。はりさくばかりに腹が立て。心のくさつた女の事ふりむいて見るもいま〳〵しいと。あきらめて見ても凡夫のとゆゑ。やつぱり迷ふ心の愚痴からなんでも實否を糺したうへ。ともかくもきやうとおもつて。みんなにきらせず歸つたふりで取てかへしてこゝへ來て。見ればそなたに違ひはねへが顔を見るよりものもいはずに。逃るから猶腹が立て今のやうにいつたも無理ぢやァあるめへがの。かう心がとけるからは。眞名づるを爰へ呼で兄弟の名のりをさせてやるぜトきいて小三は大「ヱヽそんならァノ眞名きにおどろき　金「さうヨ正眞正銘のおめへの姉よ小三「ヱヽそりやマァうれきうございます。

へァノ姉さんで

さうとは微塵もぞんじませんで淺い女のこゝろからいろ〳〵愚痴な恨とはもつたいないとも恥かしいとも。又嬉しいもやま〳〵なれど。なんの因果でこのやうに。兄弟ふたりがそろひもそろつてつらひつとめの流れの身はかないなりで名のりあひ。つもるはなしのうきとも。亡兩親

が草葉のかげから。御聞なすつたらうかばれますまい。おなじつとめのその中でもだまされしとはいひながら。眞名鶴さんは親のため。苦界にまづむもばちでもない。それに引かへわたくしは。いたづら事の心がら。御をんの深いおとつさんを。都に殘して此つとめ我身でわが身の愛相もこそも。つきはてゝはづかしい。面目もない身でございます　金「なるほど夫ももつともだが。ハテ何事もみんな約束。どふするものかまかたがねへはなそんなことを苦にやまねへで。久しぶりだから。浮〳〵して。ちつとにつこりして見せな。いつでものろけるやうだが。眞名鶴とおめへとよく似てゐるが。ならべて見たら又いちだん。おめへのほうがうつくしからう　小三「ヲホ、、、、そんなことをおつまやるけれど。姉さんとおまへさんは。どふもまれませんヨトにつこり笑て　金「こいつァおかしい姉さんとおれがどふまたと小三「ヲホ、、、どふもなさりはまますまいが。わたくしはどふも　金「なんのこつた寐たらふといふとか小三「ハイ　金「ハテおめへも疑ひぶかい今もくどくいふ通り。ちいさい時からひとつに育つて。あんまりかわいがられもまなんだが。にくがられもまねへ中だにおめへをすてゝ眞名鶴に見かへるこゝろがあるものか小三「それでも戀は思案の外。をとこの心は秋の空とやら。おうたがひもふすでは御座りませんが。アノ芝居でもいたしますお半長右衛門を見るやうに。思案の外の不義いたづら長右衛門は年といひ。おきぬといふおかみさんのある身分でひとり娘のおはんをば。身おもにさせた

いたづら者　金「コウ〳〵なにをいふそりやァほんの狂言だ。よし又實説のことにもまろ。なんのおれが水くさい。そんな心をもつものかな。朱にまじはれば赤くなると。おめへもわづかなあいだ泥水をのんだら。たいそう手も足もはへたの。モウいゝ加減にやきもちをやいて久しぶりだから。もつとこつちへよんねへヨトぐつと引よせて小三「わたくしはモウあんまり嬉しくつて夢ぢやァないかと思ひますヨ　金「ヘン夢なら大かた。はやくさめればいゝとおもふだらう小三「又そんなにくいことを夢ならどふぞ。いつまでもさめずにおれば。よふございます　金「うそ〳〵。そしてモシ夢ならどふする氣だ小三「どふもいたしませんが。お側にゐて　金「それから小三「ヲホホ、、、いやでございますヨ　金「寐るのがいやか小三「どふだかそんじません　トかほをあかくまてうつむく　金「ナニまらねへことがあるものか。だれかにおそわつて御存じだらう。ドレちよつとあらためて見ようト帶も心もうちとけて。ちぎりそめたるゆかたびら玉のあせをやまぼるらんかくて是より金五郎は千年屋へ入をはしらせ眞名鶴をまねきよせて。小三に對面させしかば。眞名づるもまきりに驚き生れてはじめて兄弟の。まめで逢ふたるよろこびに。嬉しさあまる悲しさは身まゝにならぬつとめと勤。あぢきなき世とうちかこち。泣つわらひつ夜と共にかたみに憂をかたりける。かくまで小三と金五郎は。淺からぬ中なるゆへ眞名づるは小三の事いふまではなけれども。千世に八千世もすへかけて不便と思ひ憐みて。お情かけてくだされかしと。いと念頃にた

のみける。偖も金五郎は小三と契りを込しよりたがひにつのる戀中に。一日逢ねば氣にかゝり。二日も顔を見ぬ時は心もすまず苦になるまで。一トとせあまり通ひけり。ころしも師走の半ばにて。雪は木ずゑの花とちり寒さいとはぬ若い同士。雪見の船を枷へつけ。連をはづして金五郎は。ほろゑひ機嫌に只ひとり額田原屋へ入り來れば。それと見るより若い者「これは旦那だいぶお遲ふこの大雪に。よい御きげんで　金「雪のふる夜も雨の夜も。かよひくるわの大門をか。ハ、、、、めつぱう寒くつてげん氣なしョ。十公いつものとふり飲込だらうの十吉「ヲット合點承知之助。モシ今夜らはまつかりおあつたまんなせいましサアお二階へ　トあんないに金五郎奥の小座敷へうち通れば　娘分のおきく茶たばこ「ヲヤ金さんよくいらまやいました。お珍らしいものが澤山ふりましたねへ　金「さうサ夫だから一ばい寒いのお菊「よくこのヤアおさむいに。あなたもよつぽど小三さんにやァ御信仰でございますヲ　金「御すいさつのとほりス。まかしおめへなんぞも容貌はよし氣めへといひ。まん心をする男が多からふ　おきく「ヲヤよろしく申しておくんなさい。なんの私のやうな者をつめつてくれる人もございませんヨ　金「うまくいふぜ。まつぽりとまんねこではまぐりのお吸物をゞてる人が。のふおきくさん　きく「ヲホ、、、、あんな。にくらしいとを。小三さんにいつつけますよ　金「ハ、。コウお菊さん。おめへに献上まようと思つて持て來たものがあつたつけ　トふところから本べつこうのくわんぎくのくしを出してやる　きく「およしなさればよいに。毎度どふも

お氣のどくさまで　金「なんのヤアだまつて取て置なナおめへのすきな。紀の國やのだからきく「まとにありがたふござります。ほんに釣菊がた源之助のでございますヲ。どふもまとに風といひ。甲といひ。いつそ好た形でございますヨ　金「コウときに小三は都合は能かの。どこぞ座敷へ出てゐるかへきく「イヽエなんでございますヨ方〻から口がかゝりましたが。なんだか氣色が悪いとやらで。みんなおざしきをことわつて引こんでゐなさいますよ　金「さうかどふまたの。又れいの癪だらうきく「ナニ癪ではありますまいが。大かた此雪に。あたんなすつたのでありませう。小三さんの氣色のわるいは。おまへさんのお藥が。いつち。よくきゝますからはやくまらせて參りませう　金「何のかんのと嬉しがらせるのか。おまへもよつぽどさるものだヨトきせるで志りをきく「ヲホ、、、、有がたふございますトおきくは立て下へ行ほど階子をあがつて出來る。すがたは何なく小三はまづ〳〵か。なやましげに顔色さへも常ならず。あらひ髪なる島田髷。鬢のおくれ毛寐みだれしを。黄楊の小櫛にかきあげつゝ。おもき顔にもにつこりと。わらひをふくむあいきやうは。俗に所謂いのち取男ころしといふべけれ。金五郎はあんかへあたり寐ころびてゐる側へ。小三はよりそひ。さしうつむくをさしのぞきつゝ　金「どふしたひどくふさぐのふ。雪の寒さにあたつたか。かぜでも引ァまねへかの小三「風もちつとは引ましたが。そればかりではありません　金「フウそれ玄やァいつもの持病の癪か小三「持病や酒の二日酔なら。ふさいでゐてもあなたのお顔。見れば直るは

常の事そんなとではござりません　金「ハテおつなとをいふもんだの。そしてマアどふいふとだ
小三「なんだかいつそ苦になつて。人にも言れぬ心の苦勞　金「ナニ人にいはれぬ苦勞が出來た。
ハテナ。ハヽアそれぢやア大かた。なじみの客が身うけをするといふとか小三「なんのマアそん
なとがアノなんでございます　金「なんだとは小三「アノ是でございます　トはちへゆびをさしてはづかしそうにかほをかくす
金「そんならとまつたのかアノ夜喰のかたまりが出來たといふのか小三「ハイそれだからモウ。
まとにくらうでなりません　金「なんのとかと思つたにどふでかういふ。なかだもの。子の出來
るのは覺悟のうへ。なにも苦にするとはねへ。そふしてとまつたのは。いつからた小三「モウ三
月ほどになりますヨ　金「そりやア大さうはやかつたの。おかし身おもになるからは。いつ迄つ
とめも。なるめへから。追つけ春になつたらどふなりと。重兵衛に懸合てつがふしてつとめを
ひかせるから。必ずふんじることはねへヨ。マア〳〵何はともかくも。實をむすぶ目出たいこ
とだ。こゝろ祝ひにこれからわつさり。みんなをよんで酒とせう小三「とは言もの〻これからは。
一チばいあなたに御苦らうを。かけませうかとそれが今から　金「くらうになるとは金ばかりの
くらう。つまらぬことを案じ立して煩つてくれちやア。いかねへゼサア〳〵酒だトこれよりい
つもの幇間藝者。大ぜいあげて大さはぎ。酒筵にときやうつしけん
小さん金五郎

假名文章娘節用前編下卷終

娘節用二編叙

いろは引の節用集は。日用の御重寶にて。士農工商が朝暮の引書。乾坤時候草木器財。何でも撰採十三門。部分に四聲の畫引入らず。和らかいのが當世と。思ひついたる假名まじり。娘節用とこじつけしを。俗でいゝとか實意だとか。茶かして稱る看的の。洒落を販元實とこゝろえ。二編は今些色氣澤山。戀といふ字の趣意を。穿〳〵の平催促。初編の縁にひかされて。いやといはれぬ義理と犢鼻褌。書れぬものは新趣向。變らぬ口舌の魂膽も。おもしろ狸の腹合せ。帶の心實解盡せし。小三金五郎か偕老の。その約言のひそ〳〵と。枕に殘る仇言は。こんなものでもあらうかと。書肆の携せし稿本へ。ちよつぴり加へた補書の。序に朱墨を摺ながして。口繪の前をすごすといふ

江戸　三文舍主人戯題

小さん金五郎 假名文章娘節用後編上卷

江戸　曲山人補綴

第四回

こゝに又。千歳屋の眞名鶴は。妹の小三に名のりあひてより。力になりつなられつして。いとむつましく萬の事をかたらひてくらせしが。かねてつき出しの時分より。さる有德の商賈の。隱居がふかくなじみきつ。何くれとなく深節に。よく世話をなしたりしが。其とし暮眞名鶴はかの隱居に受出され向じまの邊に樂こと世を送る身となりにけるされば月日の過と速にて明る二月のころには小さんいはや五ツ月になりしかば座敷へ出れば夜もふける又は無埜なる酒も呑むゆゑ身のためにあしかるべしと金五郎は額俵屋のあるじにかけ合些の手付の金をつかはしてちかきうちには受出すほどに夜の座しきへ出さぬやうにとたのみにあるじ重兵衛もさすがは粹な男ゆゑ早速に承知して。いと深切にいたわりけり。かくて金五郎は。小さんを身受の金とのへんと。さま〳〵に思按したりしが。もとより大金の事なれば。養父文次郎へ。うち明ていふべきやうもなかりしゆゑ。いかにやせんと左や右に。ひとり胸のみくるしめしが。やうや

うに思按をめぐらして。京師の父文の丞かたへ。ひそかに言ひ送りけるは。この程三條の小鍛治宗近の銘作にて。大小のはらひものあり。殊に燒刃世にすぐれしわざものにて。其價は。一包との事なるがもとより。兩刀は武士のたしなみ。何とぞ是を手に入たきまゝ。內々にて右の金子。御かし被下いやうにと。ひたすらに懇望の文面ゆゑ。文之丞もいとひそうなる。一人の子の望なれば。いつわりなりとはつゆおもらず。まことおもへばわが子ながらよき心がけ末たのもしく。本家を繼げとも。兩親のあるゆゑ萬事身まゝにもならで。心にまかせぬがちさこそあらんと子をおもふ。なさけある親ごゝろに。故なく百兩の金をとゝのへ爲替にてひそかに金五郎のかたへおくりけり偖も金五郎はげいしやの小さんが只ならぬ身となりしより猶さらに可愛さいやましはやくつとめをひかせんとおもへど身請の金とゝのはねば是非なくみやとの父のかたへ刀もとむる金なりとていつわりて書狀を送りしかどかの地で金とゝのふやそれさへ當にならざればとにかくに心安からずみやとのたよりを待うちにおだい〳〵に月かさなりて小さんいはやこの月が臨月になりしかば額俵屋の重兵衛夫婦も深節なる心から欲をはなれて小三をいたわり殊に金五郎の親もともゆたかなるとおもるゆゑに手附の金を取しのみにて殘の金はうけ取ねどさらにあやぶむともなく產の手當を何くれとのとるかたなくまめだちて安產をこそいのりける金五郎はかくまでも額重夫婦の深切のひとかたならねばすこしもはやく身請の金をわたした

くおもへどそれも自由ならず。ひとり胸をぞくるしめける。はや月みちて小さんは。玉のやうなる男子を産しかば。金五郎はさらなり。額重夫婦もよろこぶと大かたならず。その名を金の介と名付しが。兩親に似てうつくしければ。金五郎は日ごろにまして。小三金之助の愛にひかされ。とかくそは〳〵氣もおちつかず。内にゐるとは稀にして。額重へのみ行ものから。白翁は物領の。文之丞が不身持にて。大かたならぬ苦勞をまつれば。秘藏孫の金五郎。いたづらものになりもやせんかと。はら〳〵おもひゐたりしに。ちかきころは外を内。内を外と居つかぬも。はじめのほどは若ものゝ。ならひとさのみとがめもせず。うち捨ておきけるに。漸〳〵につのるゆゑ。かくては身のためあしかるべしと。おもふてある日わが居間に。孫娘のお雪に琴を彈せ。たばこくゆらし聞ゐたるがきせるをはたいて「コリヤお雪よ。モウ琴もよいに志やれ。この頃は大ぶん上達したが。ずいぶん身にしみてならふたがよい。わしもおのしが琴をきいて。大きにうさをはらしました。年がよるとおつなもので。外に何もたのしみがないから。お念佛でも申シたり。おのしが琴や三味線をきくのが。なによりよいなぐさみじや。イヤそれはさうと。アノ金五郎は内にゐるかの」トとはれておゆきは琴のつめをなほづしながらにこやかに「ハイお兄さんは。お部屋にお出あそばしました。なんぞ御用でござりますか」自「ヲヽさしたる用もなけれど。わしが今茶を入るから。ちとはなしに來いと呼んで來やれゆき「ハイ〳〵かしこまりました。お呼申てまゐりませう」ト琴をかたよせ

出て行く引ちがへて金五郎は祖父の自翁が居間に來れば

「ヲヽ、金五郎か。サア〳〵もつとこつちへ來て。茶が出來たから一ツ呑みやれ。茶菓子いさいわひ御前から頂戴したのをとつてあるいつにかわらぬまめ〳〵しさに金五郎も茶なのみつゝよもやまのはなしのついで自「コレ金五郎。おぬしも今が血氣のさかり。老人のいふとはおもしろふあるまいが。マアよふきゝやれ。おつなもので子をおもふは親の常で。貴い賤ひの差別はないもの。さきだつていつの頃でかあゝたか。上方から狀が來た時。あちらは一統風がはやると。さういふてよこしたもやつぱりおぬしを案じるゆへ。氣をつけてくれとの事であらう。もとよりおぬしもひとりの親。又兄弟とても外にはなし。もちろん文之丞はじめおぬしまでも。かくしてはゐるなれど。お龜とやらいふ容貌よき娘を親志らずにもらふてそだてあげ。たがひに兄弟のやうにして。にくからぬ中であつたとやら。そのお龜でも側にゐたら。又まぎれにもならうけれど。それとても行がたまれず。生死のほどもわからぬと。サ。ちらりとおりやきいたぞや。何をいふてもこちらのお雪は。まだ一向の子どもなり。内にゐてもおもしろくあるまいが。今では文之丞もおぬしをば。こちらへもらひうけてからは。お龜もゐぬゆへたのしみに。おもふはコレそちばかりぢやから。わるい耳をきかせぬやうに。せにやならぬが若いうちは。利發なものでも些づゝは。身にあやまりの出來るもの。もつともはやあそびなどは。めん〳〵の得手勝手ゆゑ。暑さ寒さも何ともおもふまいが。また内ではさうはない。アこの寒いに出てゆきをつたが。風でもひき

そへねばよいが。夜がふけてかへらねば。寐てゐてもろく〳〵ねられず。人の足音のするたびに。歸つたか〳〵。門をあめたで這入られぬのかと。引たて耳をしてきいてゐるぞや。ア いぶん折ふしは附あひなどで。あそびにもゆくがよしサ。若いうちの事なれば。なんでもするなではなけれど。このごろはあまりにこうじたぞや。それがつのるとはて〳〵は。モウどうなつてもまゝの川と。身のをさまりもつかぬやうに。なるものだからたま〳〵は。内にゐてみんなの氣もちつとはやすめるやうにおやれ。このくらゐなといいわずとも承知してゐるであらうが。つのらぬやうにおたがよい トかたいやうでもどこやらかどのとれた丸あたまなでつくことばやわらかき へすとばもなかりしが 金「だん〳〵の御異見心根に徹しまして。申し上るとばもござりません。かこれまで種〻に御苦勞をかけましたは。重〻身のあやまり。おゆるしなされてくださりましトあやまり入りたるなりからにおゆきはまたもいできたり ゆき「モシおあにいさまへ。アノ上方からお使がまいりましたヨト聞より金五郎は俟かねたる。たよりにとびたつうれしさをおられじと胸にをしかくし 金「ナニ上がたから人が來たかへトいふに白翁もき「ヲヽなんじや上がたから便りがあるか今も今とてうわさをまた處。はやふ金五郎行て見やれトすゝむる 金五郎はいそ〳〵として玄關に立出。使ひに逢て狀うけ取。ひらきて見れば刀をもとむる金一包は。使ひのものに持せつかはしゝへば。あらためてうけ取ヤすべしと。こま〳〵といひ送りつ。猶其書狀の封じの奥より。隱居白翁への書簡を

出しかば。その狀は白翁のところへさし出し。かの一封の金をうけ取。おのが部屋に入りて返書をおたゝめ。使ひの者はかへしけり。金五郎はかの一封の金を得しかば。飛たつばかりによろこびて。すぐに懷中し。立出んとして中の間を見れば。お雪はひとり一心に。人形の着物を縫ふてゐるすがたは。今年十四になりけれど。よろづうちばにして。あどけなく容貌かたちもうつくしく。心だてさへやさしけれど。小さんにくらべてはをとるなるべし 金「コウお雪ぼう。それはこのあいだの人形にきせる着物かトさはれておゆきはるみたふくみゆき「ハイあなたにいたゞきました。人形のでござります 金「それはいゝがの。おれは今出て行から。おぢいさんやおつかさんがお聞なすつたら。今仲間からよびに來てまゐりましたと。いゝ子だからさういつてくんなよトいへばおらひながゆきばわ「ハイ〳〵かしこまりました 金「なぜそんなにわらふのだゆき「それでもお仲間へお出あそばしたと申ましてもおかへりがお遲ひと。うそだとお思ひあそばしませう 金「何さあとでは又どふでも。いひやうがあるからいゝはな。案じずとさういゝなよゆき「ハイさやうならおはやく。お歸りあそばしましトいふに金五郎は出でゆく引ちがへ うば「おぢやうさんなにをあそばしいますゆき「これかへ。これは此あいだおあにいさんに。いたゞいた人形の着物だようば「もういゝかげんねゝさまいぢりもあそばしまし。いつまでもそのやうに。ねゝさまばかりかわいがつて。どふした物でございます。今に若旦那さまの奥さまに。おなりあそばすお年でからにゆき「ヲヤう

ばはいやなことをおいひだよ。あれはおあにいさんだものを。そんなことはなりません。さうしてもうどこにか。奥さまがお出だようば「それだからあのやうに。お内にとては片時も。お出あそばす空はなく。それといふもおまへさまが。もうちつとをとならしくあそばせばよいに。ほんのねゝさまで。若旦那の女ぐるひをあそばすを。志らぬ顔でお出あそばすから。わたくしはもうゑれつたくつてなりませんトいわれてお雪は氣のどくそうに。顔をあかめて猶あばいゆき「それでもアノおあにいさんは。おぢいさんやみなさんに。ま事におこゝろづかひをあそばすから。おかわいさうだものを。ちつとは御保養のおあそびを。あそばしてもよいではないかへうば「それは又志れた事。あなたはお家のお娘さま。若旦那さまはお血すぢでも。御養子でござりますもの。お心づかひもあそばす筈をト。お主おもひの岡燒もちおゆきはにこ〳〵「ヲヤ〳〵そんな事をいふと志かられるよ。上がたの伯父さんの。まことのお宿は爰だから。おとつさんよりお兄さんが。大切だとつねゞ〳〵から。おつかさんがおつ志やつたよト子供心にも金五郎を。大事にするぞいぢらしゝ。さても金五郎は。件の金をたづさへて。飛がごとくに額俵屋へ至りて。あるじ重兵衛に逢て。小さんの身の代を。わたして是までひとかたならず世話になりしを厚く報ひ。夫よりたゝちに青柳橋の。邊なる桑川といふ。料理屋の裏に家をもとめ。造作までも奇麗にしてこの家に小さん金之助をひきとり。乳母をかゝへ婢女をおきて住はせけるに。小さんは

ゆゑなく。產後すら〳〵肥立ものから。小さんはつく〳〵行すゑを。考へ見れば金五郎も。養子の身にて。この身をはじめ。金之介や乳母下女まで。はぐゝまんと大ていならず。所詮わが身はおちぶれて。一旦廓の藝者して。人にも顔を見志られたれば。今さら斯してくらすとも。誰志らぬものゝなければ。女の手わざにはかゝ〳〵しき事も出來ねば。またもとのげいしやとなればなれし事ゆへ。さのみに氣ぼねもをれぬわざ三筋の糸の世わたりも。藝は身を助ると。たとへのふしも金五郎が。せめては心やすめなりと。思へば金五郎へ我胸を。うちあけてものがたれば。今更一旦うけ出せし。小さんをふたゝび客へ出さんは。人のおもはく世のそしりも。口をしくはおもへども。萬事心にまかせぬゆゑ。詮方なくて承引ければ。小三は是より又もとの。かへり花さく唄妓となりて。客の相手に出しかば。容貌もすぐれ座もちなれば。引手あまたにいよ〳〵はやり。内に居る間はなかりけり。頃しも霜月のすゑつかた。小さんは金の介を。かきいだき。その身もこたつへよこになり。出もせぬ乳をふくませて。ねんころ〳〵と鼻うたをうたふて。寐かしつけてゐる。そのかたわらに乳母のおちゝは。火鉢に煮花をこしらへながら金の介の頭巾を縫つてゐる（かゞるところへ金五郎ばきやうトなをあけて入りきたるを小さんは見てかほをあげ）「ヲヤ入らつきやいましたか。さぞおさむうござりましたろう金五郎「さうよ。なんだかひどくひへるのふ。ぼうずめは又ひる寐かトいひながらはかたつりをぬぎすてゝ炬燵へあたりて寐ころべば。小さんはかた手にてたばこをすひつけ。金五郎に

出しながら　小三「もしおまへさんェ。あの廓から最中のもらつたのがありますがァノお雪さんにあげましていわるふございますかへ　金「ナニわるくもねへが。あんな大きなものにやるよりは。取ておいて坊にやるがいゝ小三「それでもこの子には。あんまりあまくつて。わるふございます。ほんに甘露梅もありましたから。一所にしておぢいさんのところへでもあげませうか　金「ばかァいひねへ。石部金吉鐵かぶとといふかたい内へ。花街からもらつたものが出されるものかなトいはれて小三は　こころづき「ヲホ、、、、。ほんにさうでありましたね。それはさうとァノおゆきさんは。さぞおうつくしくおなりなさいましたろうね　金「さうさ。まんざらではねへけれど。まだ一向のねゝさまなり。どこのか人とくらべては。どても及ばねへ論なしよトゆびのさきで小さんの顔をちよいとつく小さんはわらひながら「又そんなにくらしいことを。夫でもモウ女といふものは。子もちになると色氣もなくなり。つまらぬものでありますねへ　金「ちげへねへ。色氣がなくつても汁氣があれば澤山だ。のふばゝアトこゑをかくればうばもふきだしうば「ヲホ、、、、ほんにさやうでございます。わたくしのやうになつてはいけませんが。御新造さんなどはこれからが肝心でございます　小「ヲヤいやよ。夫でもおつなもので。子供にかまけると。いくじなく老いむさくつて。わか身ながら婆ァじみたとおもふやうだよ。夫だから座しきへ出てもお客がみんなわたしの事を。子もち山姥だなんのといふから。わたしも夫をやつぱり通して。斯いふ唄を唄つてやるよ『わかい時は二度はない。

有頂天までのぼりつめて。親に苦勞をかけるばかよ。子をもつて知る親の恩ほど深いものはない、わいな』「たとへ金銀で富士の山つむとも子にや易られぬ。ほんに世の中に子ほどかわいいものはない』と唄ふゆゑ。中にはむねきなお客は。てめへのやうなものにやァ。ろくな子は出來やァまめへ。子といふものは屁をひつても。できるのなんのとぢらす人があるから。わたしも又まけぬ氣で。味噌をあげるじやァないけれど。かわいゝ人と大ぼねを折て。こしらへた子だから出來合の子とは。ちつとちがひますといひますから。色氣がなくつていゝといつて。呼んでくださるからおかしいのサ　金「ヘンとんだからくりのいひ立だ。ほんにこのごろぢやァ。めつさう口が達者になつたよ。道理でおれもいひまくられるトいひつまれてゐる金の介がみゝをなぢかめながら目を覺すひきはなをつまむゆへ金の介は顔　小三「アレまたそんないたづらばつかり。とう〳〵おこしてお去まいなすつた。せつかくよく寐かしつけましたものを　金「いゝはなさますから。やかましくつてねられねへ小三「おまへさんではあるまいし　金「ナゼ〳〵小三「なぜもよくできました。あなたはいつでもひるまでづゝおよつてはお起なすつて宵ッぱりをなさるものを　金「なんの。むりにおこしても。もうねあきた時分だから。アレ機げんのいゝ事を見な。おれが顔を見ちやァにこ〳〵わらふぜ。いゝ子か〳〵いゝ坊ちやんだぞトト金の介の顔　こりや。お

つかァのやうに。うは氣になつちやァいかねへぞ小三「ヲヤけしからねへ。わたくしよりあなたに似たら。親に世話ばかりやかせませう（トいひながらだいどころのかたをむいて）お竹や何をしてゐるか。坊が起たからちつとだいておくれよ下女「ハイ〳〵サアノ〳〵おぼうさんお出てなさいまし。アノお乳母どん。わたしやァ今おぼうさんを。つれ申て惠迎院へ行てあそばせ申すから。アノ歯入やが來たら。ながしの下駄の歯を入させて。おくんなさいようば「アイ〳〵。それはいゝが。お泣なすつたらはやくお歸りよ。お怪我をさせ申さねへやうにおしよ下女「アイそんなら行てまゐりませう（トお竹はそこへ出て行引ちがへて女かみゆ小三「ヲヤおたぼさん。丁度よい間だよサアおあがり。坊を今あそびひあらひかみのおたぼが來るを見て）に出したからこの間にちよつと結ておくれなたぼ「それは丁度よふございますね。ヲヤ旦那お出なさいまし。この間は間ちがひまして。さつぱりお目にかゝりません　金「ほんにさうサ。なんだか急にさむくなつたね。モウこんなにこたつと首つぴきを。するやうになつちやァいけねへのサたぼ「ヲヤおまへさん。そんなとをおつしやるが。こたつといふものは能もので。ちよんの間の樂しみがありますよねへ小三さん小三「なんだねおたぼさん。おつな事をおいひでない。人の鼻をこするやうな。わたしらァそんなとはきらいサ　金「コウおたぼさん。おまへもよつぽど好物家だね。なるほどちよつといちやつくには。まんざらわるくねへやつさ。冬の色事はこたつで出來るやつが。いくらもあるものさ小三「もしおかしくもないそんナはなしは。もうおよし

なさい氣障でありますはね。サアおたぼさん。今に袁花ができるから。其内結ておくれなねへトこれよりおたぼは小三のたぼ「小三さんきのふはアノどこへお出なすつたへ小三「きのふかへ。きのゝかみをゆひながらは舟で酉の町へ行たはね。夫だからいつもより髪がだいなしになつたのサ　金「ナニきのふは舟へ行たから髪がこわれたと。そいつはちとあやしいたぼ「ヲヤ〳〵旦那が何かおつしやるよ小三「又おやきがはじまりさ。めづらしくございません　金「これがやけねへでどうするものか。番人のねへ生巣だもの。どんな人が釣かしれやァきねへ小三「ヲヤとんだ寃を受るもんだ。たとへどんな釣人があつて。餌魚をどん〳〵まけばとて。曲つた針にやァかゝりませんよ。はゞかりながらわたくしは　金「ヘンとんだ所でりきむやつよ。あかゑが芝居をするやうに（トかちかつてみなゆひ小三「ばァやァお茶はまだ出來ぬかへうば「ハイやう〳〵できました小三「そんなら一ッあげまし）やうト金五郎のはつおをとりてたぼ「是いはゝかりさまモウおかまいなさいますな。ほんに旦那へ此ごろに顔見せはどうでござります　金「わたしも此間からさういつてゐるのサ。小三も見てへといふから一所にお出な。四五日のうちにたぼ「夫はありがたふございます。樂しみにいたしておりますよトいふところへくめ川のわ「モシ小三さんへ。このぢうのお留守居衆が。夕方行から口をかけて。置てくれろといつてめへりましたよ小三「ヲヤさうかへ。けふはお店の衆のやくそくも有が。こつちは夜が更るからとわつて。おまへのほうへ參らうよ　わかい者「そんならのちほど御案内を

いたしませう。トわかいものはたちかへるたぼ「どれわたくしもまゐりませう。さやうなら小三さん、又明日！
あいさつして。髪ゆひおたぼはかへりけり

小さん金五郎假名文章娘節用後編上卷終

小さん金五郎假名文章娘節用後編中卷

江戸　曲山人補綴

第五回

小三は粂川より口がかゝりしゆゑ。鏡臺取出し身ぢまひの。紅粉おしろいもふかくはせず。ちよつと化粧で櫛笄前ざし一本うしろへは。銀の細うちばかりさして。いきなつくりのいやみなし。金五郎は手枕して。とたつにあたりぬいりし樣子に。小さんは戸棚よりかいまき出し。そつとかけて枕をあてがひ。そこらかたづけ金五郎の羽折をたゝんで戸棚へ志まひ。火鉢のそばへすわり。たばこを一ぷくのみ。そばにある淨るり本を手にとりあげ。よみながら乳母とはなし小三「コヽばァやよ。こんなことをいつたらまた。つまらぬ事とわらふだらうがの。水のながれと人の行すゑほど。定めないものはないよ。此淨るり本の三勝を見るやうなわたしの身のうへ。よく似てゐるがもしひよつと浮世の義理にからめられ。どんなわかれにならふもしれずマァさうなつたらどうゑやうと。外に苦勞はないけれど。そればつかりが案じられて。人の知らぬ胸をいためるよト身の行すゑをくりかへしほろりとおとす一トしづくうばはそばから打けして。うば「アレまたしても〳〵。そんな益にもたゝぬ事

を。おつしやるものではござりません。その三勝の身のうへは。それはほんの戯作もの。今どき縁切だのなんのかのと。芝居かぶやれ本ではあるまいし。どふしてそんなことがありますものか。たわいもない事ばつかり（トいひまぎらせど共なみだ小さんもむれなでおろし）「ほんにさういへばそんな物作物とは志りつゝも。身につまされて繰言いふも。やつぱり女のあさはかゆゑ。金坊といふ子までであるものを。御本妻にはなられずとも。末のすゑまで添とげやうと思はないでなんとせう。もしもの事があつたらば。夫は又その時のとも〳〵案しまい〳〵（トはなしながばへ桑川より小三「そんならばアやァ。行て來るから氣をつけておくれよ（トいかゝほんにアノ坊が。歸つてわたしが居なかつたら。又おとつさんをいびるだらうから。アノはいちやうにうづら燒があるから。あれをやつてだましておくれ。わたしが又かへりに。なんぞお土産を買て來るから。そして若旦那がお目がさめたら。大かたお茶漬を上らうから。鍋燒でも取てあげておくれ（トあとに氣くばりぬけ目なき女房かたぎぞあらはれける）斯まで夫やわが子をば。大事にかける心から。座しきへ出てもとにかくに。内の事のみ案じらるれど。勤といふ字は是非なくも。いやな客にも機げんとる。心の中ぞつらからめ。かくて小さん金五郎は。たゞ金の助の愛におぼれ。他事なく暮すその年も。くれて又來る春がすみ。たなびく空もうらゝかな彌生なかばの事なるが。金五郎は仲間の者にさそはれて。向ふが岡の花見もどりのほろ酔に。みな〳〵舟にうちのりて。青柳橋まで來りしが。こゝより上りて金五郎は。人こ

にわかれて可助といふ。供の男を引つれて。桑川の前へ來れば。乳母は金之助をいだきつゝ。かくと見るより遠くから（うば「ヲヤ〳〵おぼうさん。アレおとつさんが入らつしやいましたよ金五郎「ヲヽ坊か。ばゝァにだつとしていゝのふ。おつかァは内にかへうば「ハイお宿でござりますサァおぼうさん。おとつさんにお志ぎはへ。ヘイ御機げんよふと。ヲホヽヽヽ。イヱ〳〵おとつさんにだつこはなりません。もうまつくになりますから。お寐んねがよふござります金五郎「金ぼうやおとつさんはおつかさんのとこへ行てお乳をのむよ。あば〳〵だよ（トいふに金の介はかほを見て「おとつちやん。いや〳〵おつかちやんのちゝいや〳〵（うば「ヲヽさやう〳〵おつかさんのお乳はお坊さんの。おとつさんのではござりませんねへ。おとつさんは御きげんゆゑお志らしなつていけません（金五郎「ハヽヽヽ坊やのばかや〳〵（トからかひながら内へゆき見れば小さんは今座敷よりかへりしまゝ。三味線筥によりかゝり。物思はしげなる顔つきに金五郎はそばへよりて小さんどうぞ志たのか。おつな顔をしてゐるのふ（トいはれてにつこ小三「いゝへどうもいたしませんが。今座しきからかへりましたのサ。そしてあなたは。どこのお歸りでござりますへ（金「ナニおれか。拙者めは今日仲間の者の付あひにて。よんどころなく向ふ島へ。御遊覽と出かけて鯛七へおしかけた處が。女子どもが大勢出て。ソレお手をとれ足を取と。めつたむせうにそやしたて。それからなんでも大ざかもり。さいつおさへつ唄へも彈や（うた「ぢれて迷ふて。よよふてぢれて。くぜつも

千話も屏風の外へはふり出したる一ツ夜着」はやしさつさおせ〳〵堀ま
でつけろ。あとは野となれ山となれ、床とつたらねてかへれ雨ふつたら居つゞけだ。などゝう
たふからたまらぬて小三「道理だぞマアきつい御機げん。それはさうと。あなたは京を御立の時。
おとつさんのおつしやつた事を。覺へて御出あそばしますかへ　金「これは又あらたまつたおた
づね。親父のおしへを守ればこそ。外の女に目もふらず。たつた一人を守つてゐるから。何も
はやお案じなさるとはござなくいサ小三「ヲホヽヽヽ。そのおぼしめしならうれしいけれど。
今では日かげのこの身ゆゑ。おぢいさんや皆さんが。このやうなことは御存じなく。只あなた
がわがまゝで。放蕩をあそばす事と。おぼしめすでござりませうから。お宿のお首尾がお大事
ゆゑ。あんまり御酒をあがりますと。あなたのお爲になりますまいかと。それが苦勞でなりま
せん ト思ひにあまるよ心よにくしとおもはねど。一盃きげんの金五郎「ァヽ百も承知二百もがつて
ん。お爲ごかしのその異見聞たくもねへ耳がけがれる。酒をあんまりあがりますと。あなたの
お爲になりますまいッ。ヘン酒を呑ふがのむめへが。おれが口だから勝手だによ大きにお世話
お茶でもあがれッ。そんな利くつらしい異見をいふのは。大かた外におつりきな。おもしれへ
はなしでも有からだらう小三「ヲヤ久しいものでありますよ　金「ナニ久しいなじみがあると。そ
れだからなんのかのといつて。はやく歸さうと思ふのだな。よし〳〵そんなに邪魔になるなら

歸つてやらうとめるな ト立れるかんしやくはいふきへきせるとん〳〵八ツあたり
小三はいつもの事とおもへはわざとそらぬかほをして　「お腹が立ならどうでもな
さい。たま〳〵はおはやくおかへりなさるも。御孝行でござりませう。ヲヤなんだか風が變つ
たやうだ。ァヽ雨がふらねばよいがト。さからはぬゆへ金五郎は　金「ナニ御孝行で
ござりませう。お香こでお茶づけがきいてあきれちァ。雨が降ふが降めへが。歸るに四も五も
入るものかト酒のわざむりなくぜつも我儘氣まゝをいひちらし。ぢれつゝ内へかへりけり。乳母はこの時金
之助を連て歸りかゝれど金五郎が不機げんゆゑに。次の間にてあそばせて居たりしが。やうや
うこなたへ出來りうは「御新造さまへ。今日はおとつさまの御機げんが。おわるふございました
ねへ。何のお腹だちであのやうに。お發りなすつたのでございますへトいへば小さんは「ナニサい
つでもあゝだはな。御酒をあがるとなんだの彼だのと。わたしに無理ばつかりおつしやるのサ。
たまにはえやくお歸し申さないと。あなたもいろ〳〵譯あるお身ゆゑ。おやどの御首尾が大事
だからさ。お内では心づかひもなさるだらうし。わたしにはわがまゝの。いひどころだとお思
ひなすつて。いつでも〳〵あの通り。それに此ごろでは日にまして。だん〳〵御酒が上るから。
まことに苦勞でならなひよ。わたしは何といはれても。つねから御氣性を知つてゐるゆゑ。御
酒をあがつて御きげんの時は。その氣でゐるからよいけれど。やつぱりおゆきさんにもあの通
りに。無理ばつかりおつゝやるかと。影ながらそれが案じられるよ。わたしも女の情だもの。

いとしとおもふお方をば。つれなくいひておかへし申すも。浮世の義理や二ッには。お身のためをおもふゆゑ。心にもない事などを。いひ出すまでの胸のせつなさ。すいりやうして（トなみだぐむ）ばもさこそと目を去ばたゝき　うば「御尤でござります。譬にもいふ通り。一ッかなへば又二ッと。何をいふてもまかせぬうき世。十分な事はござりませぬもの。いろ〳〵御苦勞あそばすも。因念とやらでござりませう（トあめりがちなるはなしなかばへく「ヲイお竹殿ちよつと爰をあけてくんな下女「アイ〳〵佐介どんかへ（トあめ川のりやうりばん表より　トあやうしあければ佐介はひろぶたへい「モシ旦那はどうなさいました小三「ヲヤ佐介どん旦那はもうおかへりだよ佐介「ホイそいつはおほきくじり。けふはなぜはやくおかへんなすつたヲ。さつきお出なすつたのを見とゞけたから。せつかく。くめん十めんして。旦那のお好な一ト口ものを。仕とんでもつてめへつたのに小三「ヲヤさうかへ。それはマアよくいそがしいのに。氣をつけておくれだうれしいヲ　佐「なんにしても旦那がお出なさらぬへぢやァはじまらぬへ。そんならこの鉢のものや何かは。旦那へのこゝろざしだから。置てめへりませう（トさかなを置ていさでゝゆく）ても金五郎は。酒がいわする癇癪の。腹立まぎれとがもなき。小さんにつらくあたりちらしてかへりしが。根もなきくぜつの事なれば。又あはねば氣になるゆゑ。四五日たちて晝すぐるころ。小三のもとへいたりしに。小三は留守にて乳母ばかり（針仕事をして）「ヲヤ若旦那さま。此ごろはまとに〳〵お遠〳〵しうございます　金五郎「さうサ。此間はちつと用が多くつて。さつぱり

出られぬへやつようば「アノあなたがいつそこのあいだ。お腹をお立あそばして。おかへりなすつたから御新造さまが。まことにお案じなすつてお出なさります　金「ハヽヽヽさうだつたかの。おれはさつぱりおらなんだ。アノ今日はどこぞへ行たかうば「ハイ今日は鮫清に。なんとやらの會がございまして　金「フウ坊はどうしたうば「お坊さんは今お竹がどこへかおつれ申てまゐりました　金「さうか。おれはわすれはおぬへかのふうば「ヲヤとんだ事をおつしやいましな。三日や四日お出なさらぬとておわすれなさるものでございませうか。今朝などもいつそおとつちやん〳〵とあなたの事をおつしやいました　金「ハヽァ。子どもといふものはどふもにくゝねへものだの。アノこの間來たとき。ちつとあたまへふきでがしたやうだつけが。そんなにふえもおぬへかへうば「ハイお頭のでございますかへ。そのやうにふえもなさりません。それはさうと若旦那さまへ。こんな事は申すまでもございませんが。御新造さまが明ても暮ても。あなたの事のみお案じなすつて。それは〳〵御苦勞のやすまる間とてはございませんから。その御心根をおもひやつて。あなたもどふぞあんまりお氣を。おもませあそばさぬやうになすつてくださりまし　金「イヤモウおれとても。にくしとおもふ小三ではなし。殊に子まで出來たのに。すこしはおれの手だすけと。いやな座しきの勤をするのは。なみ大ていの女などはなか〳〵及ばぬ心だてとおもへば。一日片時もつとめをさせる氣はねへが。足はぬがちゆゑ是非もなく。苦勞

をさせるが可愛そうだ　トほろりとおとす男泣うばも泪にくれにけり　折から。と粂川のわかひもの清介。料理ばん佐介て入り來り「ヘイ旦那このあいだは　金「ヲイ清介に佐介公か。さァあがんね〳〵　兩人「ヘイ御めんなさ　トふたりながらそばへきたり　清「もし旦那此間はねから入らつしやいませんね。きついお見かぎり。又外に何か。おもしろい世界でも出來ましたか　金「とんだ事をいふおもしろい世界どころか。いつもまじめでさへねへやつよ。ちつとおもしろい世界へ。案内してもらいてへのふ　清「是はまためいわく千萬。ハヽヽヽ　佐「旦那この間ヲ。あなたがお出なすつたのを見とゞけまして。ちよつぴり趣向してめへりましたら。もうあとのお祭りで。大きに鼻をあきましたのさ　金「ハヽァさうだつたか。そいつァ殘念だつけの。まかしその心意氣がありがてへそんなら今からはじめやう　トは是よりいろ〳〵大酒もりとなるまゝに。たがひにさいつおさへつして。いとにぎやしくなりにけり　金五郎はこの間のはしちによりかゝりて　金「なんと清公や佐介公なんぞは。いつも〳〵いそがしいから。女の所へ行ひまはあるめへのふ　清「サァ。そこがもしおつなもので。是でもずいぶん女ゆゑにやァ。相應に謀計もいたしますのサ。まづ女に逢はふといふ晩にやァ。内を都合してはやくきりあげ。おたしなみの藏衣裳を。引かけの親かたの目をまのび足。こそ〳〵〳〵とぬけがけの逸足出して阿多氣へおしかけ。ろじ四ッ限も目にかけず。たゝきおこして上りの天神。サァそれからが口舌のこんたん。おもしろ狸の腹づゝみ　トのりぢではなすそのところへ座敷をまひ歸り來る。小さんのあとよ

り。箱まはしの仁介三味せん箱を脊負ちやうちんをかた手に引さげ供をして來る小三は上へあ「仁介どん大きに御苦勞。そんならまた明日來ておくれ　トおびにはさみし金を出し紙にちよいさひねつて「サァ是で一ッ呑でおゝ寐よ　トわたせば箱まは仁介「ヘイこれは有がたふございます。さやうなら明日。ヘイおやすみなさいましト三味せんばこをかへり行。小三は金五郎のそばへすわり小三「ヲヤよくお出なすつてくださいました。此間はなぜさつぱり。おいでなさいませんへ　トほを見てうれしそうにわろふ　金「ヘンあんまりよくも來ねへのよ。來るなといふから來ずに居れば。又うらむのかあきれるのふ。四五日おれが來なかつたから。うるさくなくつてよかつたらう。あんまり邪魔にされるから。呼によこすまでふつつりとも。來めへとおもつてあきらめて居たが。逢ずに行ではちやァなくつて。逢ずにゐると氣になるから。顔が見たさについうか〳〵。やつぱり迷つて又こゝへ小三「ヲヤばからしいなんでありますへ。清どんや佐介どんが聞てゐるのにそんな事を　金「ハテ人が聞ても大事ないての。コウ小三。こんな馬鹿にやァ誰がまたらう。おれも生れつき是ほどの。阿房ではなかつたつけのふ佐介公。楊貴妃や玉もの前のためしもあるから。さのみはづかしいとも思はねへの佐介「こりやァ旦那のが御尤だ。惚てもりきむのはやぼのいたりサ。小三さんはやつぱりぼこ氣がぬけませんね　金「なんの〳〵おぼこどころか。ぼらが變して古狸とはなりにけりだ。アヽ化される〳〵と。知りつゝやつぱりばかされるは。おれが一生のあやまりだ小三「ヲヤよろしく申てお

くんなさい。あなたこそわたしをお化しなすつたのでございます金「そりやァまたなぜだ小三「それでも唄にもうたふ通り。心がらとて古郷をはなれ。志らぬ此地で苦勞するとは。よくわたしの身の上に。かなつた唄でございますよ清介「モシ小こゑでうた苦勞するのもれもはんと

たより。それに邪見な事ばかり」モシ旦那。小三さんの心はこのうたの文句の通りでございますよねへ小三さん。一ッ心意氣がうけ給はりてへもんでございます子小三「なんだねおかしくもない。娘子供ぢやァあるまいし。心意氣なんぞはいやだはね佐介「そんな事をおいひなさらずと。ちょつと一ッおやんなせへ。ソレどいつどい〳〵なだべこ。ちやら〳〵。どんぶり鉢アういた〳〵　金「アヽやかましい何をいふのだ佐介「ハァヽ。サァ〳〵小三さんサァ一ットいはれて小三はせんかたなくうた「なまじなまじ中ほれたがうらみほれざ苦勞もせまいもの　清「ハ。妙だ〳〵〳〵〳〵小三「モウ是でかんにんしておくれ　金「コウおつなものでの。おれも實は上がたぜへろくだが。都といへば聞えがいゝが。上がたぜへろく上がた猿といはれては一句もねへのす佐介「その上がたにもおめへさんのやうな通人がありやすから。東ッ子は一句も出ません。全躰は旦那がわりいのさ。おめへさんがあんまり程がいゝから。やぼなら斯したうき目はせまいと。小三さんがこれ〳〵で。氣がもめるでごぜへませうトひたいにつのはへるまねする　金「そんなくぜつはむかしの事よ。コウそれよりやァ清公今の阿多氣の物語の二番目狂

言をはなさねへか。後學のために聞てへのふ　清「ナニもう跡はえなしますめへ金五郎「なぜ清「小三さんに志かられます小三「清どん何だへおもしろいはなしかへ　清「なァにわつちが色の戀はなしさトいふところへく「清介どん佐介どんお客があるよァ佐介「ヲイ〳〵そいつは斯してはあられねへ　金「小三そこにある紙入を清公にやつてくんな。そして此一ッ提は。佐介貴公に讓つてやらうトふたりに投てやる　兩人「ヘイ是は有がたふございますトいたぐながら出て行　金「アヽ醉た〳〵。けふはどうしたかまとに醉たトそのまゝそこへうちふしてぜんごもしらぬ大いびき　小三「お竹やもうこゝをかたづけておくれよ下女「ハイ〳〵もうよろしうございますかへ小三「アヽいゝのさ。乳母や今夜は若旦那は。よつぽどあがつたかへうば「いゝへ。そんなにおすごしあそばしたやうすでもございませんが。いつたい御酒がおよわいから小三「さうサぜんたいあがりはなさらなんだが。ちかごろはよくあがるようば「さやうでございます。若旦那さまもお宿では。萬事おぼしめすやうにもいかず。お心づかひもあそばしますから。ちつとづゝ御酒をあがらずは。お氣のはれやうがございますまい。ほんにお坊さんもよくおよつたから。若旦那のお床をのべませうか小三「そんならその子をわたしが抱て居やうから。お床をとつて上げておくれ。ト金之助をいだきあぐるにぞ。乳母はこの内六疊の座しきへ床をとり夜着を出してうば「モシ若旦那さまへ。サァおよりましトゆりおこされて　金「ヲイ〳〵。アヽいゝ心もちだぞトたちあがりて床へ入り　金「サァおつかァも寐ねへか。坊主はおれ

がだいて寐よう小三「あなたが抱ておよつたら。それこそつぶしてお志まひなさるだろう　鼻いいはな。つぶしてもおれの子だから。だれも何ともいひ人はねへ。萬一おれがつぶしたら。又いゝのをこしらへるは（ト金の介の手をと小三「すきな事をおつしやるよ。アレおよしなさい。そんなに引はると目をさまします。起しちやアわるうござります　金「ナニ起しやアおねへちよつと貸てくれ（トむりに金の介をだきさりて）ヱ、よく寐坊主だぞ。コレちつと目をさましてあすばねへか。とちよ〳〵こちよ〳〵（トくすぐりそふにする）小三「アレおよしなさいといふのに。寐るさきへ立て起しちやアいけませんよ　金「ハヽヽヽそんなら乳母の處へ行て寐ろ。今目をさまして泣出すと。おつかアの何のか邪魔になるさうだ（トれたまゝうばの手へわたせば）乳母は金之助をかき抱きて。次の間へ入りてうち臥しける

小さん金五郎 **假名文章娘節用後編中卷終**

小さん金五郎 **假名文章娘節用後編下卷**

江戸　曲山人補綴

第六回

小三は乳母や下女を臥しめ。行燈の側につくねんとひとり何やら物案じの。顔うちながめ金五郎「コウ小三何をしてゐるのだ。なぜ寐ねへ。又持病でもおこつたか（トとはれて小三は「イヽヱ持病ではありませんが。つく〳〵おもひまはしますと。あなたの事が苦勞になつて　金五郎「なぜおれがどふまた小三「もとより御好でなかつた御酒を。此頃のやうにあがりますから。志み〳〵そこしかたを思ひまはすと。つまらねへものだと愛相がつきて。それが苦勞になるのだらう。ウヽそうだらう〳〵。いやになつたらいやだといへ。おれも男だきれてやるは小三「ソレそんな無理をおつしやるから。それか苦勞で片時も。氣のやすむ間はござりません。大かたお宿のお雪さんにも。やつぱり御無理をおつしやりませうが。それではわるふござります　金「なんの事たおかしくもねへ。そんなつまらねへ事を案じずとサアもふ寐ねへか寐るがいゝ（ト手をのばしてひきよせる

小三「アレまだ着ものも着かへませんよ　金「いゝはな。着ものはそれでも大事ねへ」トいひつゝ帯を
とけば。うれしげに上着をぬぎ。下着のまゝに寄そふて。顔みあはせてたがひにこっ　金「コレ
小三そなたもかねて知る通り。心にそまぬお雪の事。とやかく内でいふゆゑに。のつぴきならぬ
ぬ義理づめで。さぶ〳〵請はうけたれと。松に櫻は見かへられずそなたにまさつた花があふか。
かならすそれを苦にしねへがいゝ。さかし親を捨兩刀を捨て。矢立をさして町人にならふとおもへば一も二もねへ心やすひ世界だのふ小三「サァそれがいやさに苦勞になります。只あなたが全ふに。お宿のお首尾のよいやうに。お雪さんともお中よく。みなさまに御安堵させて。わたくしをも見すてゝさへくださらねばどのやうなせつないくらしをしても。少しもいとひはいたしません　トさんゞつ見へし女のみさほ金五郎もおもひやりて　金「おれもその實ごゝろを見ぬいたゆゑに。世間はれて。内へ入れてへとおもふけれど何をいつても養子のかなしさ。むかしの身ならいさくさなしに。おつけへはれて夫婦だがかへつて今の身の上が。思ひまはせばつまらねへトぐちなくりをくァゝおれとした事が。つい胸におもつてゐるゆゑ。女のやうなぐちばつかり儘になるのもならぬのもみんな約束さかたがねへ。これも浮よだどふなるものか。のふ小三。床へ這入て又いゝ夢でも結ふトぐつと引よせひいかなる事や契るらん。在斯程に。隱居白翁は金五郎が日にまし放蕩つのりて。
家にとては居らざるゆゑ養父文次郎はじめ家内のものに。一ばい氣がねをしたりしが。お雪も

はや十五にもなりたれば金五郎と婚姻をむすばんには。すこしは足も止らんと。頻に是をすゝめしかば。金五郎は心ならずも。婚禮はさつれども。お雪はまだ年もゆかず殊に手のなきおぼこ氣なれば。とにかくおもしろからぬゆへさまゞ〳〵こしらへだましては。小三がもとへのみ通ふものから。はやくも二とせばかり立ども。猶不身持の止ざりけり。隱居白翁は是を愁ひ。文次郎夫婦もお雪の仕かたの。あしきゆゑに金五郎が。内に居つかぬと口にはいへど。心には眞實わが子の可愛さに。金五郎に愛相やつきん。我あるうちは善惡とも金五郎の爲をおもへども。いくほどもなく吾齡ひ。はてにし後やいかならんと老の心をいためつゝ。おもひあまりて手をまはし。小さんの名所聞たゞし。こゝろの中をさぐりしうへ。理を說て緣切らせ。事に寄ば金を出し。支度していづかたへなりとも。片付やらんと思案しつ。金五郎が當番にて。詰所へ出て留守の日に。小三がもとへぞ尋ねゆきぬ。頃しも文月上旬。小さんはそでな中形の。ゆかたに藤色のうらをりかけ。黑繻子の帶きどけなく〆。あらひ髪をうしろへさげ。椽側へ出て金之助の腹かけを縫て居たりける。折から表に人ありて。たのむ〳〵と案内を乞ふに。小三はハイといらへつゝ立出れば隱居白翁「卒爾ながら小三どのゝお宿は。爰でござりますかな小三「ハイその小さんはわたくしでござりますが。あなたはついに見なれぬおかた。どちらから御出なされましたか。白翁「ハァそんならこなたさまが小三どのか。わしはこなさまにちと内〻咄しがあつてわざ〳〵

來ました。ゆるさつしやれ。上へあかればい小三「何はともあれそこは端ぢか。マア〳〵こちらへお通りなさいまし。奥へ通せば座に自「扨こなさまの名はかねてより。聞ては居れど逢ふはとじめて。わしは金五郎の祖父白翁といふものでござるが。今日わざ〳〵來ましたのも。外の事でもござらぬが。アノ孫の金五郎めが事。イヤもう見るかげもないあのやうな者を。よふマア可愛がつてやつてくださる。眞身にとつてはうれしいともかたじけないとも。禮は詞に盡ませぬ。その深切なこゝろを見込で。ちとたのみたい事がござるト。聞より小三は胸に釘。はつと心に當惑し。いかゞはせんと思ひしが。今さらおどろく事にもあらず。かねての覺期はこゝぞとおもひ。胸なでおろし氣をとり直し。茶烟草盆を出しつゝ手をつかへ小三「ほんにわたくしも若旦那さまのお咄しにてつね〳〵から。御噂さをうけ給はりましたあなたの事。お目にかゝりますはとじめてゝござりますれど。眞身の親に訪れたこゝろ。おうれしうござります。よふマアお出あそばしましたト〳〵いふかほつく打まもり白翁「イヤあまりよくも參らぬて。アヽ物ごしといひ取まはし。容貌まで高位の。奥方とてもはづかしからぬ。人にすぐれた生れつき。いかなる人の身の果か。見れば見るほどうつくしい。アヽ若いものゝ迷ふはもつともかい。こなさんを内へ入れたなら。孫めが尻も落つくであらうけれど。上へのきこえ世間のおもはく。義理と人目の詮かたなさ。たのみといふは茲の事。知つてるかはまらねども。金五郎はわしがためには。惣領むすこの一人孫。

世が世であるなら。無理わがまゝも仕次第だが。だん〳〵深いやうすがあつて。あれが親は家出なし。其弟が今での家督。その養子となりし金五郎。あかの他人といふではなけれど。養子と名のつくかなしさは。おもふにまかせぬ世間の人目。家の娘のお雪といへるを。娶合せねはならぬゆゑ。金五郎もふせう〳〵。やうやくこのごろ婚禮しても。お雪はまだ子供同然で。おもしろくないから片時も。内に居つかぬはもつともかい。わしが孫でいふではないが。世けんの人にほめられて。それほどの事わきまへぬやうな。氣性でもなかつたが。今に夜どまりはなほやまず。女房はほんのすもり同樣。それは誰ゆゑこなさんゆゑ。わしが命のあるうちは。内外の者もわしにめんじて。金五郎がわるいとはいはねども。見らるゝ通りわしも老人。今をもきれぬ身のうへゆゑ。わがなき後は金五郎の身のために。ならぬともあらうかと。案じ過せば夜の間も寐られず。苦勞で壽命もちゞまるやうじや。こんな事いふたら鬼とも蛇とも慈悲なさけのない心とおもはつしやらうが眞實あれがにくゝもなくば。内の娶のお雪の中に。子どもの一人も出來るまで。遠ざかつてもらいたい。さすれば世間のおもはくもよし。又子どもでも出來てからは。こなさんを内へ入れても大事ない。今金五郎が義理のある身で。こなたを内へよぶときは。部屋住の事ゆゑ世けんへすまず。こゝをとつくり合點して。きばしのうちを辛抱して。思ひきつて見てくだされ。もしそのうちが待遠なら。こなさんの心にかなふやうな。身の

爲によい處を見たて。この爺がまたくして。緣付て進ぜませう。さうすりやこなたの身も落つき。おほくの人のきげん氣づまをとるにも及ばず。せめてはわしが禮心。氣樂にして進ぜたいトものやわらかにのつひきならぬ義理づめの。たのみにいやといはれねば。いつそわが身のなり行を。うち明んとはおもひしが今さら素性を明しなば。見さげられもし殊に又。金五郎の爲あしからんトおもひさだめて小三「だん〳〵のおたのみうけたまはり。何と申さんやうもなく。大事の大事の若旦那さまを。人をわるくいはせたり。あなたがたへいろ〳〵な。御苦勞をかけましたもみんなわたくしがいたづらからつくつた罪でざります。おゆるしなされてくださいまし。それをマアにくいともおぼしめさず。氣樂にさせてやりたいとかへつてやさしいそのおよば。もつたいないとも有がたいとも。申さふやうばでざりませぬ。去ながらわたくしは。たとへ外にどのやうな。けつこうな處がでざりませうとも。樂しみのぞみはでざりませぬ。只若旦那やみなさまの。おためになります事ならば。たとへこがれて死すまでもふつつり思ひ切ませうトいふうるみ聲わつとばかりにせきあげて。正躰もなく泣ゐたるこゝろのうちぞいかならん白翁もともによろこびなみだ「ヤレ〳〵マアよくおもひ切つてくださつた。かたじけないぞや小さんどの。そのかなしさを見るがいやさに。今日行てたのまふか。明日行ていはふかと。一日〳〵と見合せても。ふでいひ出さねば果しがつかねば。心を鬼にしてわざ〳〵來たが。さぞにくからうが。

是も身のため。うき世の義理の詮かたなさ老の身に後生は願はず。緣切りに來た罪つくりわしが胸のせつなさも。すいりやうしてくだされよこの事とくと承知なら。けふあすといふでもないこゝろまかせにいつなりと。こなたの身にも怪我のないよう。手ぎはよくやつてくだされトいひつゝ立て出ながら「金五郎とは緣切つても。わしはやつぱり孫娶のこゝろ。この後なんぞ不自由あらば。かならず〳〵遠慮なふ。なんなりとさういつてよこさつしやれ。こなさんの身の落つくまでは。いつまでもわしが貢ますぞやト他人とおもはぬ白翁が。やさしきこと葉にうれしさあまり。かなしさやるせなきまゝに。とかくのいらへさへもせず。只うつ臥て泣居たる。その心根の不便さを。おもひやりつゝ白翁も。老のなみだにかきくれしが。心よわくてかなはじと思ひ直してかへりける。小さんはもとよりお雪の事を。聞てあたゐる末〳〵は。中を斷れんは必定なり。もし緣切らるゝ事とならば。生てゐたとて甲斐なき身の。別れてつらき日を送らんより。死して苦患をまぬかれんと。こゝに覺悟をきはめしも。せまき女子のこゝろから。嗚呼是非もなき事にこそ。かゝりしほどに乳母のお乳は。最前よりの一五一十を。次の間にて聞ものから。小三の胸のせつなさを。さこそとおもひやるほどに。おのれもともに胸のうち。はりさくばかりのくるしさを。こらへてゐのび泣ゐたるが。今はなか〳〵こらへかねて。わつとばかりに走り出小三のそばへすわうばりながらトもしあなた。とんだ事になりましたねへ。あのやうにマアうつくしく。おいそれと

お受合なすつたは。どふいふお心か合點がまゐりませんおぼうさんのある事を。なぜうち明てから〳〵だと。おつしやらぬのでございます。子までなしたる戀中と。お聞なすつたらお祖父さまも。無理に切れろとはおつしやるまいに。今若旦那と御緣を斷て。どうなさる思しめしでございます。お坊さんがかわゆくはございませんか。あのお子さんの事はお案じなさらぬか。マアどふいふお心でございます（ト只ひとすゝに金の介や小三を大事におもふゆゑ。心を付ることは異見。乳母はかくこそありたけれ）小三はなみだのかほをあげ「ほんにそなたのいふ通り。子まである身を斷れる事。せつないともかなしいとも。胸の中はとりさくやうで。そのくるしさは譬へられうか。それゆゑ金ぼうのある事を。うち明やうとおもふたが。男の子は緣切らるゝときき。男親に付がならひ。なま中な事いひ出して。あの子まであちらへ引とられては。若旦那も今までよりは。なほ〳〵御苦勞が增であらうし。二ッには又わたしもあの子を。手ばなしてはたのしみもなく。さぞ日にましさみしからうと。みれんらしいがいひ出さぬも。やつぱりたがひの爲ばかり。又若旦那と緣切つても。わたしや外にどのやうな。男が有うと二人とは。馴染をかさねる氣はないから。いつがいつまでもいまの通りに。斯してくらす心ゆゑ。そなたもやつぱり今までのとほりに。金坊の世話をしておくれよ（トいふもなみだの乳母も目をこすりながらうば「まことにあなたのお心の中を。推量いたせばいたすほど。わたくしの胸もはりさくやう。なる程おぼうさんにある事を。おか

くしなすつたは深ひお心。たとへ今日が日御緣がきれても。一生別れきりといふではなし。ほんの人目や浮世の義理と。お祖父さまの先刻のおとば。すこしの御辛抱でございませう。又おぼうさんの事はおつしやるまでもなく。ばゞァ〳〵とお馴染なすつたものなんで他人とおもひませう。もつたいないがわたくしが。產申したお子だとぞんじますもの。たとへどのやうな苦勞をいたしても。お育て申す氣でございますから。ちつともお案じなさいますな。志かし是からわか旦那の。お手がきれたらなをあなたは。いろ〳〵御苦勞あそばすだらうと。それがおいたはしうございます（トほろりとおとす）ためなみだ。小さんも浴衣の袖を目に當て小三「わたしも今度の緣切りが。一生の身の大事だから。只何事も神まかせ。わるい工をしたのぢやァなし。天道さまも眞どほしゆゑ。今日はけふ明日はあすと。その日の風に任するばかり。せつぱつまつたそのときは。又外に思案もあらうから。それを案じてくんなさんな。今にも若旦那がお出なすつても。かならずわるい顏をしないで。今お祖父さんのお出なすつた事も。おきらせ申ちやァわるいとうば「それは呑こんでおりますが。なんぼお祖父さまのおためとは申しながら。常にかはつてあなたの氣づよさ。お思ひきりのよさといふものは。あんまり見事でございますから。どふも合點がまゐりませぬ（トいはれて小三はつとさとうわく死する覺悟をさとられじとまぎらすちびやうのしやく）小三「アイタヽヽヽヽ。今のもや〳〵で持病の癪が。どうやら頭痛もするやうな

トまくちを取て　乳母はせんかたなく〳〵も。次の間へ立て行て。金之助のゆかたびらを。縫ふもよこになる
泪ではかどらし。小さんはまばし氣をやすめんと。よこに寐ても眠られず。只胸さきのみとゞ
ろきてとやせんかくやとさま〴〵に。思ひなやみしをりからに。隣れる家にて若ものども。二
三人にて聲高に。浮世ばなしのいろ〳〵なる中に一人が　■「コウ八さん。おめへおらがむかふに
ゐた。つとめあがりの女を見たか　△「フウ見た〳〵。二十三四のいゝ女だつけ。あれがどふし
た文でもよとしたか　□「ばかァいひねへ。アノ女で此間大騒動があつたァな　△「ハテノまた逃
でもしたのか　□「どふして〳〵。逃たぐらゐならいゝけれど。首をくゝつて往生したァな　△「エ
ゝくゝつたか。ヤレ〳〵とんだ事をやらかしたの。そりやァマァどふいふ譯だ　□「聞ねへアノ
女はの。婦多川の女郎だがの。さる處の息子に惚て〳〵ほれぬいて。たがひに心をあかし合て。
末は女夫だ夫婦にならうと。約束をしたが聞ねへ。その息子がおめへ内にやァの。いゝ嫁があ
るんだァな。それをなんでも深くかくして。まだ女房は持ねへから。請出す〳〵とだまかした
が。大ふでかしよ。それからおめへ相應に。金まばりもいゝもんだから。親父の金をひん盗ん
で。身受をしておれが長屋へ。連て來て圍つて置ての女房はたゝき出しの。から手におへねへ
から。親父はおほおこりで。上がたへやるの。田舍へやるのと大もんちやくに。した處があの
女は。女郎に似あはぬよく出來た者で嫁が出されたり親父がおこつたのを聞と。サア氣をもん

で〳〵。息子が不埒とはいふものゝ。嫁を出したり内がもめるも。みんなわたしがあやまりと。
ひどく嫁に氣がねをして。生てゐちやァ四方八方。丸るくいかねへと思ッたそうで。とう〳〵
書置をして。首をくゝつて死んでおまつたから。嫁も歸るし息子もそれから。おかたがねへか
らおとなしくなつたが。なんとその女郎はよつぽど氣めへもので胸がいゝに。第一貞女といふ
女だ　△「ほんに女のかゞみだのふ水滸傳一百八人の中にどうかありそうな豪傑な女だの。なる
ほど女は魔のもので。外面如菩薩内心如夜叉とかなんとか。佛さまがいわしつた通り。顔はう
つくしくつても肝魂のおそろしいのがあるものだ。おかしあの女もその息子の。一旦恩になつ
たから。男の爲や何かを思つて。死んだのはあつぱれ名が殘るが。おしいかな首をくゝつたか
らおしめへだ。とても死ぬならいさぎよく。身を投るもちうだから。剃刀で咽をぐつとやると。
鋭山の尾上ときてがうぎにきいてゐるせ　□「さうよのふ。そこがやつぱり氣がよわいから。剃
刀でやつたらいたからうとおもつて。くゝつたのだらうが見つともなかつた　△「さうだらうさ
うだらう。それちやァやつぱりその息子の。面よごしでわらはれ草だの。ほんに死ぬのもよつ
ぽどあんべゑものだ。なんにしてもおそろしや〳〵　トはなすか小三はきゝすまし「ハテ世の中にも似
た事があればあるもの。今のはなしのやうすでは。この身に似たのも辻占か。あきもあかれも
せぬ中を。心におもはぬあいそづかしが。どうマァなんといはれやう。死ぬる今期に若旦那に。

お腹をおたゝせ申ては。後の世までの心がゝり。ひとつ蓮もおぼつかなし。アヽなんとせう彼とせうトひとりむれのみくろしめける金之助は婢女のお竹と。いづかたへ行てあそびゐたるがさきに白翁が立歸るとき。すれちがひて歸り來しが。子ども心にも小三や乳母が。なにやらなげくやうすゆゑ。褒美さへもねだらずして。又門口に立出て。土ほぜりして居るをりから。金五郎が來るを見てよろこびて内にかけこみ　金の介「おつかァちやん。おとつちやんがお出だよ。おつかァちやん〳〵トいたりはいつたりするうちに金五郎は入り來るゆゑ。小三は顔をまかめつゝ。起あがりて右の手にてむなさきをきつくおさへながら小三「お出なさいましトいつたばかりさしうつむいてとばなし金五郎「どうしたおかしな顔つきだの。氣色でもわるいのかトいつにかはらぬやさしき詞に。小三はいと〻胸さきの。さけるばかりにさしこむ癪を。おさへても猶おさまらぬ。心一ッに白翁が。いひたる事をいかにせん。なま中な事いひ出さば。たのまれしかひもなし。又金五郎に胸のうちをさとられじトわざとなにげなく小三「けふ髪をあらひましたら。まとに頭痛がつよくして。ふさいでならぬにいろ〳〵な事を。考へますと心ぼそくて。それでつい顔いろもトせつなさかくしてわらひがほ金之助はさしのぞきて「おつかァちやんもう氣色なほつたかエトいわれてなみだをほろりとおさし小三「アイもういゝよ金五郎「なんの氣色がわるさうなら。髪を洗はなけりやァいゝに金の介「おとうちやん。今ね。よ志よのおぢい志やん來て坊こはかつたよ金五郎「ナニおぢいさんが來た。そりやどこのおぢいさんだトさはれて小三は胸とゞろくをそらさぬ顔で小三「ナニサな

んでござりますよ。矢劔堀の御隱居さんが御出なすつたのでござりますが。この子は見るとこわがつて。どふもなりませんヲホヽヽヽトわらひにまぎらす心の中。さてそつらくもかなしかるべし金の介「おとつちやんお土産あるかへ金五郎「ホイ志まつた。ツイ今日はわすれて來た。そのかはりばゝァと行て。何ぞいゝものをとつて來な金の介「アイチヤワばゝァ行ふやうトせたげるゆへに次の間より立出る乳母もなみだ顔うば「サァお坊さんまゐりませうト金の介をいだき出てゆくそぶりをつく〳〵と見てふしんがほ金「なんだてん〳〵におかしな顔をして。どふもおれにやァ合點がいかねへ。なんぞ苦勞な事でも出來たか。コレなぜおれをばへだてるのだ。そりやァわからねへといふものだぜ小三「エヽなにも込入た事もござりませんから。あなたをばへだては致ませんが。餘うつ〳〵として居ましたから。つい色〻な事を案し過して。互にこしかた行末を。咄て果は泪をこぼし。ふさいでなりませぬからとろ〳〵と。少氣を休めたのでござります。がわたくしよりはあなたのお顔。いつにないお色のわるさ。お心持でもお悪くはござりませぬか　金「ナァニおれのはこりやァ持めへだから。時〻ふさぐが直になほるよトロにはいへど心には何くれ彼くれさま〳〵の苦勞あれども男氣の。それとまらさぬ胸の中。言ぬはいふに彌增て。猶さらつらきものぞかし小三「あなたちつとお氣ばらしに。御酒でもおあがんなさいませんかエ金「いや〳〵酒よりはマァちつと寐よう。全躰けふは番だから。どうも來られぬ處だつけが。きのふもおとゝいも來ねへから又案じるだらうと氣になつてそれでやう〳〵ぬけて來たのよ。

一ト寐入やつたら直るだらう　ト小三のまくらを引よせてれころびながら「のう小三。實に人のいつ生は。どうなるものかまれねへものだの。今ごろ斯して暮さうとはおらァ。夢にも氣がつかねへよ。末〻かけて夫婦だと。互に思ひおもはれたに。お雪といふ惡魔が這入て。苦勞をさせるせつなさつらさ。夫ゆゑにこそ祖父さんや兩親へ。一倍氣がねをするといふも。アヽうるせへ世の中だのふ小三「其樣にマァお雪さんの事を。とやかくとおつしやるがお雪さんは。大事の〳〵お家のお娘でござりますから。かわいがつてあげてくださいまし。どうで私は日蔭の身ゆゑ。どうなつてもよろしうございますから。そんなにあちこちお氣をつかつて。必ず煩てくださいますな。それが私は苦勞で〳〵なりませんと。まばし泪にくれ六ッの。かねのなるまでまどろまんと。金五郎はこゝにうち臥ける。是より小三金五郎にあいそづかしをいふや否やそは三べんを見て知り給ふべし

小さん金五郎

假名文章娘節用後編下卷終

器の古さを愛るのは、ひねつた茶人の一癖にして。旨き物を食たがるは。小兒と意地のきたな連中。婦人を視て目のなきは。放蕩家の病なるべし。觀所と趣向のあたらしきを。妙で誤說の咎めもなく。ヤンヤと蘭語で賛言は。戲作通の看的。評判よし野の花より高く。部數は春の山ほどに。賣んとを欲するは。言ねど志るき發客の慾情。活業原より忌敵。速いが勝の新版は夕河岸の魚を競ふに齊し。近屬娘節用の。刻成て發市は。近きにあれば序文でも。口上なりと出たらめに。はやく〳〵と書肆より。使をおこして居催促。机下に居眠し。調市の鼾を聽ながら。筆を採て斯ばかり有のまゝに記すになん

甲午の孟春

三文舍主人

小さん金五郎 假名文章娘節用三編上卷

江戸　三文舍自樂補述

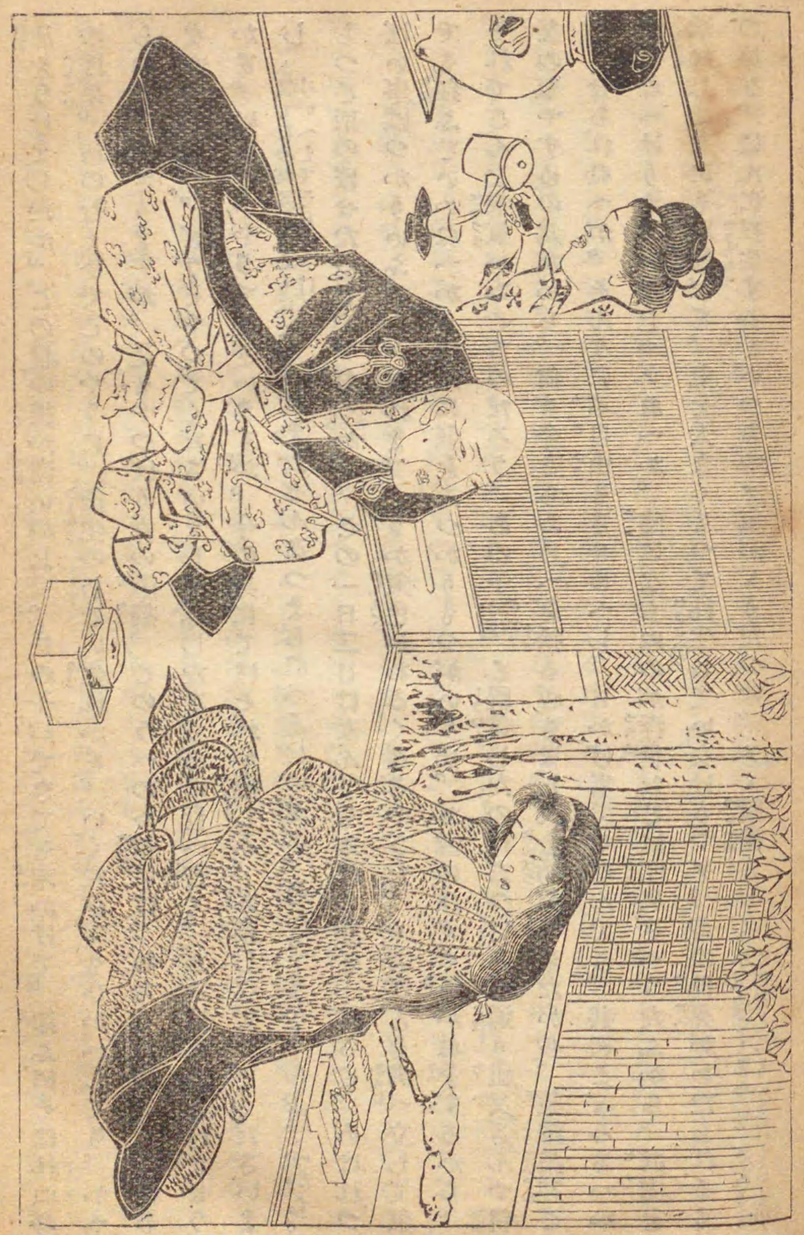
第七回

生者必滅會者定離は。浮世のならひと悟つたる。言も今は身のうへに。おもひあたりし憂事と小三は胸にこたへたる。人にさられぬ心勞も。かねての覺悟といひながら。さすが女のやるせなく。浮氣を捨て眞實に。二世を三世とちぎりたる。かはらぬ中の金五郎の爲とはいへど今さらに。義理といふ字にせめられて。緣を切らんはなか〳〵に。身を裂るゝよりくるしくて。とやせんかくと案じれば。あんじるほど猶物おもひ。まさる苦勞を胸の中に。置どころさへ泣のたね。心を鬼に持とても。道にかけたる愛相づかしは。いふにいはれぬ恩愛と。執着の絆たちがたく。ふつ〳〵おもひなやみしが。左にもかくにも末かけて。添はれぬあだな緣にしゆゑ。なまじいなといひ出して。臨終さにくしみ受んには。女子は罪の深き身に。罪かさなりていつの世に。罪滅さんやうはなし。うすき緣にしは前の世の。因果と思ひ定めなば。人をうらみ身をうらむ。よしなき罪はなきものをと。あじきなき世を悟れども。心ぼそさのいとゞしく。生

さきのある子を捨て。いとしい男のためながら。くらき冥土へ旅立んは。よく〳〵業の深き身と。又くりかへす迷ひの闇に。ひとり胸のみくるしめつ。年ごろ日ごろの辛勞が。つもり〳〵てこの頃はうき立ぬ氣のむすぼれて。食事も日ごにほそるものから。面もかたちもやせがれて。うつら〳〵と氣を病むも。とわりせめて哀れなり。かゝりし程に金五郎はあんぢると大かたならず藥よ醫者よとさま〳〵にこゝろを配り氣をつけていたはりやさしくさるゝにつけ。小三はいとゞその情の。あつきと恩の深かるを。おもひつゞけ考ゆれば。いかに義理でも操でも。いとし可愛の夫と子を。捨て死すべきやうもなく。いつその事に白翁が緣きつてくれとたのみたる。事をうちあけ金五郎に。はなしてだん合したならば。どうかうかとさま〳〵に。こゝろもみだれ氣をもみて。病ひはます〳〵重るゆゑ。寐ても起てものぼせるのみ。頭痛とゆるぐ齒のいたみに。胸のやすまるひまぞなき。金五郎はつとめの身ながら。あんぢるとひとかたならず。日毎〳〵に訪ひ來るが。今日しも例のごとく入り來りて奥へとほれば小三のそばに金の助はもちあそびをさこころせましとならべたてよれんもなくあそび　金五郎「どうだ小三。けふはちつとも快方かのトさはれて小三はくるしき中にも金五郎のかほ　小三「ハを見るよりなやめるかほにはつこりわらひイやつぱりけふも同じ事で。どうもふさいでなりません　金五郎「さうか。まとにどうも困つたものだ。藥は毎日せひ出してのむか。ばゞア立つけて呑してくんなよトうしろをむけばうばは火ばちへすみをつぎながら「ハイなるッたけ精出しておのませ申て。はやくおこゝろよくしてあげたいとぞんじますが。今度の

お醫者のお藥は。まことにあがりにくいそうで。ねつからどうもはかどりません　金五郎「そりやァわりいのう。どうで藥はのみにくいから。誰しもすゝんでのむものはねへが。そんなに無精じやァどふもいかねへ。それにあの醫者にかけてから。ねつからはか〳〵しくねへやうだから。なんなら醫者を取替るがよかろう　小三「ナニあのお醫者さまもお功者だから。轉ますにもおよびますまい。どうでかういふ病氣といふものは。とか〳〵しい事はないと申ますから。お氣をもんでくださいますな。わたくしがこのわづらひより。あなたに御苦勞かけますとがと。おもひまはしますともう〳〵。いつそこのまゝ死にましたほうが。はるかましでございませう　トいひつゝなみだはらは　金五郎「またそんな馬鹿なことをいふヨ。なに死ぬのがましなものか。病ひは氣から發るといふから。氣のもちやうではやくも直り。重くもなるのに。おめへのやうに些と煩ふと。死ぬはうがましだ〳〵と。氣で氣を病むものだから。ちよつとした病氣も埒があかねへのだ　小三「それでもどうも心がら氣で氣を病む氣はございませんが。もとより苦勞症な生れつきゆゑ。つまらないことも氣になつて。あんまり深くかんがへますから　金五郎「それがわりいナ　寐る目もねずに考へて。氣で氣をもんで苦勞をしても。まゝにならねへことが儘になるものかナ。餘計なくろうで命を削るやうなものだ。勿論平生おれの爲をおもつて。人の知らねへくろうをしてくれるのは。深實うれしいは山〳〵だが。こんなにわづらつてくれちやァ。實にどうも困りきるぜ。

是からは考へ事はさらりとやめて。苦勞は地獄へでも捨ておまふがいゝ　小三「あなたはさう一ト口におつしやいますか。迚も女は罪が深いから。苦勞は一生放れません　苦勞よりこのからだが。さきへ地獄へまゐりませう　トあはれなことをいひ出すにぞ　金五郎もむねふさがりて　金「その氣の小せへのが病ひの原だ。老人かなんぞじやァあるめへし。是しきの病氣で死ぬものかな。ちつと氣をきりけへて。向島の姉御のところへ。保養にでも行て見るがいゝ　小三「わたくしも向じまの姉さんに。久しく逢ひませんから。この間からどうぞして。まゐりたいとぞんじておりました。老少不定は世のならひ。盛りの花も散るは常。定めなき世と申しますから。あすをも忘れぬわたくしが身のうへ。もしもの事があつたらば　トあといひさしてむねせまり顔を見つめる目になみだ。袖にあふれて膝のうへに。軒と落るを子心に。ふしんにおもふ金之助は。のびあがりて小三の顔を。つく〳〵ト見てひざにさりつき　金の介「おつかちやんなに泣のだエ。おとつちやんお呵いか。坊あやまゆから堪忍ちておくゑよウ　トいはれて小三はたまりかねこゑをあげ可愛さあまりてせつなさは。胸もはりさくばかりなる。金五郎のびてなきむせび金の介をだき上て　も男心に。口にはさま〳〵いひまぎらせど。小三の胸をおしはかり。せまき女のこゝろから。よしなき苦勞に取つめて。もしものともあらんかと。おもひ過して胸せまれど。さとられじとてはな紙に。涙つゝむぞ無理ならず。乳母のお乳もかたはらに。二人がこゝろを推量して。共になみだにむせびける　小三はやう〳〵な「この子のまだぐわんぜもなく。わたしが愚痴な心から。みだをぬぐひ



つまらぬ事を案じ立して。あんまりかなしくなつたゆゑ。ついなみだをこぼしたのを。旦那にさとられるとかとおもひ。あやまるこゝろのさほらしさ。なぜ子どもといふものは。こんなにもマアかはいかろう。この子の成じんするにつけ。慾にかぎりはないゆゑにいつまでもたつしやでゐる氣でも。壽命がなければそれもかなはず。もしあすが日に目を寐むつたら。さぞマアあと跡で泣だろうと。それが今から見らるゝやうで。死ぬ氣はさら〳〵ないけれど。とても長命のできないわたくし。遺ごんではござりませんが。ひよつとマアさかさまごとで。この儘死にでもいたしましたら。たより少ないこの子の身のうへ。他にんの手にかけないやうに。どうぞ向島の姉さんのところへ。おあづけなすつてくださいまし。とても日かげで育つたこの子。すへ始終あなたの御家督をつぎますよりもなりますまいから。養子にやらねばならぬ生さき。今からあんまり他人の中で。いぢめられたり苦勞をさせたら。根がひよはい生れゆゑ。虫もちにでもなりませうから。外へやつてくださいますな。御如才もござりますまいが。六ツか七ツにもなりましたら。手ならひや讀書も。教へてやつてくださいまし。又二ツにはお雪さんと。御夫婦中よくおくらしなすつて。御祖父さんはじめ御兩親へも。御苦勞をかけ申さぬやうに。御孝行になすつてくださいますれば。わたくしはモウどのやうな。佛事供養をしてくださるより。思ひ殘す事もなく。うかみます。あなたには子どもの時からおなじみ申して。ひとかたならず御

恩をうけましたが。この世の縁が薄いかして。この子ができても末かけて。添ふにそはれぬ身の因果。何のむくひでこのやうに。後生のわるい生れかと。いくたびおもひかへしても。かへらぬとでござりますが。是もやつぱり女の愚痴。このうへのお情には。わたくしのからだはあなたのお寺へ。どうぞやつてくださいましそふしたならあの世へ行て。おそばにおられませうかと。はかないやうでございますが。今の身にてはそれが樂しみ。お察しなすつてくださいましト又もなみだともろともにく金五郎「またそんなつまらぬへよくといふよ。あんまりくよ〳〵思ふから。しりかへしてぞなげきける

ちつと取のぼせたのじやァねへかノ。この一日二日はなんでもおれの顔さへ見ると。あはれつぽい事ばつかりいふから。おれまでどうか氣色がわるくなるやうだ。ぐちなとを考へ立して氣でも狂ふといかねへからほんに氣をもつかりもつがいゝぜ。お雪にひどく氣がねをするから。それでこんな病氣がおこるのだろう。あの子お雪の事と祝言したのはまつてゐる通り祖父さんや親父の氣やすめの爲だから。何も今さらおめへを捨る心もなし又金坊ができたから。榮耀榮花こそさせられねへが。そんなに不自由もさせめへし。日かげ者でもなんでも。共にこゝろさへかはらねへけりやァいゝじやァねへか。儘にならぬのが浮世だとは唄にさへうたふから。其處を承知してなにも時節だと。氣を大きくもつて往生していなけりやァ。苦の世界がわたられるものかな。ほんに往生するといつちやァ氣がゝりだつけ。アゝ鶴亀〳〵ト小三のこころをなぐさむるとばのはしにもいまはしきとの

みいひて氣にかけるもむしの毒らするゆへなるべし

りしかば。看病がてらこゝに泊りて。夜もすがらおめりがちなるとのみはなして。夜更てみなみなうち臥ける。あくるあした金五郎は。早く起出仕への身なれば。たち歸らんと身ぢたくするに。小三はこゝろのつかれにや。まだ目覺さぬこなたには金の介があさおきにてうばをあひ手にあそびぬるそばへきたりてあやしながら

金五郎「ばゝァや子どもといふものはまとに朝おきなものだのう。坊やのおやべるこゑでおらァ目をさましたやつようば「さやうでございますかエ。どういたしてもおぼうさんは。お畫寐をなさいますから。朝がおはやうございますのさ。ほんにおつかさんはまだお目ざめがござりません子。旦那さんエ。あなたはさぞモウ御苦ろうでございませうが。まとにおこまんなすつたとでございますチエ　金「そうよ。實に苦勞でならねへ。それになんだか氣にかゝるとばつかりいふから。どふもあんじられて安心ならねへよ。おれは勤めの身のとゆへ。毎にち附ぞほしについても居られず。なんでもてめへひとりがたのみだから。ずいぶん氣をつけてやつてくんな。女といふものは心のせめへものだから。ひよんなとでもおもめへかと。それが一ばい心配だ　トいひながら金の介のあたまをおさへて

こりや金ぼうや。おつかァはきい〳〵がわりいからの。あんまり世話をやかせずにおとなしくしてゐるのだヨ。又明日來る時に。お土產をたんと買て來てやりませう　トいへばれしそうにひざに金の「おとつちやん。坊おとなちくするかヤうまいものお呉よ。明日おつかちやんきいきとりつき

いまだわゆいかヤ。坊おとなちくすゆョ　金五郎「ヲヽさうだ〳〵。坊は利口ものだからおとなしくするのふ。そんならおとつさんはマア歸りませう。おつかァはまだ目を覺さねへからまづかにしなよトいふこゑきゝつけ　小三「ヲヤモウあなたお歸りなさいますかエ。金五郎「フウ。モウ四ツだから歸らざァなるめへなんぞ用でもあるのか小三「さやうさねへ用と申すのでもございませんが。なんだか今朝は御歸し申すのがトなごりおしげな　金「又そんなことをいつてとめるのか。けふは顔ッつきがでへぶいゝやうだぜ。なんにしても歸つて又出直して來やう。主人へつとめの間をかゝぬも。親父や祖父さんへのこゝろやすめだ。マアなんでも精出して藥を呑がいゝぜ小三「それでもあなた今夜はお出なさりやァしますまいヲ　金「大躰ならくり合して來る氣だが。あんまり遲ければ明日のあさは是非來る。それとも用でもあるならさういつておきねへ小三「ほんにそれ〳〵。金ぼうの脊中の灸がまがつておりましたから。どうぞ直してやつてくださいまし。そしてまだ疱瘡前でございますから。觀音さまの二王さまの股をくゞらせてくださいましョ。この頃はあつちこつちにだいぶ疱瘡がありますそうだから。それにアノモウひとり行をいたしてあぶなくつてなりませんから。轉ばずの玉子守と。水てん宮さまのお守りをかけさせてやつてくださいまし。爰らはきんじよに川がおほうございますから。水がこわくつてなりません　トばんトにつけて子をあんゝるこゝろのうちぞふびんなり　金五郎「なんだな。そんな事はいつでもいはれるものを。あんまりいろ〳〵なことをいふから。おれも歸るのがおかしいやうだマアモウ一ぷく呑でから歸る事とせうト男心にも氣にかゝればわかれのつらきもむり　小三「袖引たばこであなたのお足を。無理にとゞめた歌妓の時分は。眞のくろうも苦にならず。はやく身まゝになりたいと。樂しみ盡てかなしい今の身。おもへば夢のやうでございますねへ　金五郎「さうよこの子のできねへ時分が。ほんの色事後生樂むりなくぜつにすねたり妬たり。つらいと思ふは逢はねへ晩夕べの恨みは今夜の手くだ。おもしろい事もたのしみも。かんげへて見るとむかしのやうだ。爺いぢみたいひぐさだが。アヽ年はなんでも重られへ事た。あの時分のやうな身のうへに。もう一度なつて見てへものだトゆつくわいめきたるくりとにふさぐこゝろ金の「おつかちやん坊。ばゞァと遊ぶのモウいやいやだよ。なんぢよ味いものお呉よう小三「アイ〳〵。モウおあそびはいや〳〵かエ。そんならばゝァや。お菓子でもやつておくれョうば「ハイ〳〵。お坊さんサア落雁をあげませうヲエ金の「乳母坊。落雁いや〳〵だよ。梨子食たいよ。おつかちやん。佛ちやんの梨子おくゑよう小三「ナニ佛さんの梨子かエ。坊はこのあいだお齒が痛〳〵だつたから。信州の戸隱さんにお願ひ申したから。梨子は給られないからお菓子におしよ。いゝ子だヲエぼうは金の「お菓子いや〳〵だもの。佛ちやんに上がちて居る。梨子おくゑようトすこしなきごゑになる　金五郎「坊やなぜそんなにだゞをいふ。梨子は毒だから惡い〳〵。だゞをいつていびるから。おつかァの氣色がわるくなるのだ。おゝな

285296

しくしてお菓子をたべな。赤いうまいのがあるから。コレ坊や。なぜそんなに似指をいぢるのだ。似指をいぢると手へ灸すゑるよ 金の介「灸いや〳〵御めんだよゥおとつちやん似指いぢやないかヤ。なんぞよ買ておくゑよう 金五郎「ヲヽ、さうおとなしくするなら味いものを買てやりませう。おとつさんはお屋しきへ歸るから。お竹に抱子して。兩國のお橋の方へ一處に來な。お菓子とお手遊とそして何を買てやろうのう 金の介「アノウお菓子とおもちやと。そイかヤ。アノウ佛ちやん上る花〳〵買てお呉よう トいはれて小三はむれにぎつ金五郎も氣にかゝれば佛ちやん上る花〳〵買てお呉よう トいはれて小三はむれにぎつ金五郎「ヱヽこのぼうずは妙な子だのう。なんぞといふと佛さんへ買て上やう〳〵といふが。氣になるとをいふ坊主だぞ。マア何でもいゝから一處に來い〳〵。そんなら小三大事にしな。ばゝァ氣を付てくんなよ トいゝつゝおりてぞうりをはけば金の介はお竹にいだかれさきへおもてへ出てゐる小三は金 小三「さやうなら御機げんようヲヤあなた。ちよつとこちら五郎のうしろよりきものゝゑりをなほしながら めば金五郎はふりかへりて 金「ナセ己がとうぞしたか小三「ハイお頭上に何やら芥がトさる手もふるへこゝろくもり これがこの世の見おさめと おもへばこゝろも消〻に。ゑつと見つめる目になみだ。せきくる胸のせつなさを。咳にまぎらす顔に袖。あてゝ泣目をかくすなる。心の中の四苦八苦。おもひやるさへ哀れなり 金の介はわけもなくおとつちやん早くお出よう。ぼう春貧居て待居ろ トせたげられて金五郎もせんかたなさにかうし戸を。またぐはづみに門口の。石につまづき〳〵 金五郎「ホイ。こいつァ志まつた 小三「ヲヤどうなさいましたヱ 金五郎「ナニ鼻緒を踏きつたのヨ。ハテ面妖な。きのふ買た雪踏だ

から。切れるはづはねへけれど。どうもふしぎじやねへかのう ト又氣にかけて 小三「そんならアノきのふお買なすつたお雪踏の鼻緒が。アノ切ましたかヱ 金「フウこいつァどうも氣がゝりだ 小三「ヱヽトむれにこたへてあのそんならお雪踏をお竹にもたせて。直しのところへおやんなさいましな 金「なァに二本鼻緒が一本きれたのだから。履て行て端臺で直させやう。サア金ぼう一處に來なト心ならずも出ゆきける 小三は金五郎のうしろ蔭。見ゆるまで見おくりて。名殘りの涙のやるせなく。とゞめかねしをかくては果じと。思ひかへして志よくじをば。やう〳〵に給志まひぬけしごとくかんかへて居たりしがうばにむかひて お出なさりも志まひし。わたしも氣分が大きによいから。保養がてら今ッから。向ふ島へ行ふと思ふよ。それにこの節はモウ花屋しきの七くさもさかりだろうし。天氣はよし。金ぼうをつれてぶら〳〵と出かけやうようば「それはよろしうございますが。おわんばいのわるいのに。とふ道をおあるきなすつたら。又あとがおわるうございませうヨ 小三「ナニ爰からはそんなに遠くもないものを。ぶら〳〵と出かけたら。氣がはれてかへつてよかろうヨ。向島の姉さんも。金ぼうが成人したのを見たがつて。連て來い〳〵とお文をたび〳〵およこしだから。マア何にしても出かけようヨ ト是より小三は身ごたくして下女のお竹を内にのこし 乳母に金之助をおぶはせて。向島へと出行ける。小三の姉眞名鶴は。富家の隱居に愛せられて。向じまの洲崎村なる。秋葉の社のほとりちかくの。

別荘に住居して。月雪花を友としつ。いと樂くくとくらし居けるが。この春隱居は世を去りて。なき人の數に入りしかば。本家の主人も眞名鶴の便りなき身をあはれみおもひ。殊に壯年のとなれば。いづかたへなりとも支度して。嫁入らせやらんと深切に。情厚くいひけれども。眞名鶴は今さら緣着て。榮耀をのぞむ心もなく。勤の身にて年久しく。つらい苦勞もあきたれば。たとへ不自由のくらしをするとも。世を物靜やかに送らんこそ。上もなき樂しみなれば。あはれ尼となり佛門に入りて。隱居をはじめ亡親の。後の世をもとふらはんと。生涯の願ひなりとて。ひたすらにのぞみけるゆへ。本家の主もその心操の。清らかなるをふかく感じて。望みに任せて。別荘を眞名鶴にゆづり。その庭の中に庵を造らせ。念佛庵といふ號をつけて。佛事をいとなむ補助とし。日ごの雜費はつき毎におくり。不自由なくくらさせければ。眞名鶴は日ごろの望みもかなひその恩義の厚きをよろこび。浮世をのがれし心地にて。髮を切り尼となり。名を紫雲とあらため。月ごに彼庵にて。百萬遍をいとなみつ。佛に仕ゆるを身の業とし。行ひすましてくらしけるは。いと〳〵殊勝の事なりけり。頃しも秋の中なれば。庭面に桔梗女郎花なでし子藤ばかまなど。さま〴〵秋草の咲みちたるまゝ。紫雲は御佛にまゐらせんと。庭下駄をはきおりたちて。花を手折てゐるおりから枝折戸の外に人おとするゆゑふりかへりてひと目見るより　紫ヲヤ〳〵青柳ばしの姉さんだヲ。よくマアお出だねへ。サア〳〵こつちへお上りナ。ヤレ〳〵よ

くお出だトさすがたんみのきやうだいゆゑよろこぶと大かたならず。小三も姉の無事な顏を。見てうれしさのかぎりなく。乳母の背中に負れゐる。金之助を抱きおろし。手をひきて座しきへ通りおさだまりのあいさつすみてみやげものなどいだすとき　紫ヤレ〳〵まとに久しぶりだヲ。ヲヤ御無用におゐならよいに。遠方だのにお土產までゝ。ほんにこのあひだ人をあげた時。おまへがちつと氣色がわるいと。お返事に書ておよこしだから。どういふやうすかといつそモウ案じくらして。ちよつと見舞にまゐろうとおもつてゐたがあいにくわたしも時候にあたつて。つい〳〵けふまで出かねてゐたよ。まだおまへも顏の色もわるいが。氣分はだん〳〵よいほうかエ。そして舟でゞもお出のかエ小三イヽエあるいて參りましたよ。見かけ程心もちはわるくもございませんが。只ふさぐばかりでございますのさ。わたくしはモウ手まへにかまけて。御無沙汰ばつかりいたしますから。あなたのおあんばいのおわるかつたのを。そんじませんでお尋ね申もいたしません　紫ナニサわたしのはほんの當分の事。モウさつぱりと心よいヨ。ほんに金ぼうよくお出だヲ。ちつと見ないうちに大きくお成だぞ。目つきや口もとがおとつさんに生だねへ小三「金ぼうや。手をついておばさんに。ハイ御機げんようトお辭義をおなよ　紫「アイ〳〵よくお辭義ができますぞ利口ものだぞ。サアサアおばさんに抱子をおしうまいものを御馳走するから。ヲヽよくいふとをお聞だぞ可愛いしねへト金の分をひざのうへにいだきあげながらうばにむかひ　紫「乳母アお出かエ。ハイまばらくおたつしやでよいヲうば「ヘイあり

がたふございます。まことに御無沙汰さまをいたします。ヘヽヽヽヲヤお坊さんおうれしうございますかエ。お抱子でよふございますヲエ　紫「この子もおまへの丹精で。まことにおとなしく成人したヲエ。ほんに氏より育てがらとやら。此すへともどうぞ面倒見てやつておくれうば「イエモウお利口なお生れつきでございますから。目からお口へぬけますやうで。よその子供衆より御合點がよくまゐりますのさ　紫「ほんにそふだろうヲエ。金ぽうヤ。おとつさんは御機げんよいかエ　金「アイおとつちやんお屋敷に。お竹内に居ゆヨ　紫「ヲヽお竹は内におるす番でおとつさんはお屋しきかエ。よくわかるねヘ。お常ヤ。お煮花を早くこしらへてソシテ。今そふいつたものを取にやつておくれかエ下女「ハイ〳〵只今お煮花もできますヨ。アノお菓子も三松どんが取て參じました　紫「そんならはやく爰へ持て來て金ぽうに上ておくれそしての鯛七へそふいつてやつて金ぽうヤおつかさんのお好なうまい魚を取ておくれヨ下女「ハイ〳〵かしこまりました　トにばなと菓子　小三「ヲヤモウおかまいなさいますな。今日は御馳走をいたゞきますより。久しぶりでゆつくりと。むかし咄や。うさばなして。氣をはらすのが何より御馳走　紫「ほんにさうさねヘ。女といふものは久しぶりで逢ても。身の上ばなしかなんぞより。外にはなしもないものさ。マアお茶ができたからお菓子をおあがり。サア金ぽう好ならたんとおあがりヨ小三「ハイありがたふ。さやうなら坊やいたゞきな。ヲヤ〳〵おめづらしい。お牡丹餅でございますか

エ　紫「アイ富貴牡丹といふ道明寺のおはぎサ。そちらにあるのは都鳥といふお菓子で。兩方ながら向島の名物だからたべて御覽小三「ほんにさやうでございますかエ。サア坊いたゞきておたべ。ばゝアにもお相伴させませう　金「おつかちやん牡丹餅おいちいヨ。坊たんと食ゆヨ小三「ほんに誠においしうございますヲエ。乳母とんだよいお菓子だのうゝば「さやうでございます此やうなお菓子を向島で賣ますのをさつぱり存じませんヲエ小三「そふさモシお姉さんエ。これは御近所で初めましたかエ　紫「アイ直きこの秋葉さまの裏門の通りで。土手へ出る道サ。松花園といふ内で。ちかごろ賣初めたがとんだよくするヲエ小三「さやうでございます。實に美味でございますから。坊が大悦びでたんといたゞきます　紫「それはよかつたねヘ金ぽうたんとおたべヨ。乳母は酒の方だから今にお肴が來ると一ト口あげるヨうば「イエ御酒よりか又このおはぎと都鳥は結構でございます。そして手奇麗でございますヲエ。これは今にはやり出しませう　紫「さうサわたしの處の本店なぞでも。人をうでございますヲエ。つかはさる度毎に。いつでも買て來いとおつしやるそふさ。どこでも評判がよいからはやつて來るのサ小三「ほんに向島も今じやア都になりましたヲエ　紫「この節はおまへ。梅屋敷の七種が盛りだから。たいそう見物の人が出るヨ。それに蓮華寺の大師さまのお庭がよく出來たから。だん〳〵こつちも賑やかになるはヲ小三「さやうでございますヲエ。わたくしも些やすみました

ら。坊をつれて梅屋しきの七くさから蓮華寺の大師さまへお參り申ませう。今年は旦那も前厄でございますから。お身のうへに何事もないやうに。金ぼうの行すゑやわたくしの。後の世の助かるやうに。よく祈つて參りませう　トほろりさなみだをこぼすにぞ　紫雲も何とやらあはれになり　紫「ほんにおまへもわたしに似て。後生願ひだと見えるねへ。金ぼうは退屈だろうから。三松と一處にお庭の池の緋鯉に。お菓子でもやつておあそび　トいはれて金の介はいそ〳〵よろこび　うばに手をひかれてにはにおりたち　調市の三松を相手にして。池のほとりをめぐりあるき。緋鯉龜の子などおひまはし餘念もなくぞあそびゐる。

小さん金五郎　假名文章娘節用三編上卷終

小さん金五郎

假名文章娘節用三編中卷

江戸　三文舍自樂補述

第八回

その時紫雲は長羅宇の。烟管に多葉粉を吸つけて小三に出せば手にさりながら　小三「ほんにおうらやましいはあなたのお身。うるさい世事の御苦勞もなく。朝夕こんな靜なところに。憂世を捨ての樂なおくらし。わたくしもどうぞ三日なりとも。佛につかへて死にたいと。こゝろに願つておりますが。身の罪障が深いかして。それさへかなはぬ憂苦勞。なんの因果でござりませう　トまたうなみだにむせびがち紫雲もなにさなくむれせまり　紫「なんのわたしの身のうへが。うら山しいとはおまへの僻言。世に在てこそ人は花。金ぼうといふ實を結んで。苦勞はあろうが又樂しみ。旦那も人におすぐれなすつた。發明なおかたゆゑ行すゑはそれこそ安樂だはヲ。おもしろい事もおかしい事も。たのしみもかなしみもあらぬこの世の世捨人が。なんの本意であるものかヲ。是も定まる因緣と。思つてゐてこそ又安樂。姉妹二人が同じやうに。浮世を捨ては亡親たちの。菩提のためとおもはれやうが。却つてそれでは不孝の罪。せめておまへは人なみに。世を過てこそ兩親が。草葉の影からおよろこ

び。かならず〳〵わたしが身を。うらやまないで金ぼうや。旦那を朝暮大切に。うき苦勞まんぼうして末の榮へをたのしみに。時節をまつのが樂のたね。すこしのことをきな〳〵おもつて。あんまり苦勞ばつかりおしだと。大わづらひにでもなろうもまれず。氣をきりかへてわたしにも。苦勞をさせておくれでない　ト思ひみのとば身に思みてう　れしさあまるかなしさの　泪を袖に包みかね袂をぬらしまばらくは。詞さへ泣ばかりゝ紫雲はこれをあんじわび倘や金五郎が小三を見かぎり。お雪にこゝろをうつせしゆゑ。胸をくるしめ氣をつかひて。このわづらひの出しかトおもひすごして　ひざすりよせ　茲「おまへのふさぐを見るにつけ。病ひの根がまれないから。どふもわたしは案じられるよ。癪や血の道でふさぐのなら案じるほどの事もないが。何やらひどく氣をいため。心のつかれのわづらひかと。見たはひが目かまらないが。思案に落ない事でもあつて。一人で心勞してゐると。ろくなことは考へ付ず。苦勞にくらうをますやうな。つまらぬことを考へ出すから。だん〳〵病氣は重るとも。快氣ほうはすくないものさ。他人は格別眞身のわたし。世を捨し身といひながら。苦勞なことがあるならば。おまへの胸を隱ずに。はなして聞せておくれなら。女の智惠の淺はかでもそこは膝とも談合づく。へだてぬでこそ實の姉妹。からす啼がわるいにつけ。夢見のわるいや何かにつけ。おまへの事が氣にかゝり。後生を願ふさまたげと。おもへど凡夫のかなしさに。浮世を捨てもやつぱり苦勞心のやすまるひまはないはチトまとをあらはすとばの中になさけとなみだをふくみたる　姉の異見のあ

りがたさに。小三は始終涙にくれ。胸もはりさくばかりにて。顔もえあげずゐたりしが袖になみだたは　小三「眞じつ眞身の妹と。おぼしめしてくだされば。こそ。お案じなすつての段々のおとば。ちらひうれしいにつけ悲しいにつけ。なんであなたをへだてませう。この世に杖とも柱とも。ちからにおもふはあなたおひとり。浮世に人は澤山あれど。考へて見るとおまへさんや。わたくしはどな因果者は。あんまり外にはありますまい。生れ落ると親にはなれ。姉妹二人揃いもそろつて。古郷をよそにはる〳〵と。まらぬ東へさまよひ來て。うき川竹のながれにまづみ。苦勞にくろうをまぬいたあげくに。あなたは行すゑたよりのお人にはやくお別れなすつたゆゑ。お若い身そらに世を捨て。附會まらぬ佛の道。それにひきかへわたくしは。恩と情を捨かねし。浮世の義理にせめられて。日蔭に咲し仇花の。散てゆく身はいとはねどまだ撫子もめばへにて。育てあげぬか一ッの氣がゝり　茲「そのなでし子が氣がゝりとはエトさがめられて　小三「サアその氣がゝりとは金ぼうが事。とかく虫もちて病身ゆゑ。明ても暮ても苦勞になり。どうぞ丈夫に育てたいと。おもひましても子供の事。なにが給たい彼がたべたいとそれは〳〵日かな一日。見るほどの物たべたがり。ねだりごとも三どに一どは。食過ぬやうに氣をつけて。だましすかせばぐわんぜもなく。いや〳〵をして泣ますから。ツイ可愛さにひかされて。灸でおどすより早でまはしと。ねだるお菓子をあてがひますと。又食すぎてはお腹が痛い。痛い〳〵の食傷の度

毎に。虫氣でいつもちよつとは直らず。一躰ひよはいうまれだのに。わたくしの乳でそだてぬから。猶病身になりまするとおもへば不便がいやまして。よその丈夫の子供のやうに。折檻もしずつよくもきかずに。わんぱくそだちが増長して。手にのらぬほどのいたづら者になりましたせへかして。些づゝ丈夫に育つやうだとおもへば。旦那は又行義がわるいの。育てがらがわるいからのと。あの子の身の爲をおもつて。小言をおつしやるも無理ではないが。まだやう〳〵丸三歳に。なるかならぬのふところそだち。生れ落からちやほやいつて。あんまり大事にきすぎたゆへ。わがまゝ氣まゝに育つ筈。今更急に折かんしたり。泣時あたまを打たりしてきびしくきたらわが儘も。少しづゝは直りませうが只でさへひよはい子が。それこそ驚風の虫でも引出し。ほんとうの病身になりますだろう。可愛いゝにつけ不便につけ。苦勞のやすまるひまもなく。氣で氣をつかひますゆへに。今の病氣もおこりましたの。是もわたくしが氣がちいさいから。せずとよい苦勞を餘計にいたして。壽命をちゞめますも心がら。とても長生はできませんが。思へばまとに世の中ほどうるさいものはござりません。それゆゑにこそあなたの御身が。おうらやましうござります　トなみだながらのかこちと聞くもなみだの目紫　ほんにそふいへばそうでもあろう。けれどもそれはほんの一隨。はやい譬が世の中に。子寶とさへいふものを。大切な金錢よりも。子ほどまさつた寶はないと。誰しもきつた世の常言。子を持た身に苦勞の

絶ぬは。おまへばかりではあるまいし。みんな世間のならひだは子。高貴でも下賤でも。子にひかさるゝは親の常。マア見るかげもない橋の上の。むしろ蒲團に世をおくる。食ふや食はずの乞食でさへ。子を大切に可愛がり。寐る目もねずに育てあげても。出世の出來ぬ乞食は乞食。上を見れば方圖がないから。貧しいものを思ひやれば。寒い目もせず不自由なく。くらしてゐるは安樂さ子。欲にかぎりのない世の中ゆゑ。十分なとも不足におもふは。人情だからきかたもないが。おまへなんぞも日かげの身で。儘にならぬを苦におしたが。滿れば缺るといふ通り。十分過たとはないもの。人のほしがる金銀が。有り餘るほどの大家には。子を欲がるほど子が出來ず。貧乏人の子澤山を。うらやむと云とだから。金銀づくにも換られぬは。金ぼうといふアノ大事の子寶。よし病身の生付で人のきらない苦勞をするも。親となり子となるほどの。因緣づくだとあきらめて。面倒を見てそだてなくつては。親の役目がすまぬといふもの。サアそれだから少しの事を。くよ〳〵案じて煩らつては。おまへの身にも壽命の毒。彼子の爲にもなるまいから。氣を引立て煩はぬやうに。身を厭ふのが肝心さ。世に樂みも何にもない。わたしが身をうらやまずと。金ぼうの行すゑを神佛に祈つて。成人させるがおまへの手柄。女の道の缺ぬといふもの。きかし子持の身でありながら。旦那の爲の手助けに。身すぎ世すぎといふものゝ。人の機げん氣づまを取る。今の身での座しき活業は。アゝさぞいやだろうつらかろうと。

わたしがむかしの身をおもつても。おまへの心が悟られて。もう〳〵胸もはりさくやう。何かにつけて苦が絶ぬから。ふさいで病氣のおこる筈。とはいふものゝわたしと違ひ。おまへは身ひとつといふではなし。幾度もくどくいふやうなれど。あんまり苦勞に苦勞をかさねて。今のわづらひが大病になると。もしものとがありもしまいが。さういふ時にはわたしはもとより。金ぼうも便りがなくなるから。どうぞこの末は願でもかけて。煩はぬやうにしておくれ　トさすがあれだけ理をわけていもとあはれむまん　小三「その御異言につきまして申すやうではございますが人の命は今せつはかくぞありたきものぞかし日がけふ。翌日があすとて定まらぬ。世のならひゆゑわたくしが。けふが日もしもの事があろうや。去れぬ生身のとなれば。逆さまながら御回向を。受ますともあろうも知れず。達者でおつてもなき後でも。眞身はあなたおひとりゆゑ。何彼につけて金ぼうが事を。どうぞおねがひ申しますから。わるいとはどの樣にも。お叱りなすつてくださいまし　ト子にまよふゆゑひたすらにたのむとはぞあはれなり　紫「なんだエモウ。そんな哀れつぽい事はいつておくれでない。姉となり妹と生れて來たからは力になつたりなられたりするのは。そりやアいはないでも去れた事。もう〳〵そんな愚痴はやめて。金ぼうをつれて梅屋しきへでも行て。ちつと氣ばらしをしてお出ト なぐさめるをりから金の介も庭の遊びにあきたるにや乳母にいだかれ座敷へ來れば。紫雲は抱きつ愛しつして。わが子のごとくに可愛み。是よりみなみなもろともに。梅屋しきへゆかんとて。内には下女と下男を。殘して小三と紫雲は連立。

花屋しきより蓮華寺の大師へ詣に出行しが。程なくして立歸り。紫雲は種〻この美味をとゝのへみな〳〵に夕餉をすゝむる。馳走に時を移しければ。秋の日のはや西にかたぶき。入相ちかくなりしかば小三は家にかへらんときせ　小「ヤレ〳〵今日は久しぶりで。ついになくゆる〳〵と。身のうへばなしに欝をはらし。まとに保養いたしました。日の暮るにも氣がつかず。盡ぬはなしをくりかへして。大きに遲くなりました。乳母おまへも支度がよいなら。モウそろ〳〵歸ろうじやアないか　紫「マアおまへよいはず。それに今日は遲くもなるし。内にさしたる用がなくば。又こういふよい首尾はないから。今夜一ト晩泊つてお出な。病氣がよくなつて。座しきへ出るやうになると。又出るといふが手重になつて。いつ來られるか知れないから。寐物がたりにゆつくりと。身の上ばなしの跡をついで。ふさぐ胸をはらしてお出よ小三「わたくしもたま〳〵ではございますし。盡ぬお名殘だからどうぞして。泊つてまゐりたいとぞんじますが。今夜わたくしが留主のあとへ。ひよつと旦那がお出なさるとわるふございますから。どうも歸らずばなりますまい　紫「ほんにさうさぬへ。旦那の御機げんをそこねてもわるし。一ト晩でも儘にならないとだねへ。そんなら船でおかへりな。去かしゆれてはわるかろうから駕籠の方がよかろうか小三「ナニそれにも及びません。ずゐぶんあるいてまゐられますから　紫「それでもおまへ氣色がわるいに往還ではくたびれるヨ小三「いゝヱ。却てすこしづゝ頭痛のいたす時は。歩くほうが

勝手でございます　紫「さうかチ。そんなら金ぼうばかりも泊てお出な。のう金ぼう。おまへは。乳母と爰へおとまりよトいだきあげれば　金「アイ。坊。おばちゃん處へ。寐仕て。お池の龜ノ子つやまいゆよトねなかめづらしき子ごころにかへるそらの小三「ヲヤそんならぼうはおとなしくしておとまりなかりしかば小三も心にあんどしてヨ。ばゝァのいふとをよくきいて。だゝをいつてすねるではないよ。アノ内に居るやうにおこるとの。おばさんが。泊てくださらないよ。あなたが可愛がつてくださるから。直きに泊ろうと申しまして。おくびんがなくつてこまります　紫「それだからまとに可愛いゝのサ。人見志りをする子供は。愛相をしても泣出すから。うつかり口も聞けないが。此子のやうなにとやかな。可愛いらしい子はありません小三「坊はまとに仕合せものだよ。こんな野廣い處へ泊ていたゞいて。おつかァよりあやかりものだの。そしてアノ坊や。おつかァがゐなくなつても。たづねて泣のではないよ。泣との直き炙だよ。おばさんの處には炙がたんとありますから。おとゥなしくしてお出よ　金「アイ。坊おとなチくすゆが。おつかちゃんどこイお出だ小三「おつかさんはの。アノ内が遠ゥいから歸らないと。おとつさんにまかられるよトいひつゝ金の介をいだきあげかかなしやと。いはねど胸にせきあげて。顔を見つめる目に涙。志ばしとばもなかりしが。疑はれんと心づきなきがほなかく　小三「ほんに子供といふものは。何をいつても無我夢中。後生樂なとでありますねへトおもひきつて下へおろし帶〆直す顔つきも。常にかはりしやうすゆゑ。紫雲も乳母も何

となく。小三の身のうへあんじられかへしがたさにか　紫「どうもわたしは今ッから。おまへを獨りかへすのが。心にかゝつて落付ぬから。今夜は泊つて明日の朝。はやく歸つたらよさそふなものだ。のうばゝァうば「さやうさ。旦那だとて一ト晩ばかりの事。譯をおはなし申ましたら。お腹立もありますまいから。是非今夜はおとまんなさいましなトさめるとばもきこいれず　小三「そうだけれど。けふこなたへ來るとを。旦那におはなし申さなんだから。泊つてはどふも濟ないよ。それに是非おはなし申さねばならぬ事もあるから。三松どんでもお借り申て。ちつともはやくかへろうようば「さやうならおぼうさんもお歸りがよふございます。小僧どんばかりでは。おかへし申されません。わたくしもお供いたして。龜ノ子は又明日。見にまゐりませうねへお坊さん　金「フゥ。ばゝァ。坊歸ゆのいや〳〵だよ。龜ノ子の處へ泊ようよゥうば「あゝだものどうもこまりきつた事だ。どういたしたらよかろうやら　紫「そんなら斯しませう。坊と乳母はおとまりと極て。おつかさんには三松に久助を付て上やうよ。それでは案じる事もあるまいうば「さやうならぞうぞふなすつてくださいまし。ヤレ〳〵それで落つきました トみな〳〵するゆへに　小三は紫雲と金之助に。名殘のことばが置みやげトなみだを袖に　小三「さやうならあなた御機げんよう。御厄介でもございませうが。金ぼうが事をおねがひ申します。ばゝァそんならたのんだよ金ぼうやおつかァはモゥ行から。おとなしくして機げんよくお遊びヨ。あば〳〵だよおさらばよトのこるかたなくつど〳〵にいさまご

ひして立輪回の絆にひかされて盡ぬ名殘のやるせなく。紫雲も乳母ともろともに。金之助の手を出れど　ひき門口まで。別れを惜み送る身より。送らるゝ身はこの世から。くらき冥途の旅の空へ。消ゆくものと悟りしも。さすがは尊き法の道を。受たる身ゆゑ御佛の。眞身の姉に導きをさせてたまはるものにやと。ふり歸りては目に涙。哭音をきのぶ親鳥の。雛に別るゝ思ひにて。氣も絶〳〵になる鐘の。無常の風にひゞき來て。耳をつらぬく入相に。おどろかされて氣を取なほし。心弱くてかなはじと。別れてこそは歸りける。さる程に金五郎は今朝小三に別るゝ時。常にかはりて名殘がおしまれ。歸る心のつらかりしが。主人持身の儘ならねば。とばを契りて別れしかど。その夜は夜詰の番にあたりて。出る事さへならざるゆへ。心ならずもとやかくと。案じわびても詮方なく。明る夜遲しと待かねて。御殿より内へ歸りても。胸さわぎの常ならねば。食事さへせず着物を着かへ。青柳橋まで急ぎ來る足も空に飛がごとく。小三の許へ來りしは。やう〳〵日の出の頃なるべし　まだ入口の戸も明ればさては何事もなかりきと少し　金五郎「ヲイお竹起ねへか。モウ日かあたつてゐるぜお竹〳〵」　下女はおどろきお竹「ハイ〳〵旦那さまでござりますか。ヲヤヲヤ大きに寐すぐしました」　トかけがねはづして戸明れは　金五郎は内へとびこんで　金「坊主はどうしたまだ起ねへか。小三の病氣が惡かァなかつたかお竹「ハイ昨日は大きにおこゝろよいとつて。お坊さんをお連なすつて。向ふ島へ入らつしやいましたが。お坊さんは乳母どんと御一處に御逗留で。お獨りあちらの男衆

に。おくられて夕べお歸りなさいました　金「ナニきのふ金ぼうを連て向島へ行たか。よく歸つて來たのう。それじやァくたびれてまだ起ねへのだろう　トいひつゝ小三のねやへ行から「ヤ、、、、トびつくりぎ　後居に倒るゝ物音に。下女のお竹も何事にやと。かけ來りてやうすを見れば。小三は白無垢を身にまとひ。いつの間にやら自害なしけん。朱に染て死したる躰に。おなじくわつとおどろきて。倒れてわな〳〵ふるへゐる　金五郎は狂氣のごとく　金「小三ナゼ死んだ。どうしたのだ。氣が狂つたかコレ小三。小三〳〵トだきおこしよべどこたへもせず　虫の息さへなきゆゑに。さすが男の心もきれて顏の色つやあをざめて　みだれ。泣ごゑくもらせなみだと　金「コレお竹。てめへが內に一處に寐ながら。小三が斯いふやうすがあつたら。ちつとはきれそふなものだのに。志らずに殺して志まつたか。情ねへとをしてくれたトやちをいふのもこの時粂川のわかい者。清介佐介もかけ來りて。おどろくと大かたならず。何はともあれ向島へ知らせんとて。佐介を紫雲のところへはしらせければ。紫雲も乳母も仰天して。金之助を連駕にうちのり。飛がごとくに馳來りて。小三のすがたを見るよりも。あまりの事のかなしさに。夢か實か辨かねて。涙にむせぶばかりなり。紫雲は顏に袖おしあて。聲くもらせつゝ金五郎に。小三がきのふのやうすを語り。金之助の行すゑまでを。とにかく憑みて別れ路に。名殘の泪の盡ざりしも。斯いふ覺悟をきはめしゆゑ。情なやかなしやと歎くかたへに書置のありしをうばうばトこれマア御覽じまし。遺書までこんなになすつて。お果なさるは

よく〳〵な事とは申しながら。いとし盛りの。お坊さんをこの世へ捨て。跡のなげきを思しめさぬは。あんまり聞えぬお胴欲おせまい心でござりました（トおじうなみだに）むせびゐる。金五郎は男子復ぶら。共に心も消こに。歎きにおづみうつとりと。夢現ともわかぬまで。おしさやるかたなかりしが。さすがさかしき生れゆゑ。武士の身でかへらぬとを。くりかへして歎くこそ。人のおもはくも面目なしと。やう〳〵おもひあきらめて。かの遺書を手にとりあげ。ひらきて見れば こまゝ〳〵と。わが身のためと家の爲を。おもひつめての覺悟の文躰。讀めばよむほど後悔の。身をきらるゝよりせつなさに。あきらめてもまた泪ぐむ（目をおばたゝき胸をなで）金五郎「老少不定は世のならひ。翌をも知れぬ身の上だと。きのふ小三がいつたのが。思へば紀念の言となつたか。浮世の義理とおれがためを。おもひなやみて先だつ不便さ。亡跡の事まで苦勞にして。異見まじりのこの書置。よむ身になろうとは氣がつかなんだ。いつか世に出し人なみの。樂なくらしをさせてへと。思つた事も水の泡。子供の時からけふが日まで。かわいや一日樂もせず。日影の身にて苦勞をし死。死んだ苦勞の原はといへば。おれが片とき内にゐぬゆゑ。親に不孝といはせじと。その身を捨しこゝろねは。眞實過てうらめしい。たとへ一人りで死だとて。わが手にかけしも同じ事。死なずと志よふはあろうのに。短氣をしたからみんなのなげき。吁なんだか夢のやうで。かへらぬ事だが不便でならぬへ。南無あみだ佛〳〵（トおかうするかほ金の介はつく〳〵と見てふしんにおもひ）「おとつ

ちやんナニ泣のだへ。おつかちやん佛ちやんになつたかエ。乳母なぜ泣よゥ。おばちやんもお泣かエ。坊おつかちやんこはいよゥ（トさもに泣だすあどけなさ紫雲もわつとなき出し）紫「ほんにこの子のかしこい事。誰おしへねどおつかァが。佛さんになつたとは情ない。こんなかなしい事を見るのを。虫が知らせたせへかして。きのふ歸すが氣にかゝり。乳母と二人でとゞめたが。あの時歸さずはなんのマア。あつたら命を捨させやう。歸すも約束歸る身も。みんな定まる因緣ながら。薄命な妹が身の果やトくりかへしてはみな〳〵歎きかなしみて。涙に疊も浮ばかり。哀れといふもおろかなり。斯ては果しなき人の。爲にならじと金五郎は。男心を取直して。紫雲をいさめ乳母をはげまし。の邊の送りもねんごろに。七日〳〵の訪とむらひも。手厚く法會なしにける。かゝりし程に金五郎は。おさなき金之助が母に別れて。便りなき身となりしを案じ。かねて小三が存生より。紫雲の許へ預けくれよと。たのみしとばもあるゆゑに。日がら立て金之助を。乳母もろともに向島へあづけ。青柳橋の家は取かたづけ。殘るかたなく心を配り。をり〳〵紫雲の庵を訪らひ。金之助を愛しながらも。只小三の事忘れかぬ。家に在時は部屋にのみこもり。お雪にだに是等の始末を。秘しかくして語るとなく。氣のひき立ぬも理なり。白翁はじめ家内の者も。金五郎がこの頃にては。急にうつて變りしごとく。夜あそびにも出ざるゆゑ。さては身持の直りしかと。よろこぶものゝいつとても。何か心に案じ顔。屈宅らしくふさぐのを。見るにつけ又白翁

は。老の身の思ひ過しに。倘金五郎が短氣から。小三に怪我をさせしもまれず。それゆえにこそふさぐのか。小三の身のうへおぼつかなし。いかなるとかたづぬゆき。やうすを聞て安堵せんと。ひとりひそかに兩國の。小三が家へぞいたりける。

小さん金五郎假名文章娘節用三編中卷終

小さん金五郎假名文章娘節用三編下卷

江戸　三文舍自樂補述

第九回

朝夕に。木この落葉を雨と見つ。冬をば告る寂しさに。心も空も時雨月。訪ふ人もなき草の扉へ。友さそひ來て音信は。水鶏にあらぬ小雀の。ちゝよはゝよと啼聲を。聞につけても哀れ添ふ。紫雲は小三の亡後を。吊らふひまに金之助を。なぐさめてもまだ聞わけの。泣ては母を尋ぬるゆゑ。不便の增て可愛さに。泪のかはくひまもなし（母におくれし金の介は紫雲や金五郎ともろともに七日〳〵の寺まゐりに小三のはかへ花をたむけ念佛さなへておがむをば見やう見まれの子心に内へかへりてあそぶにもさすがちすぢさい ひながら菊の花など折て來つ庭に立てたる石どうろうへたむけてちひさな手をあわせ）金「なんまい〳〵。のゝちやんなんまい〳〵。ばゝァこゝへ來て。なんまい〳〵仕なよおばちやんもお出よウ」トわけわいられど見るにつけ聞くにつけ。乳母も紫雲も倶なみだ金の助をいだきあげ 紫「コレ金ぼうャ。又そんなことをして。おばさんを泣せるのかエ。ア、栴檀はふた葉とやら。やがて成人したならば。孝行者にならうのに。いたいけ壯りのこの子を捨て。死た小三が心の中。マアどのやうにつらかつたろう。思ひやるほど後生のさわり。ア南無あみだ佛あみだ佛トつまぐゝ老ゆずも志めりがち うば「とてもかへら

ぬ繰言と。思ひ直し氣を取なほしましても。お可愛そふなことをいたしました　トかたるもはなすもなみだゆへ金の介はたいくつし　金「ばゝア。おばちやん處モウいやだヨ。面白くないかや。内行うよゥおつかちやんへ行うよゥうば「又そんな事をおつしやるかよ。お聞、わけのわるい。こゝがお坊さんのお宿でございますから。内へ行ふ〳〵とおつしやるものではございません　金「フゥ。坊の内爰でないよ。おつかちやんへ行ふよう。おばちやん。ばゝアいけないヨ。坊内へ歸やせないよ　紫「ヲゝそふかエ〳〵わりいばゝアだぞ。アゝまかしだましすかしても。まだぐわんぜもない子供だから。内へ歸ろうといふも無理ではない。小三が座しき活業で。なんぼ傍には居ない勝でも。三日と離れた事もないのに。やがてもう五十日あまり。賑やかな處で育つた子が。こんなさむしい處へ來て。緋鯉や龜の子が合手だから。どうでも遊びにあきるはづ。コレ金ぼうヤ。おまへは利口ものだから。おばさんのいふことをよくお聞。アノおまへのおつかさんはの。それは〳〵遠ウい處へお出だから。モウ内には誰エもお出だはないよ。それだから内へ行ふ〳〵といはずに。おばさんの處にいつまでも居るのだよ　金「坊のおつかちやん死だから。お寺へ行ちまつたかエ　紫「アイさうサ　金「夫だから坊の内無〳〵かエ　紫「さうサ。よくわかるぞ。それだから爰が坊やの内だよ　トうばとふたりでなぐさむる　おりから下女がかけ來り「モシあなたへ。どこのか御隱居さまが。お目にかゝりたいといつて入らつしやいましたヨ　紫「さうかエ。そんならどなただかマア庭口からお通し申しな

下女「ハイ〳〵　ト立てにわ口へまわり戸ひらきこなたへと通せばつろをつき〳〵入り來るは金五郎が祖父白翁なり　白「ヤレ〳〵よい御住居じや。ママ御免くだされ　トざしきへとほり座になほりて「偖ハヤわしは金五郎めが祖父で御ざるが。たしかこなさんは。小三どのゝ姉子といふとゆゑ。聞たい事はなしたい事。山〳〵あれば孫めにかくれ。わざ〳〵尋ねてまわつたが。おさし合なお客はござらぬか　トいふに紫雲もよろこびながらなにかやうすもわかられねばたゞいんぎんに手をつかへ　紫「是は〳〵どなたさまかとぞんじましたら。金五郎さんのお祖父さん。よふマアお出あそばした。何にも御遠慮な者はをりませんから。何なりともお心おきなく。おはなしなさるがよろしうございます　トやさしきことばに白翁は老の目やにをふきながら紫雲のかほをうちながめ　白「ヤレ〳〵姉妹とはいひながら。小三どのに生うつし。おまへの顔を見るにつけ涙がモウさきだつやうじや。扨何から申さうやら。心のうちがとり込で。前後するのも老の癖。退屈ながら一ト通り。はなすを聞てくだされや。その子細といふは去らしやつた通り。不思議な緣で金五郎と。小三どのと深ふなり。たがひに思ひおもはれゝばこそ深切づくが苦勞のたね。大概に惚合てあたならば。人のおもはく世の義理にもかゝはらずに。たのしみだろうに。あんまり可愛がりいとしほがられたから。孫めもその情にまよふて。うちを外の夜どまりばかり。一ッづゝ年はとれども。放埒が直らぬゆゑ。始終のつまりが案じられて。異見はしても糠に釘。豆腐にかすがひきかぬが儘よと。捨て置ては爲にならず。刃物もをりを磨なければ。錆付て切れぬ道理。その錆を落すには。普通の世事の合せ砥では。とても切れ

るとではないと。推量をして見る時は。わしが心の荒砥にかけても。切らねばならぬ浮世の義理お雪といふ孫娘と。祝言までさせたから。とても添はれぬ悪縁と思ふたゆゑに孫めにかくれ。ァゝいつでかあつたげな。小三どのゝ内へたづねゆき。はじめて逢ふたその席で。よろこばせもせず孫めが身のうへ。かう〳〵いふ譯あれば。長ふとはいはぬほどに。いやでもあろうがまばしが間。どうぞ縁切てくだされと。無粋なむごいたのみをば。聞てなみだにむせながら。義理と恩とを聞譯て。ふつゝり思ひ切まさよと。いはれた時のわしが胸。うれしさあまつて不便なは。小三どのゝ心の中。さぞつらかろう悲しかろ。とおしはかられて侶なみだ。ァゝ浮世が儘になるならば。容貌といひ利發といひ。やさしい心の生れつき。孫めと夫婦にしてやつたら。さぞマァたがひに嬉しがろと。思つたばかりでそれもかなはす。是非も泣〳〵歸つたが。それから後は金五郎めも。そは〳〵するやうすもなく。内にばつかりゐるゆゑに。偖は心が直りしかと。家内のものがよろこんで。機嫌をとるほど鬱ぎ顔。ぞれては部屋にとぢこもり。何か屈宅なやうすを見ては。又案ぜるが親のつね。兩親の者もお雪めも。同じやうに苦勞がれば。わしもやつぱり氣にかゝり。考へて見る程合點がゆかず。もし金五郎がわか氣の癖で。愛相づかしの腹立まぎれ。疵でも付て騒動を。出來したゆゑにふさぐかと。思つて見れば片時も。あんじにむねがやすまらず。わざ〳〵青柳橋へ尋ね行て。見ればおもひもつかぬ人の。栖家となり

て勝手口も。變つた事で引越せしかと。あたりの人に尋ねしに。小三どのゝ志る人にや子までなしたる身ながらも。男の爲と義理づくで。身を捨られたあつばれ貞女。近所の者までその當座は。皆惜がつて泣ましたと。なみだながらの物語り。聞て突胸のわしがびつくり。かなしさ不便さやるせなく。その捨られし子の行さき。聞けば眞身の姉子のところへ。引敢られしといふとなれば。悔みもいひたしやうすも聞たさ。孫めが顔も。イヤ孫ではない彦であつた。見ねば心も落つかぬゆゑ。駕籠をとばせてやう〳〵來ました。子までである身と志つたならなんのむごく縁切らせう。なま中包みかくされたが。今となつては却て恨み。年に不足のないわしが。長命せずばこのやうに。かなしい泪はこぼさぬもの。なんの因果で生延たか。おもへば年が恨めしい。ト老のなみたなく愚痴になるのもとわりなり。紫雲もあらまし聞とるうち。さもになみだを。紮ほんに妹が薄命は。約束事とは申ながら。子までなしても日かげ妻一日半時人なみの。息をもつかぬ苦勞を仕死。わたくしとても眞身といふは。天にも地にも小三ひとり。力におもふ甲斐もなく。杖にはなれし今のかなしみ。わすれ紀念の金之助で。すこしはうさもはれますが。まだマァまとにくわんぜもなく。明ても暮ても母を志たひ。泣につけすねるにつけ。達者で居たならどうかうと。思ひ出しては同じやうに。泣て泪のかはく間は。ほんに一日もござりません白鷺「イヤモウそりやいわるゝまでもない。おまへの胸を推量すると。わしが胸もはりさくやう

で。矢も楯もたまる事ぢやない。マ。マそれは左もあれ。孫めが悴はどこにおるか。ちよつと逢たい逢はせてくだされ　紫「ほんにさやうでございましたヂ。金ぼうは奥にお出かエ。乳母一寸連てお出　トよびたてられて金の介はうばよりさきへかけきたり　金「おばちやん。坊おとつちやんお出だとおもつたヤ。餘所のおぢいちやんだヂ　紫「是はしたり。よそのお祖父さんではないヨ。是は坊ヤのお祖父さんだから。手をついてお辭儀をおしよ　白「ヤレ〳〵おとなしいよい子じや。ドレ〳〵祖父の側へ來やれ。ヲヽよくいふとをきくぞ。そんならお土産をやりまゝよ。サア〳〵手を出しやれ。ヲヽ手へ〳〵がよく出來たぞ。ヤレ〳〵可愛いヽ能子じやナア　トようかん一トさほ出してやればいたゞいてうれしそうに　金「おばちやんコレお菓子お祖父ちやんお呉だ。有難うごぢやイまちゆ　紫「ヲヤよいお菓子をおいたゞきだの。よく忘れずにお禮を申たぞ。よいお祖父さんを持て坊は仕合せものだぞ　白「ハヽヽヽ。イヤこの坊ヽを見るにつけ。はじめて逢つたわしでさへ。可愛くつてならぬもの。いくら疾深く異見をしても。金五郎めが聞おらぬも道理かエまして小三どのは女の事。このマアいたいけな子を置て飽もあかれもせぬ中で男のためと身を捨られたは。貞女ともあつぱれとも。賞ても是が稱つくされふか。おかし眞身のこなさんが。身に取てはこの爺を。鬼とも蛇とも惡魔とも。さぞマアにくいと思ばつしやろが。そのいひ譯ではなけれども。この子を内へ引取て。晴て金五郎が悴と披露し。小三どのヽ亡跡も。ねんごろにとむらはせまゝよ。せめてはそれをなぐさめに。思ひあきらめてくだされ　トなみだふき〳〵いひければ紫雪もうれしさかぎりなくなみだのさめどもなき顔あげて「だん〳〵厚い思しめし。何とてお恨み申ませう。みんな過世の因緣ゆゑ。どうもおかたもござりません。それにつけても姉妹が。身のうへのあらましを。おはなし申すもお恥かしいが。わたくしどもが生立は。かやう〳〵でござります　トこの兄弟二人母なきゆへ小三が身は生れ落より文の丞に養育せられ我が身も共に情にて親にかねなさづけられしその惠にて里に行しが。早く父にも死わかれ。里親にだまされて。うき川竹に沈みし事。小三も金五郎と共に育ち。たがひに末を契りしに。金五郎は本家へ養子となれば。小三は便りなき身をかこち。心狂ひて鴨川へ。身を沈めしがふしぎにたすかり。惡者の手にわたりて。つひに同じ花街へ賣られ。唄妓となりてくらすうち。緣ありて金五郎にめぐり逢しより。二世をちぎりてふかくなり。つひに子どもの出來しゆゑ。身請をされて圍はれしと。又その身も同じころに。さる人に受出され。この別莊に養はれしが。便りの人に早くわかれて。頓に佛門の志願おこり。髮を剪り尼となりつ。世をのがれてくらすうち。妹が身の薄命から。浮世の義理にせばめられ。添事ならぬを覺悟して。心づよくも身を果せしは。みな男の爲を思ひ。操を立ぬくこゝろざし。妹ながらも天晴貞女。只一トすぢの不量見と。おぼしめさずに心の中。推量してやつてくださいまし　トいちぶしんつまびらかにかたれば白翁もかんるいなながし　白「さて〳〵姉妹揃いもそろいし。貞婦といはふか義婦といはふか。殊に小三は幼い時から。金五郎と一處に育ち。家出して死だと聞た。養娘のお龜であろとは夢にもおらぬ

が大きなあやまり。そふいふ譯のある事を。養子の身ゆゑ金五郎も。遠慮して人にも明さず。ひとりで苦勞をして居たかと。思へば小三が心の中と。金五郎が胸の中が。不便でどうもなりませぬト思ひやりつゝうちなげくに紫雲もなみだをせきかねてともにないては物がたりはなしはなみだではかどらず偖もうばもつぎの間で金の介なれかしながらのもらひなきまやうトふすまの明たてもなみだで志めるばかりゑ白翁は。泣く紫雲に別れをつげ。家に歸りて金五郎の。兩親はじめお雪にも。小三がなり行紫雲の身のうへ。金之助か事までも。くはしく語りける程に。皆もろともに泪にくれて。小三を惜まぬものもなし。この上はすこしもはやく。忘れ紀念の金之助を。引取て小三の亡後。ねんごろに吊らはんとて。金五郎にもこのよしを相譚ふに。喜ぶと限りなく。それより日をえらみ向ふ島より。金之助を。乳母もろともに呼むかへ。お雪の子となしていつくしみ。小三は世になき數に入れども。あらためて先妻と呼稱し。佛事も手厚く行ひければ。金五郎はいへばさらゑ。紫雲乳母も上なくよろこび。家内の者も朝夕に金之助を掌中の珠と愛し。只すとやかに成長するを。指をりかぞへてくらすほどに。はやくも小三が百ケ日に當りければ。金五郎は寺に詣んとて金之助を乳母に抱かせ供の男を引連て菩提所へとて出行けるあとにお雪は下女とともに金五郎のへてたばこぼんを打かへしけるはづみに引出しよりまゝくのほぐの出しまゝに取り入れん下女「ヲヤ〳〵御新造さんへとする中に女のみがらめきし敎出しかば下女はこれを手にとりあげちひさなこゑにて一寸御覽あそばせ。女中のおみがでございましたよお雪「ドレお見せ。ほんにねへ。ヲヤ常のおみだと思つたら。書置の事としてあるから。こりやァ小三さんの書置だよ。わるいものが有たヲヱ。

モウ是を見たら中を讀ないのに。胸が一ぱいになつたヨ下女「ヲヤ書置でございましたかへ。ほんに思ひ出してもお可あいそふでございますヲヱお雪「そうさ大かた若旦那の事が。いろ〳〵書てあるだろうから。見たさも見たいが泪のたね。それにひよつと知れでもまたら。お腹をお立なさるとわるいから。マァ〳〵よしにおませう　トおまはんとするところへ母おやが出來り　母「お雪ヤ。モウ今に金五郎も歸るだろうよ。はやくそこを片付ておまひおまひなさいまし　お雪「ハイモウおまひました。アノおつかさん。一寸是を御覽なさいまゝによい手でございますねへ　母「ドレ〳〵。ヲヽ書置の事。アヽ小三どのゝ書置かヱ。又そんなものを見つけ出してお雪「それでもお杉が見つけましたもの。開いて見ましてもよろしうございませうかヲヱ　母「不遠慮なれど。あんまり可愛そうだから。ちつとばかり明て見なナ。アノ杉ヤ。おまへはの。お煮花のおたくをしておくれヨ下女「ハイ〳〵かしこまりました　トト下女は勝手へ立てゆくお雪はこほ〳〵敎をひらけばその文にいはく

逢ふは別れの初めとはかねてより人の身の定めなきに引くらべ覺悟いたしをりひしにやうやく只今おもひあたりしまゝこの世の汚名殘に一筆書殘しまづとやゝ平らかにはくらし被遊しは事此上もなふ汚よろこび申上まゐらせしさてしもわが身事いやしき賤のふせ家に生れ草葉の露のはかなき身をは父君のは情にてやう〳〵人となりしは恩のほど海とも山とも詞には盡しがたく夫のみならず親姉

までも命をつなぎは恵みの淺からぬは事いつの世にかむくひまゐらせんやうもなくあまつさへ一日のは恩もおくらずかへつては辛勞のみかけまゐらせしこの身の罪の深き事ヲ上へくやうもは座なくしえにしは神のむすばせ給ふは事にやもとよりいやしきわが身ながらも君のは情にあづかりまゐらせよりひとかたならぬは氣がねのみあそばしさふらふもみなわが身故と存しへば身もよもあられず只こつたなき身をのみうらみまゐらせは祖父さまはじめお雪さまにもさぞ〳〵わが身をはにくしみはうらみ被遊しはゞはて〳〵は君のはためあしからむと行すゑのとぞんじつゞけしへばながらへをりしほどつみをかさぬる思ひにて後の世さへも空おそろしく又このうへにかず〳〵のはくろうかけまゐらせんもはかりがたくせめてはわが我身を果しはゞすゑ〳〵君のはこゝろもやすかるべしとくより覺悟はきはめまゐらせしへども女心の淺ましくは名殘のみをしまれてけふまでながらへをりしは事まとに〳〵はづかしく存まゐらせ只こ此うへはお雪さまとは中よふは父祖樣にはじめは兩親さまへもは孝行のほどねがひ上まゐらせし二ッには姉事はは存じの通りまとにたよりなき身のうへこれまではおよばずながらもたがひに便りにいたしをりしへども末〳〵は猶〳〵たよりなき身にさふらへば何とぞは見捨なふは

めをかけ被下しやうねんじ上まゐらせし又金之助事はぐわんぜなきわんぱくものにさふらへばわが身なきのちはたづねわび泣むつがりし半かと今より目に見えしやうにてみれんながらふびんにぞんじまゐらせ〳〵姉方へも昨日まゐりよそながらいとまごひのついでに金之助の事もよく〳〵頼みおきしへばあのかたへはあづけ下されし西東もわかりしやうに成しはゞ母なし子とて人にわらはれぬやう手ならひなどよく〳〵はをしへ下されへくかへす〳〵も君のは身もち只今までのやうなるはこゝろにてははためあしくしまゝ是よりは心を入れかへむりなるは酒をはすでし被成ずは宿にのみは出あそばしお雪さまにも無理なるは事沙ヲなされぬやうねがひ上まゐらせし猶このうへのはねがひには後の世のは事には座し百とせのはよはひ過させ給ひて未來はひとつはちすのうてなこそひとへに願ひ上まゐらせ〳〵まとにをさなき時よりはまたしみヲあげ時の間のはわかれだに心うくそんじさふらふにかくながきはわかれとなりさかさまなるはゑかういたゞきしはいかなるむくい因果にやとくりかへしまとに〳〵はなごりをしさいはんかたなくこゝろもみだれさふらふて上度は事は濱の眞砂の盡せぬど明がたちかきかぬの音に死出の山路へ心せきをしき筆とめまゐらせ〳〵

道志ちぬくらきよみぢへ初旅の
身はほ佛を力にぞして

とよみ終り。お雪も母ももろともに。目を泣はらして顔見あはせ　なみだ袖に　母「アヽヤレ〳〵
よしない夢を明て見たゆゑ。かなしさもかなしさ胸がせまつて。大きに泪をこぼしました。金
五郎の迷ひしも。尤な筈美人だと。お祖父さんさへ小三が容貌を。おほめなさるほどな生れつ
き。容貌は格別な事だが。心だてといひこの手蹟まで。うつくしいとも見事とも。約束事とは
いふものゝ。わか死をするゆゑに。人にすぐれて生れて來たのか。金五郎のためをおもひ。お
まへに義理を立通して。名を汚さない貞女の鑑。ほんにお雪ヤかならず仇に思ひなさんなヨ。
この書おきはおまへの爲には。實によい手本だヨ。このやうに金五郎を大事にして。道を立る
が女のたしなみ。金ぼうも麁略にしてはすまないヨお雪「ほんにさやうでございます。わたくし
が人なみに。よく氣のつくやうな生れなら。このやうな事にはなりますまいに。因果な事でご
ざいました　トおや子二人がくやみなきなみだに袖を　下女「若旦那さまのお歸り　トつぐるに母
文をおきまひ。泣がほかくして出迎へば　金五郎はそ　は奥へゆく　お雪は手ばやく
ハヽア大きな形をして。又おつかさんにおかられたのお雪「イヽエそんな事ではございませんが
トあさいひかねしが　アノ金ぼうはどふいたしましたエ　金五郎「ばゞアと先へ奥へ行た　トきものをきかへお
手もちなきゆゑ　びをおめながら

アヽヤレ〳〵くたびれたぞ。ほんにお雪けふはの。寺參りをして直に向ふ島へ行たら。紫雲さ
んのお傳言があつたぜ。おめへに金ぼうを連て。ちつと泊りがけに來いとヨ　トいへどもお雪はうつ
ばかりゆゑ金五郎はふしんにおもひ　金「ハテどうもおれはおめへのやうすがわからねへが。何をそんなにふさぐのだ
ろう。ハヽアきこえたこりやア何だの。おれが小三の寺參りに行たから。それで癪にさわつた
のだのお雪「どういたしてまあそんな事が　金「心になけりやアどういふ譯だか。心をおかずと言
てきかせな。一生添ふと思ふには。隔てぬでこそ夫婦といふものお雪「そのへだてるといふ事は。
誰かわたくしに教へましたか　金「なんの事たな。こつちはそんな覺えはねへものお雪「外の事は
ともかくも。小三さんの事ばつかりを　金「へだてたといふ事かお雪「ハイ。それゆゑにこそこの
かなしみ。先からわたくしに。斯こだと。譯をお聞せなすつたら。あなたにも御苦勞をかけます
まいのに　金「なんだナ。又きもひ出したやうに。モウいくらいつてもはじまらねへ。みれんも
大概にやめてくんなお雪「まつこいやうでございますが。何につけ彼につけて。常こわするゝと
もなく。みんなわたくしがおろかゆゑだと。この身を恨んでおりますが。けふは取わけいつも
より　金「百ケ日だけ氣になるかお雪「又そんなとばつかり。お疑ひが晴ませぬから。申しますか
らお腹をお立あそばしますなヨ。アノあなたのおるすのうち。お烟草盆の引出しから。小三さ
んの遺書が。出ましたゆゑにツイちよつと　金「見たので氣色にさわつたろうお雪「なんぼおろか

なわたくしでも。先から深い譯ある事を。知つておつたらどうでもいたして。あなたのお側へ小三さんを。呼ます事もできましたろうに。なぜかくしてはくださいました　金「モウどのやうにいつたとて。とてもかへらぬ繰言だ。小三の事をかくしてゐたは。おれが一生の誤りだから。堪忍してくんな。年もいかねへおめへにまで。いろ〳〵苦勞させたのも。みんな因緣約束事。このうへはいふまでもねへが。金ぼうを可愛がつてやつてくんな。ア、何だかひどく鬱で來たお雪おめへいい子だから。茶碗に一盃酒を持て來てくんな。そのうちちよつくり奥へ行て。みんなの機嫌を取て來やう　トはおりをひつかけ奥へゆくお雪は酒を持ち來れば金五郎もへやへかへりて付てゐて。好なねだり事をしてゐるぜお雪「さやうでございますかヱお祖父さんにはよいお合手でございます。ハイあなた御酒を　ト茶わんをぼんにのせてさしいだせば　金「ヲツト有がたし御苦勞だつた　ト手にとりあげていきをもつがすぐつとのむゆるお雪はびつくり冷でもいい。是で氣色が直つたやうだお雪「ほんにその事もあの書置に。いつそ案じて書て有ましたヨ　金「そふだつけのう。いつでもこのぐい呑では。小三にひどく氣をもませたが。ア、今思へば是も後悔。モウ〳〵ふつつり止にする。思へば小三はおれが爲の。善知識でもあるだろう　ト何かにつけて身のおこなひをあらためるのも小三の貞心天に通ぜしゆゑにこそあつぱれ賢女といひつべし　是よりして金五郎は。主君へ忠勤怠るとなく白翁初め兩親に。孝を盡すと日にまし厚く。お雪とも中睦ましくして。金之助を愛育し。紫雲の庵

りも四季折〻に。訪ひおとづれて疎遠せず。忠孝信義全きゆゑに。家内に和順の基をひき。お雪の腹にも子を儲けて。幾千萬代賑はしく。益家富榮かえける。かゝる目出たき因によりて。金五郎が實の親。文之丞も年來の。勘氣をこの時免されしかば。京師の家には養子をなし。その身は直に東へ下り。親族朋屬に對面して。喜ぶ中に小三の身の果。聞て悲歎の泪にくれ。頻に無常を觀するものから。終に髮を剃佛門に入りて。身を雲水にまかせつゝ。諸國行脚に出しとなん。

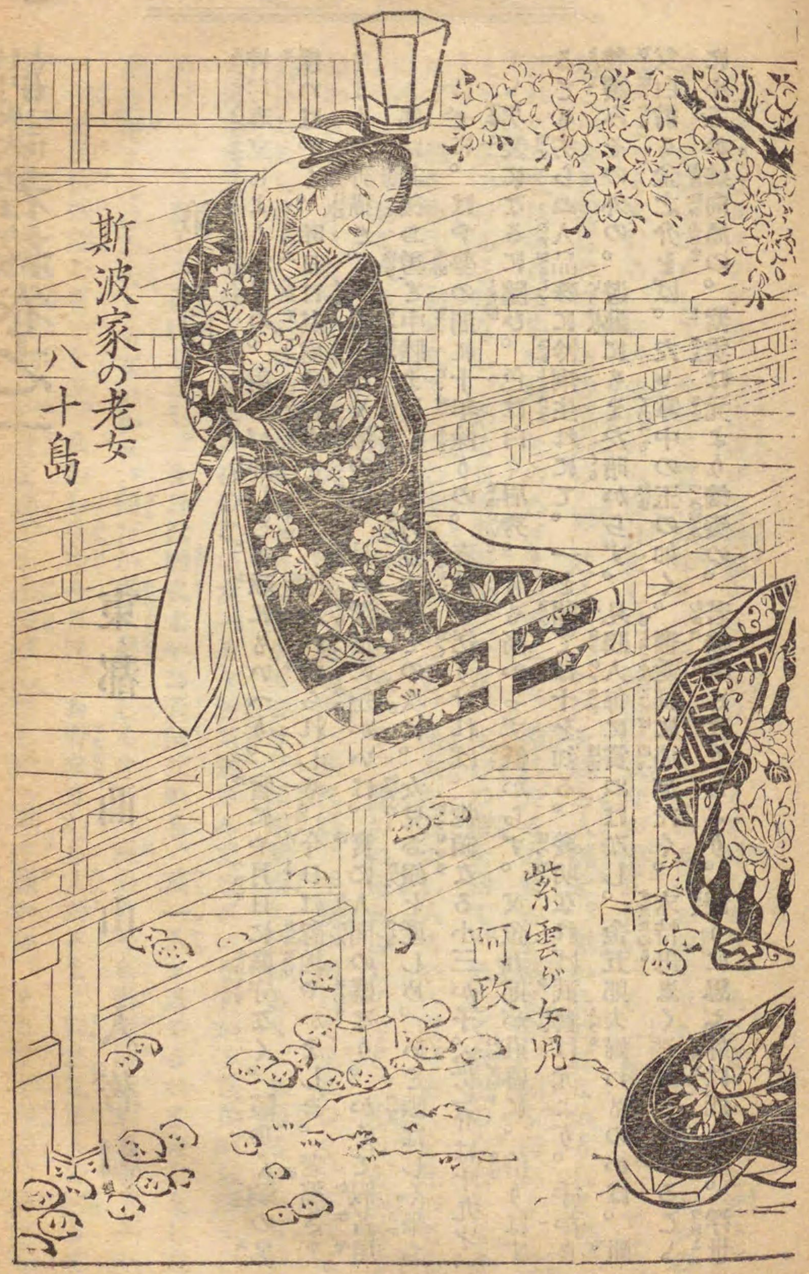
小さん金五郎

假名文章娘節用三編下卷大尾

清談和歌翠初輯叙

南都の帝の御時に。擇まれたりし萬葉集には。三日月をもて嬋娟なる。處女の眉ひきに譬られ。柳の眉とは唐人が。美人を賛るの形容なり。こゝに清談若翠も。則春の景物にて。常磐の松のみどりさへ。春は一しほ色ます。と古人も既に詠れけむ。これ青陽の賛詞。如月彌生卯月たつ。樹々の梢もまたわか緑。夫から日々に繁りゆく。それに慣ひてこの册子も。行末長く世間に。茂らせんとの作者が新案。そこで霞にひく紅の。夜明いさまし初日出。鶯來なく垣穂の梅も。東風和暖に綻ぶる。その春の日の門口に。たてそふ緑松と竹。ちぎりも千代の末かけて。いつもかはらぬ御贔負を。願ひ奉るとまうすになん

江戸　曲山人戯題


斯波家の老女
八十島
紫雲ゞ女児
阿政

仮名屋
金之助

清談若緑卷之一

東都　曲山人著編

第一回

梓弓春立しより年月の。射るが如しと古歌にもいへり。實にや月日に關守なく。隙ゆく駒の足掻いはやく。昨日は其處の花嫁と。人に覗かれ視られしも。今日は忽地やかましき。老婆さまとなりて狆猫と。倶に忌るゝ酒の席。長い浮世に短かいは。實に人間の盛なり。かくて假名屋五郎は其後お雪と中睦ましく。次男金次郎その次に。女兒お銀を產しめ。いと賑はしく榮ふるほどに。はや夢の間に十年餘りの。春秋を送りければ。惣領なる小三が子。金之介は十九才。やゝ男裝になるに隨ひ。色は白く眉秀。脊も高からず低からず。父金五郎が莊盛に。倍りはするとも劣らぬ人品殊に怜悧生れにて。一を聞ては十を知る。發明なれば武藝は元より。手かき物讀みその外の。遊藝にもまた暗からず。見聽人毎に賞ぬはなし。金五郎夫婦へものかは。祖父白翁も金之介をば。たゝ掌中の玉の如く。寵愛詞に述がたく。末恃母まくぞおもひけるこゝに小三か姉向島の。紫雲は元より嫡髮の。若後家となりしより。便りに思ふ妹は死して。浮世

に恃みもなきものから。僥倖近所に難義する。女兒のありと聞および。人を立てこれを貰ひ。藝など仕込を樂として。今年と暮れ來年と。過すほどにこの女兒お政は年も十あまり。六ッの春とぞなりにける。その生れだち直朴にして。標致は式部が源氏にいへる。若紫もこれにやは。勝るべきと思はれて。その品容の嫋なるに。これを視る人魂を。動かさぬはなかりしとぞ。然れどお政は年こそゆかね。その心ざま貞實にて。戯れたる方に心を移さず。朝夕母によく仕えて。生めけるとはなし。ある日假名家金之介は。半日の暇を得て。久しく叔母の左右をもきかず。殊に彌生の初めにて。塢の櫻もほら〳〵と。咲初たるよし人もいへば。それを見がてら向島を志してたち出つゝ。かなた此方をみめぐりや。急がぬ道をふら〳〵と。歩行も遲き牛島わたり。木〻は染ねど秋葉の森。はやその家の門へ來れば。手拭ひ出して足につく。塵など拂ひおとしッゝ。金「ハイ御免なさいトいふ聲きゝつけ。年來紫雲に仕はるゝ。お澤といへる婢女は年も三十七八にて。萬事如在のない女「ヲヤ若旦那さんでございますかト言ながら障子をあけ「サァお上り遊ばしまし。今日は誠によいお天氣だから。萬一入ッさやるかと存じました金「叔母さんはお替りもないかエ。何だか種〻鬧がしくッて。兎かくモウ御無沙汰がちサさわ「ハイ例も御機嫌能ございます。さかし生憎今日は。お寺參りから大師さま。觀音さまへまで廻ると被仰ました。モウ些先刻。仁介を連てお出遊ばしました　金「左樣かエ。そりやァ殘念。さかし

御息才なら。おめにかゝらずとも宜。夫なら吾儕も直に是から。奥の方まで行て見て來やうさわ「アレまア宜ぢやでございませんか。お政さまは入ッたやいますから。まア〳〵お上り遊ばしまし。然してまだ木母寺の方は。花も一向咲ないさうでございますト留る折からお政はかけ出まさ「ヲヤ兄さんよく入ッたやいました。お上ンなさいましさわ「私が幾干お留め申ても。何方へか入ッたやると被仰てお聞遊ばしませんヨ憎らしい。貴嬢お留遊ばせまさ「澤も折角左樣まうしますから。マア〳〵鳥渡お上り遊ばせナ　金「左樣かヲ。實は女計りの所へ上り込ぢやア。人聞が悪いと思つてサさわ「ホ、、、、、叔母さんも矢張女ぢやアございませんかホ、、、、　金「夫は左樣だけれどさわ「ナンノお前樣他人ぢやアお在ンなさるまいし。誠にお堅いとばかり被仰ますヲヘ。さア〳〵お上ンなさいト引あげられては了得また。否にはあらぬ猪名の野や小篠が下にふく風も。心動かす圓居なりさわ「さア漸とお上ンなすつた。實はモウお政さまと唯兩個で。淋しくッて成ません所。サアお嬢さん。貴嬢のお子舎にいたしませう。見晴しが宜から　金「慥か塢がよく見えたッけ。彼處が宜ヲまさ「種々發かつてをりますから　金「ナニ左樣なとにやア搆はねヘ。ハヽアお政さん針線が大分よく出來るヲ肝心だまさ「ナニ一向出來ませんから。當住呵られますトいひながらその縫物を。片わきへおしつけてまさ「アレ御覽なさい。此頃は大造人が出て參りました　金「成ほどこりやア大勢だ。何だお師匠さんでもあるめエ　澤「まアお茶を一ッ。

お嬢さんソレ何か有たぢやアございませんかまさ「ア、金玉糖が。餘まり些だねヘさわ「まア夫でも宜ございますは。今にまた御馳走をいたします　金「無理に引あげたからにやア定めて御馳走は悉皆あるだらンアハヽヽヽヽさわ「夫はモウ當然でございますヲヘお嬢さん　金「此間叔母さんに聞ば。大造琴がうまくお成だといふ事だ何ぞ彈てお聞せなさいナまさ「ホ、、、、、慈母さんが。其樣な啌ばッかり些とも出來はいたしません　金「何も其樣に悋がらずと宜ぢやアないかノウお澤さわ「左樣サお好みならお彈遊ばしましナまさ「夫でも出來ないものヲさわ「アノ此間お貰ひ遊ばした繪を。若旦那さんにお目におかけなさいナまさ「ホンニ誠に奇麗な繪を。お隣から貰ひましたは　金「左樣か。ふヽなるほどこりやア美しいノウ。當時は錦繪も强宜によく成たおかし左樣いふと老年めくけれどさわ「だん〳〵上手になりますヲヘまさ「此方のを御覽遊ばせ。景をよくかきました　金「ハヽなるほどこりやア宜ト兩個は暫く繪に見惚れ。餘念なき躰を見てお澤は莞爾嚬をいらせさわ「ホンニ左樣まて入ッたやる所は誠に何方も劣り勝りなし。桃と櫻の一對の御夫婦さま。何卒早く左樣いたして。あげたいものでございますまさ「ヲヤ否なお澤だノウト顔少し赧らめて身を戻れば。金之介もまだ了得に。戀には疎き少年なれば。同じく顔を赤くなし。何とも言ず繪を見てゐるさわ「夫でも此間旦那さま紫雲の事の被仰ますには。年齢といひ容貌といひ。似つこらしい金之介とお政。自由になるなら夫婦にして。和合暮させたら何樣にか。嬉しから

うと思ふけれど。金之介こそ吾儕がために。マア甥とはいふやうなもの。母も元來本妻ではなし。此方からは言出されぬ。思ふやうにはならぬものサ。と何ぞと言すとそのお斷し。貴嬢もまた何樣かすると。金之介さまのやうな優しいお方が。廣い世間にも多分はあるまい。彼いふお方の御新造さんに。なるお方はどんなマア能月日の下で生れた人だらうと。一度ならず二度か三度。被仰たではございませんか。ホンニ何卒左樣なりますと。數ならぬ私どもまで。何樣に嬉しうございませうトいはれて此方は恥かしさに。いよ〳〵赧らむ緋櫻や。露もつ花の風情にて。さし俯けば金之介も。またいひ出んよしもなく。聞ぬ如くに繪を見てゐる。お澤は餘りにいひ過し。年ゆかぬ身の兩個とも。言いふまほもなか垣の。あればぞ結句妨ならんと。少し笑ひに紛らしてさわ「ドレ何ぞ御馳走の。準備にでもかゝりませうトいひ捨て。衝と立てゆく。金之介は顔をあげ　金「お澤は誠に啞ッ吐だ子まさ「何故でございます　金「夫でもお前が。言もまないとを言たなンぞといふし。また叔母さんのとも。僉あれは啞だらう吾儕のやうな者を。叔母さんはマア兎もかくも。お前が左樣言て呉やう筈がない。何故といふにこの向島は意氣な人や通人ものが。寄凝まつて居る處だ。吾儕等なンざアその衆中の。足下へも寄付れぬへからンまさ「そりやア何樣な人が居ますか。竟に他へ參つたとがないから存ませんが。縱令意氣な人があらうが。通な人があらうが。其樣なのは嫌ひでございます　金「然して何樣なのが宜エト

の顔を覗きこめばお政は莞爾まさ「アレ其樣に御覽なすちやア。否でございます　金「それでもお前が挨拶をまねへものヲ。さア何樣のが好だヨ。左樣お言ト猶すり倚て覗きこめばお政はその儘逃もせずまさ「ハイ此樣なのか好でございますト思ひ切ていひながら。人指ゆびで金之介が。頬のあたりをちよいと突ば。金之介は思はずも。戰慄と身に染む戀風の。やるせなきまで可愛くなり。抱き着んとする處へ。ばた〳〵來る婢女お澤。それぞと兩個は身を少し。離れてこなたをうち視ればさわ「お嬢さん餘まり何もございませんから。おでんを取て參りました。冷ないうち上ませう。お前樣も御一所に。召あがるが宜ございますまさ「ヲヤ左樣かエ。夫なら直に持てお出な。何ぞお殺でもあると宜が。慈母さんがお精進だから。御留守には却て惡いヲさわ「左樣サ不斷から構はす給ろ〳〵と被仰ますけれど。ヲヘ若旦那さん何樣も可笑なもんでございます　金「マア葛樣なもんだらう。然して精進物の方が。第一體の養生にやア宜といふ事だハヽヽヽさわ「その代り多分取て參りました　金「いかさまお澤が氣前を見せたノ。夫でも此樣な物が。近所に有て宜ノウまさ「ナアニ花のうちばかりだからいけませんト是より食事にかゝるなるべし

第二回

かくて其後金之介と。お政は兎かく戀しさの。忘れやらずはありながら。紫雲が家に在ときは。

目をもて知らす事さへならず。たゞ其顔を見るのみを。時にとりての憂はらし。果敢なく心を愚めて。十日餘りを過すほどに。今日は殊さら天氣よく。塢の櫻も爛熳と。さき亂れたる花の色。四方の遊人つどひ來て。これが門邊は市をなせど。お政は兎かく金之介が。俤のみ戀あくがれ。物思はし氣のありさまを。紫雲はそれとも心はつかず。はや年頃の孃の兒。かの鬱症の病もや。出なんかと案じられ　紫「コウお政お前は何だか此頃は。濟ぬ顔つきをして元氣が落たか。何處ぞ鹽梅でも悪いのかエ。若左樣なら隱さずと。お醫者さまに診ておもらひヨ。春先は腹の病ひが動くとやらいふ事だから。はやくお藥でも給たがよいヨトいわれてお政い莞爾としまさ「ヲヤ其樣な氣ちやァございませんが何か異さく見えますかエ　紫「左樣サ何でも鬱ぐやうだ。何ともなくは結搆サ。些氣晴しにこの頃あげた。碪とやらをお浚ひナ。あれはとんだ手が細かで。手琴のうちでは一番たノウ。澤や其處の琴を持て來て遣なヨトいはれてお澤は袋をかけた。嗜みの琴持出せば。母の命の否むもならずお政はやがて拄をかけて。調子合して彈出す。折から一群動也〻と。先を拂ひし。花見の同勢。元より低き眞柴垣。伸あがらねど椽先より。見れば是なん大家の內室。また姫君にや眞先には。燃出る計りの韓紅。同し色なる打紐の。總は花よりまだ赤きを。結び下たる對の箱。次に長刀その次に。結搆善美を盡したる。時繪の乘物日覆は。是も眞紅の花やかさ。朱の長柄傘さし翳し。徐こ練行その行裝。御跡よりは緋網代や。

鉾乘物さへ幾千となく。列を亂さぬ麗めしさ。目を驚す計りなれば。紫雲はさらこ琴彈さして。お政も椽へたち出ッゝ。暫時見送りまさ「あれはまァ。何方さまでございませうヲ。誠に奇麗でございます　紫「左樣さノウあの立派な事。同し人間に生れても。彼樣な結搆なかたもあり。吾吾はおろか着替一ッ自由にならないものもある。ホンニ上を見れば方圖がないと。むかしの人の言たは甘心。あれでも亦その御身では。不足に思し召すともあらうヨト嘶す折から菖蒲革染の。袴をはいたる若黨が「賴んませうトいふ聲に。是は何だと半は仰天。お澤は其處へかけ出てさわ「ハイ何方から入ッたやいました若さ。「これは斯波家の奥女中。八十島どのといはるゝ方が。何やら御用の筋がある。こゝの主人に逢たいとの事。苦しからずは乘物を。是まで舁入れても宜ざるかト思ひよらねばお澤は狼狽。その挨拶もせぬうちに。はや舁入るゝ緋網代の。乘物ひたと舁居れば。中より出るは年の頃。四十計りの氣高き婦人。袿の褄とり持て。徐こ上れば何事にや。合點ゆかねど主人の役。紫雲は其處へたち出て。上座へ通し。妾はこゝの主の尼何の御用と慇懃に。とへば老女の八十島は。莞爾笑つて　八「ヲヽお前が。この家の御主人か容子をいはず押かけ客。さぞ不審に思はつまやらう。態こ是へ參つたは。外でもない今日姫君さま。こゝの櫻を御遊覽。その行列はお前がたも。よく拜まつたであらう。先刻この表をお通りのとき。十六七の娘の兒。琴を彈てあられたが。お駕の中からお目に留り。今御小休みへ

入ッたやると。吾儕を召て何ものゝ。娘か孫か知らねども。何卒侍女にして欲い早う往て聞て見やとの。御意に因て直さまに參つたはその譯サ。なんと御主人斯波さまの。姫君さまの御侍女申さば是も出世の筋。勿論姫君さまの御目に留つて。御所望なさるとなれば。着類その他何一ッ。お前方に苦勞は掛ぬ。僉お上から下さる譯。何樣であらうト藪から棒に。いひかけられては暗の夜に。小判が降て來たよなもの。紫雲は嬉さ有難さ。まづ速にお政を呼で。八十島に引合せ　紫「さて段〳〵の思し召。有難いと申さうか。勿躰ないと申さうか。御請の言葉に困りますほど。何も仔細のない事なら。厚い仰に隨ひまして。不束ながら直樣にも。指あげますのでございますが。仔細と申は他でもなし。母子が斯まて居ますのも。僉本店から一切仕送り。その本店の息子の方へ。是非〳〵嫁に貰ひ度と。伴頭どもから達ての掛合。さやう致せば私も。益安堵と申すわけ。是も早速承知の挨拶。いたすべきでございますが。形は此やうに大きくても。まだやう〳〵十六歳。遲からぬ嫁入相談。いづれ其内挨拶をと。申て置て嬢にも。今日まで申し聞さぬほど。併ながら此節より。御館さまへ御奉公に。出すと申さば本店で。よもや承知はして呉ますまい。よしや承知は致しても。夫では自己の義理もたゝず。此處の譯を御汲とり。宜いやうに御斷りを。貴嬢さまから願ひますト母が詞に始めて知る。思ひもよらぬ緣談に。お政は只管呆るゝのみ。八十島は點頭て「なるほど左樣また譯ならば。御奉公には出

し憎からう。勿論姫君さまの仰にも。藪から棒に申たとて。承知あるか否もまれず。若また其處に差閊があつて。出されぬとなら是非もないが。たゞ折〳〵に十日二十日。乃至一月二月でも。館へ逗留に參るのみは。苦まうも有まいから。夫も能心得てと。御意の有たはこゝの所。何と夫なら姫君さまの。御意の通り逗留に。上るは何の仔細もあるまい。願つてもないよい御緣。ホンニこの兒が僥倖なトいふに紫雲はおそれ入り。仂ないこの女兒を。夫までの厚い仰せ。何で否を申ませう。御奉公と申すでなくば。何時なりとさし上ます　八「左樣聞て吾儕も安堵。ヤレ〳〵不意に押かけて。種〻お世話になりました。さぞ姫さまもお待かね。些も早く參らうヨト暇乞さへそこ〳〵に。供人促し乘物に。ひらりと乘て歸りゆく。跡見おくつて　紫「アヽヤレヤレ。何事が出來たかと。些の間肝を潰した。まかしお政僥倖な。斯波さまといふは假名家の御主君。殊に將軍さまの御連枝で。誠に富貴な御館だから。是を御緣に末長く。お出入すればお前ばかりか。親類迄も僉の僥倖。モシお迎が來て上ッたら。よく氣をつけて思ひの外だと。いはれぬやうに仕なさいトいわれてお政は何とやら。護身影さにもぢ〳〵とまさ「有がたい事は有がたいが。竟しか見た事もないお館の奥。何樣したら宜ものか。一向動靜がまれませんから紫「夫はまた彼お方が。引まはして下さるだらう。たゞ物事内端にして。知れないとは人にきゝ。吾儘といふ氣さへ出さねば。人の突合は出來るもの。不案内は元よりのと。何も構うとはない

まさ「マア夫は左樣といたして。今彼お方へ被仰には。本店から私を。貰ひに來たとはそりやアまア。正眞でございますか　茂「ヲヤまア何だ仰山な顏をしてサ。全躰直にそのことを。噺さうとは思つたが。左樣急ぐとでもなし。夫にまた吾儕が胸に些落ない事もあるから。お前には未だ言なんだが。此頃出たとき伴頭に路で逢たら一件は。何樣でございますと催促ゆゑまだ篤くりと女兒にも。言て聞さずそれ故に。御挨拶もいたさぬが。他ではなし本店のこと。なか〳〵麁略には存じません。いづれ近こ御挨拶をと。言て別れてモウ五六日左樣〳〵捨てもおかれぬ義理合。今日は既にそのことを。お前に言て聞さうと。思ふ所へ不意のお客。よいときにはよいとが。重なつて來るものだ。おかし御奉公は結構と。いふやうなものゝほんの當座此方は一生の身の落着。夫と此とは一ッにやアならない。其處でお政知つての通り。本店の息子喜太郎さんは。阿波はあり脊は低し。餘まり見よい男でもない。畢竟金があればこそサ彼が貧乏人で身形も惡けりや。實に三文が所もない。男振ではあるけれど。何をいふにも分限帳で。五番目とは下らぬ家產其御新造に成て見れば。何一ッ不足はなし。それはほんに諸侯の奧さまより自由が出來て。此樣な僥倖なことはない。お前も定めて否とはいふまい。直に挨拶とも思つたが。イヤ〳〵おかし若い身には。また種〻の願ひもあるもの。親の威光で推つけに。ならぬのは夫婦の中。まア〳〵篤くり言聞してと。思つて今日まで回報をせず。是はこの頃俄の出來事。かねて吾儕は金之介の嫁にしたら宜らうかと。實は內〻金五郎さんに。耳打をまた事もあるが爺父さん文次郎や祖父白翁の事の思し召が何樣あらうかと。金五郎さんも顯然には。いひ出しかねてまづ夫なり。胸に落ぬと言たはその事。おかし是は遠い事差當つて本店は。何でも是非と厚い執心夫へ究るが宜らうと吾儕は思ふか何樣だエトいわれてお政は今さらに否といわれぬ養母の義理。金之介とて思ひをば。運ばすものから新枕かはせしともなき中は。いかにあらんと阽みて。兎斯回答はあらざりけり

清談若緑卷之一終

清談若緑卷之二

東都　曲山人著編

第三回

當下紫雲はお政が面もち。快からず見えければ。是は定めて喜太郎が。男振の醜きを嫌ふものにやあらんと察し。娘心の最ながら。斷りいふべき筋にもあらず。何さま勸めて承知させんと。おもへば言葉を猶和らげ　紫「お政お前は否だとおもふのか。そりやア若い時は吾儕にしても好男子を持たいと思ふは。當然の人情で。誰あつて悪いのを。擇好むものはないが。其處に譯のある事サ。好と思つてお互に。惚れたはれたも當坐のうち。竟一年たち二年たち。子供でも出來てみな。モウその時は好も悪も常になつて嬉しいとも。つらいとも思わぬもの。左樣なつては內證の。善と悪いで苦も樂もある。縱令男が業平か源氏の君のやうぢやとて。內證に苦勞があつた日にやア。一向嬉しいとはない。好男子をながめても。空た腹は滿れぬ道理。昔からよくいふ事。お前と夫婦になるならば。手鍋さげても厭わぬとい。たゞ人情の至極をいふのサ。夫も一旦行末まで。契つた人のとならば。手鍋はおろか諸倶に。袖乞まても厭はぬが。女

の道といふ事だが。お前は左樣いふ人もなし。見かけの醜いを否がるは。無理ではないが夫はほんの。年の往ない嬢氣だ。生さぬ中とはいふものゝ。五歲の時から手にかけて。思へば出入十二年。荒い風にもあてまいと。是まで育てたお前だものヲ。末悪かれとていふものか。よく篤くりと考がへて。左樣仕やうと思ふなら。直に挨拶をしてやるから。ノウ澤や左樣ではないかトいひかけられて思ひよらねど。お澤も俱に執成てさわ「ホンニ御標致が美ものだから。其方此方から種こに。被仰でございませうか。御本店はまた格別被仰通り元からの。御大家といふうちに。また近曾は御地面も。餘ほど殖たと申す噂。何でも七八十箇處もございますか子紫「何樣して其樣なとではないヨ。まだ隱居さんが存生のうち。百箇所の祝ひがあつたが。夫から段〳〵殖たといふヨさわ「ヲヤ〳〵それは承はつたより。大造でございますヲヘ。其處へ入ッまやれば御苦勞なし。其樣な能お口はございません。入ッまやるとお極なさいまし。お嬢さん夫とも。貴嬢はお否でございますかト切に問れて否だとは。吾儘らしくいわれもせず。然とて思ふ人あれば。それを見捨て餘所外へ。嫁入は何とも心にす。兎斯回答を做しかねて。たゞ一言ものいはねば。恥かしきにやまた外に心ありての事なるか。夫さへ計り難ければ。まづ夫なりに其日は過しぬ。斯てお政は千萬の。黃金の中に身をおきてよしや榮曜にくらすとも。思わぬ人におもわれて何を浮世の樂しみに朝なゆふなを送るべきとはおもへども義理のある。母の

命のいと重く。背かば忽地不孝の罪。九ッの世は換るとも。償ふ時はあるへからず。いかゞはせんと胸一ッ。趣舍に心も決せず。夫よりはいとゞ赤く。氣も結ぼれて物ごとの。手には着ぬどその容子を。見するも矢張不孝ぞと。氣を把直して。常こに。變らぬさまには欵待ども。思ひの中にあるときは。其色外に形はるゝ。喩へにもれで何となく。懶きさまを見てとる紫雲。困つたものと思へども。強て勸めて若もまた。病の種ともならんには。是もまた詮なしと。おもへば其後これをいわず。五六日も過すほどに。八十島よりの使として。若黨婢女都て五人。乘物を舁もたらし。先日約束申せし通り。迎ひの人をさし遣す。女兒御を逗留に。上らるゝやう姫君さまの。御意なりと文の趣紫雲はお政に其よし言て。髻髮もちやうど今朝結て。とんだ能都合であつた。手調度や何やかも。取落しのないやうに。取集めて往なさいト迎ひに來る下部等には。酒など出して是を饗應。急いで準備もとゝのへは。卒とて乘物にうち乘ッ。かの供人等にいさなはれ斯波家の奥へそ到りける。かくてお政は上ざまへ。出しは實に初めてなれど。元來怜悧生れなれば。馴れしものより仲こに。氣轉もきゝて姫君の。一段御意に叶ひしのみか。老女八十島を始とし。御傅の女中上下ともに。みな〳〵お政を愛思ひ。最負になさて麁略なく。彼是とするほとに。お政はかねて案じたる心裡も和らぎて。馴染かさなる女同志。憂たきとはさらになく。笑ひて暮す日のみなればかくては長くこの御殿に居るこそまされと思

ひけり。于茲金之介が弟お雪の腹なる。金次郎は今年十三。先頃よりして若君の。御伽の列に召出され。朝暮御殿に在とはいへど。此處と彼處は隔りて。常にはお政も見るとなしこの若君は姫君の。御弟にて在せは。御年も漸こ十一にて。表へはまだ出給はず。然るに因て姫君の御殿へたび〳〵御ン入あり女中たちを對手にして。或ひは目隱し鬼わたし將棋双六何くれと。戯ふれ遊び給ふとき。御伽なりとも十五歳より。以上のものは入と協はず。金次郎は十三なれば差合なしとて若君の。御入のときは金次郎の。御供をせざるとはなしこゝに於て圖らずも。お政は戀しきその人の。弟にあふは猶その人に。逢たる心地せられつゝ餘所ながら言傳して。一人心を慰めけるか。或日金次郎は何やらん。頂て御次へ下り。これを給て居るを見かけまさ「ヲヤ金次郎さんお羨しい美ものをお頂だ子。お茶を持て來てあげやうかト駈ゆきて茶を汲み來りまさ「まだ若さまは御將棋だから。寛りッとお上りヨ然して此頃兄さんは。向島へ入きつたかエ。私も久ふく御殿に居るから一向お目にかゝらないのサ。これは餘まり不躾だが。私も頂いた結搆なお菓子。何卒兄さんにあけたいが。密とお前樣お袂へ入れて。晩にお下りのとき兄さんに。御屆なすつて下さらないか。多分あらばお銀さんにも。あげたいけれど。左樣は無から誰にも無言で。兄さんに密とあげて下さいヨ　次「例でも私は兄さんの。御子舍へ寐ますから當下にあげませうまさ「何卒左樣して下さいまし。お前樣にはまた今度。何ぞ能ものをあげませ

うチト戀には碎く處女の心。看官宜しく汲わけて。その切なるを察しぬかし。落花に心ありけれと。流水さらに心なし。お政は人に知られじと。聲を低うし密語て。恃むとすれと金次郎は。また情合ゑらぬうなひ髪。他に物なと恃まるゝは何となう心嬉しく。常より大きな聲を出して

次「なに誰にも言はゑません。臥るときに是を出して。向島のお政さんか。密とあけろとお言たと申たら。宜らうチトいふにお政は手をもて防ぎまさ「アヽ夫て宜から。其樣な大きな聲てお言なさんな。人さまに聞えるから　次「お頂の御菓子を上るのが。聞えても宜ぢやアないかまさ「夫は隨分宜けれど。アヽモウ宜ヨ。給てお仕舞なら早く奥へお出なさい　次「ドレ奥へ參りませうト立ゆく跡へお侍女お政と同し年齡なる。何れも元氣な處女たち。動也こゝ來つて口こに「お政さんお羨ゑうございます。唯一日お前樣の。身に成たら何樣に嬉しからうまさ「ヲヤ何を被仰のだヲ。僉さんお氣でも違ひはゑないか　○「左樣サ餘まり逆上てをるから。大かた氣でもちがひませうヨまさ「何だか一向分解ません。何樣遊ばしたのでございます　×「ナニ子箇樣でございます。御扈從の金之介さんは。好男子だと奥中の大評判。夫だから彼方の　紋所を附た簪を。態こ打せる人もあり。着物に染て着るものもある位サ。夫をお前がその弟御の。金次郎さんに何か恃んで。密とあげるとお言だから。僉さんが何樣にか。羨しがつて似りたいの。何のかのとお言だヨまさ「ヲヤまア左樣でございますか。御存あるかは知りませんが彼は私の親るいで。

幼稚ときから兄弟も。同樣にして居ましたから。別に好男子だとも。何とも思ひわいたしませんのサ。ホヽヽヽ彼人が。其樣な好男子でございますかヲ。見馴て居ては氣が付きません

▲「其樣にゑらをお切でないヨ。從弟同士は鴨とやら。鷲とやらといひますから。大かた卵もお仕込だらう。隱さずに噺してお聞せナ　○「モシ夫をお言でないと。僉して探ぐるヨ　×「是サ何た騷こゑいヨ。まア靜にしてお噺しナ。お前方の樣にいふと。岡嫉妬とかいふやうで。見ッともないぢやアあるまいか　○「やいた所が及ばぬ戀サ。ゑかしお政さん羨しいヲ　▲「あんな人を三日でも。良人にゑたら夫なりに。死んでも思ひは殘りませんヨ　×「アヽモウ僉口嚴ましい。各こゝの働きで。良人にでも情合にでも。仕て見るが宜ぢやアないか。ゑかし僉さん其樣なことを。餘まり大きな聲でお言なさんな。御存の通り嬶奔なとは。このお館の嚴ゑい制禁。既にお前四五年ほどあと。女中のうちに不義か有て男は切腹女の方は。お下へさげて一生押籠。ヲヽ〳〵モウ怖い事ト嗜なめられて元氣も摧け。みな〳〵立て奥へゆく

第四回

世間萬事儘ならず。因て憂世の名ありとは。賢き人も既にいへり。その儘ならぬ所以は奚ぞや。みな銘こゝの欲によれり。欲だに思ひ斷ときは。儘ならぬこと絶てなし。然はあれども樹下石上

の。敵への道に入といふ。僧法師すら猶欲あり。況て凡夫においてをや。こゝに紫雲はその始め。金之介か育がら。人並〻に勝るをもて。お政をこれに娶合せんと。金五郎には物がたれど。了得に養家の義理もあり。頓にはそれもいひかねて。過ぬるほどに本店より。是非とて貰ひうけられては。否むとさへなか〳〵に。僥倖よしと思へども。一旦假名家へ嘶したる。とばもあれば直さまには。挨拶もせず兎や斯と。思案の折からまた再び。催促うけては捨おかれず。まづ當人の胸を聞。その上の計ひと。言出せしが何とやら。お政は更に回答せず。嫌ふならんと察しても。屢〻責問ふべきもあらず。默止せしうちに斯波家より。迎ひ來りてこのほどは。彼奥御殿に逗留なり。はや近〻に呼戻し。いよ〳〵胸を聞きらんなど。下女のお澤と物かたり。見ゆる向ふへ喘〻と來るは本店の伴頭にて。出久助といふ白髮老爺。小僧一人を供につれ「ハイ御免なさいトいひながら。ずつと通れば「ヲヽこれは。出久助さんかよくお出ト紫雲は形を改めて。紫「サア〳〵一服おあがんなさい。噂をすれば蔭とやら。今も申て居る處サ。定めてお政の一條で。お出なすつたで在ませう。早速否の御返辭を。いたす筈でありましたが。斯波さまのお姫さまが。彼をきつい御贔負で。三日にあげずお召なさる。まさか否とも申されず。實は美事を見習ふが。當人の身の爲と僥倖にして上ますのサ。夫たからその一條も。此頃鳥渡は嘶ましたか。了得に年が往ない故。恥かしいのか佶とした。挨拶もまだ聞ぬうち。亦もお召で

舘へ上り。些未究りませんヨ。ならうならモウ少し待て居て下さいましナトいひも果ぬに呑かけし。烟草をトンと灰吹へはたきも敢すで「そりやァ亦餘まりな長詮義たヲ。夫じやァ吾儕も實に困るテ。まァよく積つて御覽じろ。夫に付てお前の身の。棚御しをするぢやァねへが。隱居さまが寵愛を。さきつた好身で斯樂〻と。下女下男まで使はせて不自由なくして置なさるのは。實に旦那の仁心だ。その餘德で彼孃子も。マァ育てられた譯だらうサ。左樣して見りやァ今度の一件。その日を過さず大きに承知と。挨拶をして貰はねへぢやァ今までの規摸が一向ねへ勿論その位なとを。吾儕どもに指揮を受る。お前ぢやァねへけれど。察しるに彼孃が。大かた否だと言のだらう。否なら否で詮方がねへから。其趣を被仰が宜。何時まで引かけて置たつて。否なものなら出來ねへ相談。結句長引だけ思はくが悪いヲヘ左樣ぢやァでざいやせんかト途中で少し造酒の加減か。例に變る高調子に。紫雲も何やら氣の毒顔　紫「ほんに左樣でございます。便〻と引かけては。旦那の御機嫌もわるい筈。さかし最初から申す通り。彼も取てやう〳〵十六。まだ十五も同し事で世間の事は些とも志らず。餘まり子供でございますからまァ三月でも半年でも他人の中を見せたらば。些は人への應答がらも。出來るであらうと夫や此れやで。實はお舘へ上ますが。否だから挨拶が。遲なわるのだと思し召ては。夫は大きな間違で。被仰通り何から何まで。御恩になる本店へ。私が濟ません。去ながら當人に篤くり承知いた

させず。御挨拶も出來かねますから。翌は早速呼に遣り。申聞して直さまに。回報を申ませうホンニまァお氣の毒ナ。夫ほどのお急ぎとも。思ひませねば大きに延引でく「何だか知らんが若旦那が。何樣だ〳〵と毎日催促餘ほど惚てござると見えるアハ、、、、。然し夫も無理はない吾儕等のやうな老爺でさへ。實はころりと山椒味噌一口嘗たい氣の出る阿孃。他人の空似も母子の因緣。お前が彼樣な盛りには。また一段とそのむかしが。今目前に見えるやうだアハ、、、、ト一杯機嫌　紫「出久助さんがまたお樣で嬉しがらせをお言なさるヨむかしは花の櫻木も。枯ては枝の折人もなし。氣樂なもんでございます。コレ澤やお茶は出來たか野暮なものだが唐饅頭の。貰つたのが有たッけさわ「ハイ〳〵モウお湯が沸ましたでく「イヤ〳〵何もお構ひなさんナ。夫より足元の明るいうち。出かけた方が餘ほど倍サ。夫なら何卒一日も早く。挨拶をしてお呉なさいヨト暇乞さへそこ〳〵に。出久助は歸りゆく。紫雲はお澤にうち對ひ。彼通りだから困り切のサ。お政にいへば何が不足か。否さうな顏をして。欝陶でゐるのを見るも否ス。左樣かと言て他とは違ひ。まんざら斷る譯にもいかず。何故まァお政は否がるだらうノ。男振が氣に入らないのか但しは他に譯があるかノさわ「左樣サ。私にも分解ませんが。先頃貴孃が金の介さまの。嫁に仕たいと被仰た時。誠にお歡び遊ばして。彼は澤や正眞だらうか。然し私のやうなものを。貰つては下さるまいヨ。と被仰てゞありまたが。夫故ぢやァ有ますまいか。夫

より他に私の。心當りはございません　紫「ム、なる程左樣いへば。ホンニ左樣かもしれないヨ。そりやァ亦男の所はどうせ競べもんにやァならないさ。ホ、、、、油斷のならない。モウ其樣な氣が出たのかノウ。まァ〳〵何れ呼よして。聢かりと聞て見やうト夫より文を認めおき。翌朝仁介といふ僕を。遣はしたれど今日は奥に。お客がある故歸られず。翌もまた御狂言明後日は姫君さまの。御誕生日のお祝ひと種〻さし合書並べお暇の出ぬよし。いひ越ければ是ではならぬと。紫雲は直に准備をなし。八十島始め夫〳〵への。土產物など整へて。駕を飛して館へゆき。御諚口にてそのよしを。言入ければ八十島より。切手を出して紫雲を通し。今日はお客で取込故後ほどお目にかゝります。まづ〳〵子舍にて寛こと。お政と噺なされませと。口上がてら奥の方より下るお政は夫と見て。ようこそお出と一禮なす時に紫雲は傍へ倚り。お政を招て聲を低め「態こ來たは他でもない。本店の緣談一條昨夕もぜひと出久助さんが何樣に吾儕を佶目つけたらう。然し何樣もお前の胸が聢かりと分解ないから。まさか不聞に回しも出來すぢ〳〵二三日挨拶を。言延したがサテ何樣だエ。何も吾儘に否の應のと。いふ譯では有まいヲと問れて何かもぢ〳〵せしがまさ「何卒私は緣付ずにこの奥に御奉公を一生いたしたうございますノウ。それは能お心かけだか夫では吾儕は本店の。憎みを受て何樣ならうと夫には構はないといふのだヲまさ「アレ勿躰ないお前樣に構はないと申事が　紫「なかァ其樣なことを言なさんナ。夫

は成ほど御奉公も。結構で好らうが。人にもより時にもよるのサ女ゝ盛年が往ないとつて。餘まりな不了張だヲ。知つての通り他に子はなし。骨を折て育てたは。何卒吾儕も死水を。取つて貰はふ計かりだが。主人持の身になつて。親の死水が自由自在に。取れると思ひなさる歟。勿論親の病ッとといへば。何時でもお暇が。出る物と聞ては居るが。其處が主と家來なら。出ないと言ても詮方はあるまい。まア〳〵夫は夫にもしろ。出久助さんの口諚に。言ないとてもその通り。畢竟吾儕は本店の。お蔭で樂に送る身のうへ。その餘德で育つたお前。下女婢女に仕わふと。言れても腹わたゝれぬ。夫を立派な嫁にさやうといわれるは。身に取て。些も不足はないぢやアないか。夫ならお前は何樣しても。本店の嫁になるのは否かエまさ「否と申すではございませんか。ならう事なら御奉公致して居たうございます　紫「イヱそれは決して成ません。なる位なら此間姫君さまから御意のとき。直にお請を申し上るはまさ「左樣ならばどうなりと。お前樣の宜やうに　紫「宜やうになら本店へ。直すなほに緣付なさいまさ「ハイとばいへと目にもつ涙。後を向てそと拭ふ。折から來る八十島が「是は〳〵慈母さん。奥のお客で大きにお鹿抹。今鳥渡恃み合て。お目に懸りに參りました聞ば何樣やらこの孃の緣付。種ゝ義理のあるさうな。夫では何樣も詮方かない。此孃も段だんお馴染がつくに任せて御奉公いたしたいとの噺しゆゑ。夫なら元より此方は重疊。お姫さまにも御歡びと。既に昨日そのことを。申上た處ちやけれど。

まだお前に確かりと。對談せねば表向。言出さいで丁度宜。惜い事ぢやが御緣のないのか。然し此うへ折ゝは。御機嫌伺ひに上るがよい。コレお政慈母さんに。何ぞ御愛想を志なさらぬかト氣を付られて立あがり。在合の品取出して。進むる傍に八十島が「迚もの序に明後日の。御祝ひが濟で歸るが宜らう。二日や三日は大事あるまい　紫「その噺しさへ極ますれば。隨分宜うでございますト夫より世事の噺に移り。モウ申刻にも程近しと。紫雲は夫ゝ暇乞して向島へと歸りけり

清談若緑卷之二終

東京 曲山人著

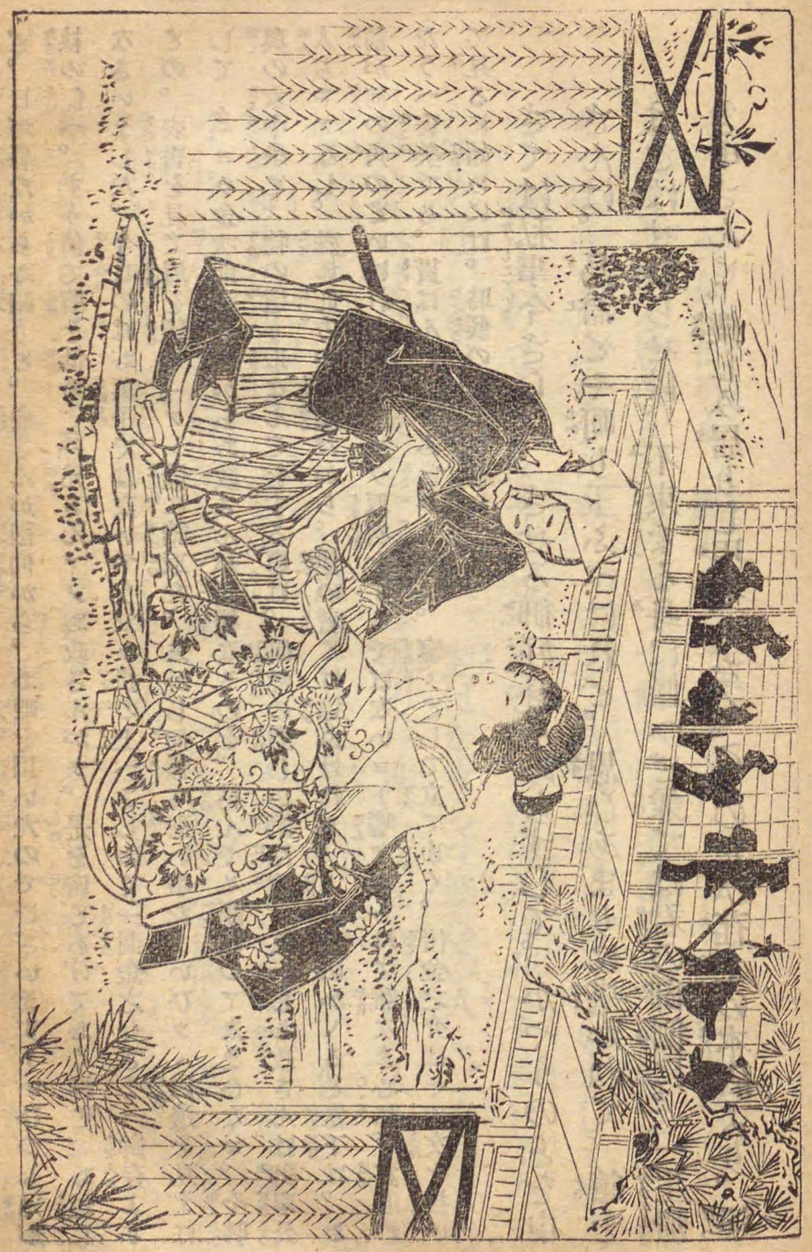
清談若緑卷之三

東都　曲山人著編

第五回

花と見し梢も今は青葉さし。卯の花ぐたし降頃は夏とは名のみ肌寒く。花の衣も脱かへで。之介はたゞ一人。子舎の机にうちもたれ。雲たちおほふ虚空を。うち詠めつゝ一人言「ァ、今日もよく降くらした。モウ郭公も鳴さうなもんだが。誰も聞たといふ噺しもない。夫は左様と奥御殿へ。お政は上つて居るどのと。此頃も金次郎に。お菓子なンぞを持して越して。その志は嬉しいが。彼様な子供に物を恃んで。他に知れちやァ能もない。其事を一寸一筆左様言てやり度が。それもまた安大事だ。此頃向島の澤が口振りぢやァ。何様か本店で達て貰はうと。度〳〵催促をするさうだが。何様成たかまらん。翌あたりは知らん顔で向島へ出かけて動静を聞う。勿論これが正眞の情合になつてるといふぢやァなし。何でも搆はぬ〳〵やうなもんだが。聞ちやァ餘まり嬉しくもねへト訥〻囁くその折から。咳ばらひして入來る爺父。金五郎は妹のお銀に。たばこ盃を提させて。ずつと這入て其處へ居り金五「何だか今日は退屈する日だノウ。夫と

いふが日が長いからだ　金「まかし此様に降ますと。世間が狹いやうでございます金五「トまた之介や去年の暮だつたが。向島の叔母さんが。お政を其方の嫁に仕たいと言なさるから如何さまにも。瑳然やかで容貌はよし。申分はありませんが。何様もお前様が小三の親族だけ。ヲイ夫とも言出しにくい。何ぞ折が有ましたら。老爺や祖父にも噺をして。貰ふやうに仕度もんだと。言たッ限で折もなし。今日までに成た處か。今朝其方は明番から。歸られぬ〳〵とき叔母さんが來てさて先頃お政のことを。内相談もまたッけが。夫もまァお互に。急がぬとと夫なりに。成てる處が本店から。この頃取頻つて是非貰ひたいと伴頭から數回の掛合。此方へ聢かり極てあれば。斷るに仔細もないが左様でないから義理つくでも。何分否といはれない。それに就て昨日も態〻。御殿へ上つてお政をとり極め。今挨拶に往がけだから。鳥渡耳打も仕て置たし。また去年暮の相談は。ほんの内輪のむだ噺しと。水にまてお呉なさるやう言はふと思つて來たとの事。元來此方はまだ何方へも言出また譯ではなし。此方から見りやァ本店は町人でこそあれ大分限。それはお政が僥倖だ。と挨拶して返したが。先頃鳥渡其方が胸を。聞たとも有たから。夫で噺して聞せるのだ。左様思つて居たが宜ト爺父の詞に金之介は。ハイ〳〵畏まりましたト物もなげに挨拶は。するものながら心裡には聊解せぬ這回の縁談。とはいへお政は貰はれ娘いふにいはれぬ義理もあり。また本店に順へば。その身ばかりか叔母御まで。一生の身の爲と



思つて左樣いふ事にしたか。ハテ何にもせよ枕こそ。かはさぬ中とはいひながら心裡では末始終。夫婦と思つて居たものヲ。と今更膂力はおちたれど。兎や角いふべき筋ならぬを。心に悟りて何氣なく。世間噺しをする折から。サアお夜食が出來ましたと。お銀が使ひに金五郎は。立てその身の居間へゆく。跡に熟〻金之介は。猶虚空をうちながめ。端なき世と再三回溜息吻て居たりしが。忽地に思ひ直し。ア吾ながら迷つたり。男女の縁は銘〻が。思ふに任せぬ世の慣はし。そのうへ此方へ貰つた所が。兩親あり祖父さまあり。またその親の隱居あり。稚なけれども小姑兩個みな善人ではありながら。嫁の身では心配苦勞。萬一彼是あつた時には。幼稚ときから恩を請た。叔母御にまでも苦勞をかける。夫より一人で居る方が。心も易く身も廣し。左樣志てみれば本店へ。嫁入するのは双方の。僥倖といふやうなもの左樣じや〳〵と性質。怜悧まゝに先〻この。事まで思ひ廻らして。獨で胸を開くにぞ。曇りし空の晴たる如く。清〻しくも思ふなるべし。兎角する間に日は暮て。机の向へ燈火を照して何やら書てをり。時に弟の金次郎。まだ稚なければ何事の。ありても日暮限りにて。御暇下さるとなれば。急ぎわが家へ歸るや否や。袴もとらず刀さへ。提たる儘に駈來り　次「ハイ兄さん只今歸りました　金「ヲ、今日は些遲かつたノ　次「奥にお狂言がありましたから。若さまの御供して。今まで夫を見て居ました　金「ハ、ァそりやァ面白かつたらうモウお狂言は濟だのか　次「イ、ヱまだ濟はさませんけれ

ど。日が暮たからお歸りと。僉さんが被仰から。お暇を頂いたのでございますトいひつゝ兄が袂の傍へ。すり倚て聲を低め　次「兄さんアノお政さんがネ。是を密とあげておくれと。お越しなさいました。今日のはお菓子ではないやうだト机の上へさしおく一封金之介さまへ御存よりとの。表書を見て眉を顰め「アヽ慥に請取た。まかし何樣も悪い事たトいひツゝ四邊を見まはして　金「ヨウ金次郎や今度からお政さんが此樣なものを。恃んでも斷はつてまをひなヨ。全躰奥の女中衆と。物の遣り取なんぞをする事は。御舘の嚴しい御法度。まかしお政さんは御奉公人ぢやアなし。殊に此方の親類だから。他の者とは違ふけれど。人の目にかゝると當下は。お前が何の角のといはれるから。モウ取次をするではないヨト嗜なめられて稚なき心に。賞られたうへ褒美でも。貰はんとおもふ當がちがひ。寥〻として立てゆく。偖金之介はその文を披いて見るに始めには。時候のとなど認めて

さては私事今さらに。させる御好身もあらずして。かやうのことを申さんは。烏滸とや呵り玉ふべけれど。思ひあまりに堪かねて。筆をはこばせ參らせ候。不束なる身に候へど兼ては君の御側に。一生册き申さんと。樂しみ居りし甲斐もなく。このたび荏土の本店より。達

てのえんだん母事も。斷りかねて近〻に。かしこへ送り候との事。元來義理ある恩深き。母の事にて候へば。否まんやうも候はず。然とて果敢なき身ながらも。一旦思ひ詰たるを。餘所に見なして異人に。册くとのなるべきや。とてもこの身は埋木の花さく春にあひかたきとは。この頃明らめ申候。翌はかならず迎ひの人も。參るよしにて候へば今宵のうちに覺悟を究め。世になき人の數に入りても。心の信たてとほさんと。片意地ながら思ひ詰。心は決し候へど。是まで數多の年月に。大恩うけし母への不孝。よしや彌勒の世となるとも。その罪障の消やらず。業いと深き無間の苦惱も。君ゆゑならは何かは厭はん然ながらたゞの一度。御添ふしもせぬ身にて。かく申さば厚面皮。女子ぞと御さげすみ。有んとは辨へなから。その譯をだに申さずして身を捨たる後斯々と。誰かは君に申すべき。只狂

氣といひなされ。狗死するが悔しさに。認め殘し參らせ候。あはれ此後思し召出されし時は一篇の。御手向をこそ千僧の。供養に倍て

黴熱の。苦艱もわすれ申べく穴賢

と讀畢りて胸に惧きり。是はまた思ひもよらぬ。女心は物ごとに迫り安いと聞ては居れど。死ぬとは餘り短氣なと。ハテ何樣したらと腕をくみ。且く考へ居たりしかァ、僥倖御狂言で。まだお締りは付ずにあらう。然らば密り呼出して。人しらず異見を加へ。無事に濟やう計らふが。斯なつては一番捷徑。向嶋に居るとなら。其樣な不了簡をさせないやうに。手當の仕方もあらうけれと。何をいふにも奥御殿傍の人にはいはれもせず。捨置ては今宵の所。這般いふ文を越す位でなか〳〵無事ては明すまい。困つたものと今さらに。怜悧心もうち亂れ袴引かけ同僚の所へゆくと。僞はりて。案内知つたる奥御殿の庭口近く進み倚り。密に動靜を窺へは。また狂言の最中にて。笛に太鼓にいと賑はしさてこの間に何樣かなと見やる向ふの欅端に一人居るのは定かに夫と。墨計ぬき出しさら〳〵と。三行はかり認めたる。紙へ小石を推つゝみ。發矢と投れは過たず。裾へはつたり駭き拾ふ折ふし雲間の月の影。翳してそれと點頭つゝ。庭口さして徐〻と。歩行來るは是ぞこれ。別人ならぬお政なり

第六回

それと見るより金之介は。傍に忍ひ聲を低め「ナイ〳〵お政さん自己だヨトいふにお政は嬉しさの。飛立ばかりに傍へ倚りまさ「何でも今の書付は。お前樣に違ひあるまいと。嬉しくて當下に。惧きりした胸がアレこの通り。何樣してこゝへ來て下すつたのたエ　金「何樣してと言て此處は滅多に。男の來られる所ぢやァねへが。御狂言があればこそ。誠に今夜は丁度能間た時に先刻金次郎に。持して越したのは慥に届いたが。お前も。あきれた不了張だナ。覺悟を究たとは死ぬといふ事かエ。何も吾儕が二世かけて。約束でもさやァ仕めへし。勿論そりやァ申戯半分に。何卒夫婦になり度ぐれへの。とは言もさたけれど。お前も出世叔母さんも一生安堵といふ塲になつて由緣もねへものに心中立て。死んだ所が始まらねへ。お前が信實な心意氣は。十も二十も分解たから。他に何にも言こなしで叔母さんのいふ通り。本店へ緣付なせへ。緣があつてお互に。逢ときがありやァ自己の方ぢやァ。妹だと思つてゐるから。お前の方ぢやァ不足でも。兄と思つて居るが宜サ。縱令正眞の情合になつても。その條によりやァ奇麗にわかれて。兄弟分になりもすらァ。況てお前と自己が中に。些とも臭へとはなし歟。夫で何もかも宜ぢやアねへか。左樣でもねへ若萬一。不慮なとが有ては濟ねへ。何卒一言いつて聞せてへと。怖ひ

思ひをして此處まで來た。決して馬鹿な不案じを。出しちやァお前つまられへぜト執餂なき强異見。いひ捨て往んとする。袖ひきとめて酸鼻まさ「お前樣の御異見は。五分も違ひのない所。なんぼ魯な私でも。その位なことは知つても居り。まだ其上にも色〳〵と思ひ返して明らめやうと。手まへで自己の心をば。呵つて見ても明らめられず。たゞ一筋にお前樣の。とばッかりが氣になつて。本店の本の字を。聞ても體が戰栗とするほど。縱令これでは何樣明らめて。往た所が一晩も。おちついては居られまい。左樣して見れば益もない。恥を欠たり人騷がし。夫よりいつそ宿へも歸らず。此處で死んだら何樣した譯やら。誰も動靜の知り人はなし。大かた氣でも違つたらうと。いはれた計りで竟濟と。然しお前樣にまで。左樣思はれるは遺憾い。夢になりとも知らせたさ。夫で言てあげました。最早此うへ百萬だら。御異見なすつて下すつても。生てゐる氣はございません。人が見ては御爲にならぬ。サァ〳〵彼方へお出なさい。その代りには貴郎の口から。お題目なり念佛なり。何卒手向て下さいましトいふも哀れな涙聲。了得にこれを聞捨て往にゆかれぬ男氣の。詮はなしとも今一回。いはねば晴ぬ胸のうち思ひまはせば慈しさの。身に染ばかりにおぼえつゝ。お政が右の袂をとらへ金「さて〳〵お前も强諚だノウ。夫ほどまでに死たくは。勝手にしなといふ所を。重言くいふのもお前の爲を。思ふ故だからよく聞な。全躰女は三從と言て。親に從ひ良人に從ひ。年が老ては子に從ふと。本にも書てある

通りだ。夫を自己のわが儘に。まづ第一親に從がはず。それぢやァ良人にも從がふめへし。子となりやァ猶のと。左樣して見れば丸ッきり。女の道に背けた譯。何樣もお前自己だつて。女房にやァ持れめへまさ「エヽト瞻る眼のうちに。涙渾然宵月の。またも曇らんその風情。如何はせんと金之介は。心一ッにおきかねて。途方にくれたる折こそあれ「こゝに居るのは聽に僻もの。其處動くなトいふ聲に。惕り後方をふりむけば。各〻に棒を突たてゝ。前後を取捲夜番の歩卒。南無三これはと金之介。摺倚り內々恃まんと。すれど傍へも寄つけず。「見れば女と唯兩個へン甘くやりおるな。お狂言の騷ぎを僥倖。艶麗とした奥女中を。引出して溫くりと。一文不入に樂しまうとは。イヤ大膽な和郎ではないか。これ〳〵角平このよしを。奥詰衆へ言あげさつ玄やい。兩個の奴等は逃さぬやう。身どもらが番をすると吼り立たる大音聲。洩れ聞えて や袖垣の。こなたの枝折戸きりゝと披き。たち出たる老女八十島。前後に從ふ婢女が。雪洞照して出來り　八「ナニ不義ものがこゝに居とな。ヲヽ皆の衆御苦勞〳〵この奥庭の口より內は。何事があつても吾儕の掛り。まづ一通り聞糺し。表へわたすその時までは。其處に控へて居さつ玄やれトいひ捨て庭下駄はき。徐々歩行ちかづくにぞ。兩箇は心も心ならず。遁れんとすれど其道なく隱れんとすれどその蔭なし。婢女どもは雪洞を。前後よりさしつけて。顏を見らるるそのつらさ。何に喩えんものもなし。八十島これを篤と見て八「これは定めて部屋方ものが。

お庭作の若いものと。悪さをするのであらうとは。思ひの他なるお政どの。夫なる男はアヽ何樣か。顔は常こ見たやうなが。まア兎も角も兩個して。この暗がりに斯して居るは。聞でもまれた不義姪奔。お家の嚴しい制禁とは。知つてか知らずか何にしろ。表立ては躊躇。とはいふものゝお政どのは。御奉公といふではなし。ほんの御殿へ逗留客。御法の通りにせずとも宜らう。男は元より吾儕等の。成敗すべき掛りちやないが。女の方を宥免の。計らひをするからには。男ばかりを表へわたし。嚴まくするのも不便なわけ。一躰お舘の掟といふは。侍分と奥女中が。不義を致せば男は切腹。女は一生押籠と。これは先規の御法ぢやが。今いふ通り逗留客。男は大かたお庭作か。いかにも下賤な者であらう。左樣して見ればその罪を。減じて何樣かト見まはすをり。お政は怖ゝ顔をあけまさ「是には少し容子のあること全く以て姪奔を。いたした譯ではございませんと言尾について金之介も。恥かしながら暗がりへ。顔を反けて　金「お局さま。只一言その譯を。申あげたうござりますがトいはせも敢ず八十島が「アヽその言わけたゝぬ〳〵。瓜の畠へ足を容れば。取らぬといふても人は許さぬ。たとへ何樣した譯あらうとも。男の來られぬ御場所といひ。兩個斯して居るからには。何を證據に不義でない。姪奔でないとはいはさぬ。彼是分解されるほど。只では濟ぬやうになる。見れば若いに親もあらう。また祖父さまもありさうな却て絆がむづかしく。年老までに折磨をかけ。それが本意ぢやあるま

いぞや。ヲヽ兩個の者の刑罰には。彼處に丁度さいはひな。池に繫だアノ小舟。これが矢張彼岸へ。はやくもわたる渡り川。弘誓の舟に象どつて。あらゆる罪もまら波に。洗ひおとせばまたいつかはれて眞如の月を見る。時節もあらうコレ若もの。よく心得て此方へおぢやト心あり氣な言葉の端。婢女どもに指揮まて。徐こあゆめば今さらに。兩個は何と鳴澤の。不時の咎めに氣も轉倒。何とも思ひわくかたなく。後方に着て小腰を屈め。行とはなしに池の岸。きのふの雨に水增て。ひまなくよする漣漪きらめきわたる月影も。雲間に入れば行黑く梢の若葉風わたる。氣色も凄く見えたりけり。八十島は舟を指さし　八「サア兩個とも今いふた。弘誓の舟はそれ其處に。緣しを繫ぐ舫繩とけば行方も白なみに。流るゝ兩個が身の沈落。掟を立て冥土の首途。六道錢はこの身の寸志。成佛せよトかの舟へ突落されて夢のうちに。猶夢見たる心地して。俯しみれば八十島が。情を籠し紙包。夫さへまだも手にとらず婢女どもはたちかゝり。むやひの繩を切とけば。舟は忽地岸邊を離れ。水のまに〳〵流るゝ先へ。かの八十島が指揮にや。以前の歩卒三四人。水門の戸をおしひらけば。逆卷水の勢ひに。舟は落葉の夜あらしに閃めく如く搖おろされ。搖あげられて當國に。その名も高き坂東太郎。其處ともわかず流れゆく。畢竟これより兩個が身のうへ。如何になるらん知るべからず。猶編を闢で解わくべし

清談若緑卷之三終

清談若緑二編叙

明の謝肇淛が語にも。美人は必殃あり。また多くは薄命なり。若これを
して安穏に。天年を終らしめば。人得て事蹟を知るとなしと。嗚呼唐人
も如在なくかの邦の小説にも。多く美人に折磨をさせたり。其處で觀る
人哀れがり。涙を流してさて悦ぶ。實に人情の原く處。和漢古今悉皆同
し。故にわが輩はかなき册子を。綴るにも猶それに據る。されどまはらぬ
筆の毛の。三本足らぬ猿利根。泣せんとすれど生憎に。可咲趣向を笑は
るめり。志かはあれども昔性質に善を善とし悪を悪とし。拙き中にも稚
き人を。竊に諭すの心を籠しは。筆採るものゝ用心にて。自然なる規矩
あるとは。よく〳〵味ひ玉へとまうす

曲山人戯題

清談若緑卷之四

東都　曲山人著編

第七回

凡そ人成長して。好色の道を知れば。少艾を慕ふとかや。これ常人の心にして。大賢既にこれ
を察すこゝに假名屋金之介は。お政が色香に心泥みて。たゞ掌中の珠とのみ思ひたりしも本店
より。強て如此こゝといふを聞。忽地心を飜して思ひ絶んと悟りしは。これ尋常の弱官に。
一等勝れし知量あり然れども猶死を以て。歎くを志れば聞捨られず。喩してこれを穏に。なさ
んとしつゝ掟を背き。奥庭口に徨みて。終に老女に見咎められては。よしや汎方は柳下恵が操
ありとも人は許さず。かの八十島が粹な捌きに。水門よりおし流され。兩個は夢に夢みたる。
心地に漂よふ船の中。兎角思案もつく〳〵と。思へばこれも他生の縁。元來互に好た同志。哀
志き中にも樂みあり。艪械をあやつる人なければ。水のまに〳〵流るゝ舟の。やがて岸邊に片
よりて。一の江といふ所に着ぬ。このとき夜いはや白〻明て。境川岸より下り來る。舟さへこ
ゝへ着ぬれば。數多の旅人動也〻と上りて向ひの茶坊へゆき。朝餉を食ふありさまに。兩個

もこゝより陸へ上り。かく人立のその中には。若知る人やあらんかと。伺ひ見るに認れるものなし。然らばこゝにて吾ゝも。朝餉を給べその上にて。成行をも定めんと。頓て其處なる茶坊へ入りまづその腹をば肥すものから。世間知らずの懐兒。偖これからは何處へとて。往べき當もあらし吹。暈の落葉のそれならで。行方定めぬ身のうへを。兎やせんかくやと語れども。頓に思案はつかざりしが。金之介は佶と考へ。年月こそは立ぬれど。祖父さまは都に在て。手跡學問の指南され。その弟子の澤山なる。中には今に恩を忘れず。暑寒年始の折ゝは。訪ひ音信をする者ありその名も聢とはおぼえねど。彼處へゆきて尋ねなば。緣もゆかりもない土地へ。往より遙に勝らんか。とはいへ彼處は百二十里。蹈もなれざる旅の空。いと覺束なき所爲なから。心當りはたゝ夫のみ。八十島どのが情の賜もの。今見れば五兩ある。是を路用にひとまづは。都へ往んと語らふに。西も東もまだ齒の女兒。護身嚢は限りもなけれど。然はとて身を措く所なし。思ふ男と諸俱に。艱苦はかねて覺悟のと。何をか厭ひ申さんと。いふによりて心を決し。その身は拷の雨衣に。股引脚絆足袋草鞋。お政には中形の。浴衣もとめて引まとはせ。菅の小笠を被らせて。全く旅人の躰に打扮。陸地は人目も鬱悒ければと。舟を雇ひてうちのりッゝ。司馬浦さして漕出たりかゝるべしとは夢にだに。知るよしあらぬ父金五郎。妻のお雪もまだ寐入らず金五「まだ金之介は歸らねへノ。竟しか一晩も明た事はねへが。モウ徐ゝと始めを

るか。若い者はその筈と。自己が昔の身のうへを。考へると無理もねへが。ハテ親馬鹿で案じるものさノゆき「ホンニ何樣したのでございませう。私はいつそモウ。案じられて臥られません金五「其樣に案るとはねへ。大方同僚の若いものと。何處か洒落にでも往たのだらうト了得はその身も粹の果。口にはいへど心には。許すとすれどいとゝ猶案じられつゝ眼もあはず。お雪は霎時起かへり。烟草など呑て考へ居しがゆき「アノお前樣。モウお寐ましたかエ金五「ムゝイゝヤまだ寐ねへゆき「何樣も私は氣に成とがございます。左樣申たらまた餘計に。お案じ遊ばすだらうかと存じて。今まで言ませんが。餘まり歸りが遲いから。お噺しをいたしますがネ。先刻御殿から金次郎が。下つて參つて夫なりに。金之介の子舍へ參るから。衣類を着かへさせやうと。跡から屬て參つて聞と。金之介が申には。何樣もたび〳〵文なンぞの執次は善ない事た。萬一人に知れると。お前が何のかのといはれるから止が宜尤お政さんは。御奉公人ではなし。其うへ親類の事たから。宜やうなものだけれど。與の女中と通路をするのは。お家の嚴しい御制度だからと。言て聞して居ましたから私は夫なりで。内へ這入ず歸りましたが。左樣いたすと金之介が。何か急いで出ましたッ限モウ彼是丑刻過まで。歸りませんから私は。誠に氣になつてなりません金五「ムゝ左樣かハテナト霎時考へありけるが金五「何樣も些異だなア。金次郎を起して聞て見なナトいはれてお雪は金之介が。子舍へ至りて熟く寐たる。金次郎を搖起し。仔細を

きけば箇樣〻と。文をお政に恃まれて。兄に屆けし由をいふ。偖はとお雪は氣も悸めき。急ぎ歸つて良人に告るに。聞ば聞とて氣は易からず。然ばとてこの眞夜中に。いかにとも亦詮方なく。待ば生憎長き夜を。夫婦は語り明すなるべし。兎角して夜も明けれど。その譯だにも知れがたきを。他にいふべきようもあらず。心痛むるその折から。奥口の小遣なる。何某漢士は金五郎が。平生に目をかけおく者なるが。喘〻走來り。分解は具に存ぜねど。昨夜御狂言の眞最中奥庭にて。若旦那と。女中は琻か向島より。逗留客と聞なれば。お政さまにや候べし。何か噺しを仕て居られしを。夜廻りが見て聲をたて。夫から老女の計らひで。兩個ともに御泉水へ。突落したとか申すと。婢女はじめきつい評判。御恩をうける此方のと。氣になつて〻。夜の明るも全輪おく。承はりて參りました。噺しは啌の多いもの。若旦那は何事なく。お宿にお在なさりますかと。問るゝ此方も悶りし金五「ナニ金之介が奥庭で。女と噺しを仕てゐたから。泉水へ陷されたと。成ほど悴は昨夜から。何方へ往たか今に歸らず。夫が眞言の事でもあらうが。然し御制度を破たる。罪は有うとその座で直に左樣いふ事はない筈だがト怪しむ傍に聞ゐるお雪。おもはず流るゝ涙を拭ひゆき「不義は御家の制度といふは。稚い時から聞ては居るが。青春ものには間〻あるならひ。夫を奚ぞや情なく。そのまゝ池へ突落すとは。餘まりな狠いと。そりや老女衆の計らひと歟。老女といへば八十島どの。お上を蓋に非道の刑。何ぞ彼子に意趣

でも有てか。ア、何にもおろ可愛さうに。モシ左樣ならばせめての事。死骸なりとも引取て。弔吊らひも仕て遣たサ。こりやまア何の因果なと前後わかたぬ哀別離苦。金五郎は手を叉き居たりしが顔をあげ金五「元來嚴しい御制度を。破つた身なれば夫も餘義なし。紫雲どのが聞たなら。歎きは勿論悶とおて。狂氣でもせねばよい。定かに斯と極こそせねよき一對の夫婦ぞと。親と親とが心では。許す緣も本店の。所望によつて齟齬これも浮世の義理人情とはいふものゝ今までに左樣した中なら何樣なりと。仕樣も有たが夫ほどの。事とは知らぬが此方の油斷。向島でも氣が付なんだか。既に昨日は本店へ。琻と挨拶を仕にゆく筈。その舌の根もひかぬうち。箇樣いふ事では言譯の。仕やうもなくて難義であらう。親の心を子はおらず。ハテ困つたものだなァト吐息吻くのみ詮方おらず。小遣漢士は然ながら。また宜く實正聞糺し。申しあげんと歸りしが。暫く在てまた來り。よく〻聞ば若旦那と。お政さまに違ひはなけれど。箇樣いふ趣向で舟に乘せ。水門から突流し。お兩個ともにお命には。別條ないと申すと。先ゝ御安堵なされませと。聞てお雪はほつと息。夫では無事でゐるとかと。張裂むねもこの時に。少し落居るその顔を。金五郎はうち視やり金五「不便なれども兩個とも。命がなくは夫までよ。老女が情に存命しては。以來お家の掟もたゝず。紫雲どのへ對しても。この金五郎がいひわけたゝぬ。水門から押流されては。たゞ一派なる坂東太郎。上る所は一の江二の江。往さき知れた不義も